九州縦貫自動車道
埋蔵文化財調査報告

(2)

— 灰塚遺跡 —

1973

宮崎県教育委員会

正誤表

頁	行	誤	正
5	8	8月	9月
5	13	教育委員	教育委員会
5	15	さ北た,	さ礼た。
9	8	1cm	1m
9	25	長方形	方形
22	8	なり	なし
27	11	20cm, で	20cmで,
28	11	尖根形	平根形
46	1	地下室板石積石室	地下式板石積石室
48	3	介さかった	介さなかった
55	9	(　　)	(17)
59	24	1図	32図
67	6	特徴する	特徴とする
70	5	みるべきでのであろう。	みるべきであろう。

例　　言

1. 本報告書は，日本道路公団の九州縦貫自動車道建設事業に伴なう事前緊急調査として宮崎県教育委員会が昭和４７年２月２１日～３月８日，４８年５月２０日～５月３０日の２回にかけて実施したえびの市大字西長江浦字西城，通称灰塚遺跡の調査報告書である。

2. 本稿の中で名称の不統一が見られる。それは地下式横穴と地下式古墳である。これは，先きの「九州縦貫自動車道埋蔵文化財報告書(1)」では，地下式古墳と統一されていた。しかし，この遺構に対する名称はなお流動的であり，しかも今回は，執筆者も変わりその間の協議も行なわれなかったので各担当者の使用名称に従った。

3. 本稿の執筆は，その発掘にあたった調査員があたりその報告文の末尾にそれぞれの文責名を記した。写真撮影及び実測，製図は調査員，補助員の全員があたったが鉄製品の実測，製図は田中茂調査員が担当した。

4. 本調査にあたっての調査計画は，県教育委員会文化課職員寺原俊文課長補佐，森山重実主事があたり，報告書の編集発行についても同職員が中心となり田中茂調査員が協力した。

目　　次

序　章

1　発掘調査の契機と概況 …… 5

2　遺跡の位置と環境 …… 7

第1章

1　地下式横穴 …… 9

第一次調査1号～6号 …… 9

第二次調査7号～17号 …… 21

2　土師器 …… 31

第2章

地下式板石積石室 …… 46

第3章

縄文・弥生関係遺物 …… 53

第4章

灰塚地下式横穴の人骨 …… 72

第5章

結　　語 …… 78

×点　灰塚遺跡所在地

序　章　1　発掘調査の契機と概況

昭和４４年７月，県教育委員会による九州縦貫自動車道予定路線にかかわる埋蔵文化財事前調査の折，当灰塚遺跡に連なる四日市原の台地でえびの地震により天井が陥没した地下式横穴を発見，この台地が地下式横穴の群集地であることが一応確認された。

その後，道路公団の第１期工事が実施されるえびの市から西諸県郡高原町間の２８．８キロメートルにおいて９ヶ所の遺跡を発掘調査して記録保存することを公団側と協議し，昭和４７年７月２５日から同年８月２日にかけて県教育委員会が実施した。当灰塚遺跡も大溝原遺跡として９ヶ所の中に含まれていた。この大溝原の遺跡名は，付近の集落名をとった仮称名で，正しくはえびの市大字西長江浦字西城，通称灰塚（四日市原ともいう）である。以下灰塚の名を用いることにする。しかしながら，用地の買収が進まず前記期間中，本遺跡だけは，ついに発掘調査を実施することができなかった。その後，買収も進み 翌 ４８年２月２１日から県教育委員により地下式横穴を一応調査の目的として発掘を実施した。発掘開始後間もなくこの位置が縄文，弥生，地下式横穴からなる複合遺跡であることが確認された，特に弥生の層からは，終末期の土器群も発見され，この土器と続いて確認された地下式板石積石室それに地下式横穴群との相互関係においてもかなり注目される遺跡であった。この調査は，発掘予定地の北東部にあたる全地域の３分の１を残して３月８日で一応中止した。その理由は，牧草を必要とする旧地主の了解が得られなかったからである。これが灰塚第１次調査である。１次調査では，縄文，弥生の遺跡のほか，地下式板石積石室２基，地下式横穴６基を調査した。残りの予定地に対する調査，すなわち灰塚第２次調査は昭和４８年５月２０日～５月３０日にかけて実施され地下式板石積石室１基，地下式横穴１１基を調査記録した。

なお，発掘調査員は，下記の通りであるが第２次調査のときは多忙にもかかわらず長崎大学医学部解剖学教室の穐吉敏男助教授，同坂田邦洋助手，同加藤哲夫助手の自主的参加協力があった。

第１次調査

調査員　石川恒太郎（宮崎県文化財専門委員）昭和４８年２月２１日～４８年３月　７日
〃　　田中　　茂（宮崎県総合博物館主任）　〃　３月　６日～　〃　３月　８日

調査員	茂山　護	（宮崎県総合博物館主事）	昭和48年2月27日～48年3月	1日
〃	安楽　勉	（宮崎高等学校　教諭）	〃　2月27日～〃	3月 4日
〃	野間　重孝	（宮崎市教育委員会社会教育課）	〃　2月25日～〃	3月 3日
調査補助員	田ノ上　哲	（宮崎大学　学生）	〃　2月21日～〃	3月 8日
〃	面高　哲郎	（〃　〃）	〃　2月27日～〃	3月 8日

第2次調査

調査員	石川恒太郎	（宮崎県文化財専門委員）	昭和49年5月20日～49年5月	25日
〃	田中　茂	（宮崎県総合博物館主任）	〃　5月20日～〃	5月30日
〃	茂山　護	（〃　主事）	〃　5月24日～〃	5月26日
〃	野間　重孝	（宮崎市教育委員会社会教育課）	〃　5月26日～〃	5月29日
〃	安楽　勉	（宮崎高等学校　教諭）	〃　5月26日～〃	5月27日
協力者	内藤　芳篤	（長崎大学医学部　教授）		
〃	穐吉　敏男	（〃　助教授）	〃　5月29日～5〃	5月30日
〃	坂田　邦洋	（〃　助手）	〃　5月29日～〃	5月30日
〃	加藤　哲夫	（〃　助手）	〃　5月29日～〃	5月30日

灰塚遺跡全景

2　位置と環境

灰塚は，縄文，弥生時代それに地下式板石積石室および地下式横穴が構築された古墳時代の3時代にわたる複合遺跡である。当地は，えびの市西長江浦西城に属し一名四日市原ともいわれている。位置は，加久藤盆地のほぼ中央部にあるえびの市役所の南西にあたり，川内川に注ぐ支流長江川の西岸台地上にある。ここから北方を望めば加久藤盆地が眼下に開け，その後方には山なみが連なり国鉄肥薩線や加久藤越えが見える。山の北側は熊本県人吉市である。一方，南側は韓国岳をはじめとして霧島連山の一部が望まれまことに形勝の地である。また，西方は川内川の流れに沿うて国鉄吉都線や国道２６８号線が走り鹿児島県吉松町に通じている。　このように当灰塚遺跡を含むえびの市は，宮崎県，鹿児島県，熊本県の県境に位置している。

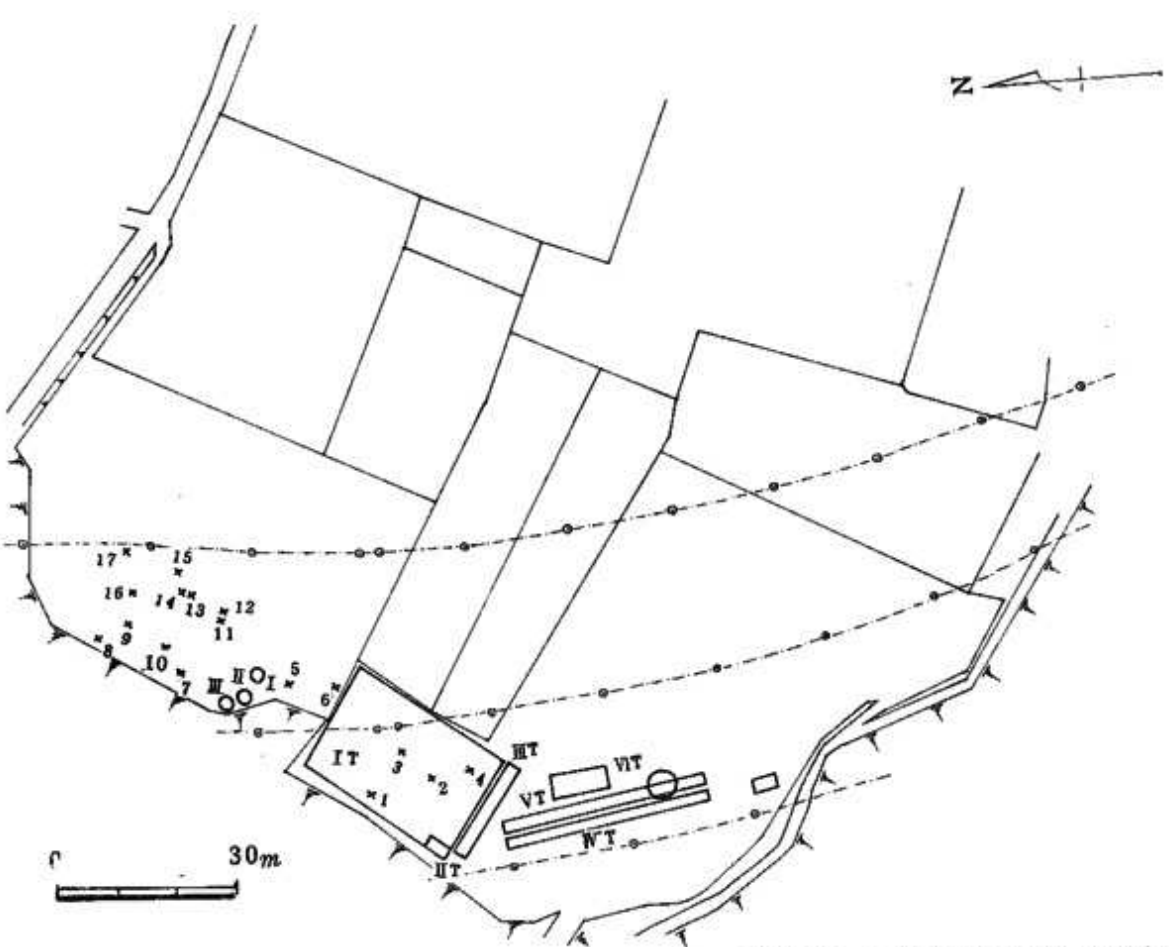
近辺の主な考古学的環境をみると，かつて，帝室博物館に献納された衝角付冑，横矧板鋲留短甲等が出土したといわれる県指定円墳や，昭和４１年８月，横矧板鋲留短甲等が発見された地下式横穴を含む島内平松地下式横穴群は，この灰塚の台地から見下す北西の低位段丘上にある。また，従来から多数の地下式横穴が発見され，県内でも最大の群集地として知られていた上江小木原の地や，昭和４７年度の九州縦貫自動車路線にかかわる一連の発掘調査で発見された久見迫，馬頭観音の各地下式横穴の群集地は東方２．５キロメートルの地点にあった。

この灰塚台地は，標高２６０メートルで川内川流域の水田面からの比高３３メートルである。かつて，加久藤カルデラが湛水していた当時に堆積した加久藤層群を基盤としている。発掘を行なった地域の中部から北部の地層をみると，上層からクロボクといわれる黒色土層（深さ７０センチ～８０センチ），その下が赤褐色土層

（約３５センチ内外）これは第一オレンジ層といわれ，また，地元では赤ホヤと呼んでいる。次が漆黒土層（１５センチ内外），黒色粘質土層（白斑ローム，３２センチ内外），黒褐色土層（白斑と軽石，30センチ内外），淡黄褐色砂質土層（径2～3センチの小礫を含む，１２０センチ内外）と続き，その下は砂バンドを含む親指大の太さを主とする砂礫層になっている。厚さは２メートル程でこの層は一般に四日市原層といわれている。さらにその下に１０数メートルの深さに達するシラス層があり加久藤層群へと続いている。

今回の調査は，台地の北部から北西部の一部にかかる地域でしかも台地の縁端部に沿うて発掘を実施した。位置からみて地下式横穴等を構築するのに絶好の場所である。

（田中　茂）



第１図　灰塚台地地形及び分布図
×地下式横穴
○地下式板石積石室

第１章　地下式横穴

1　地下式横穴

第１号墳

この古墳（図２）は台地の西側の周縁に接したところにあり，竪穴式前室を南に玄室を北にして営まれ，その古墳の中軸線はほぼ正確に南北に方位していた。竪穴式前室は円形で，東西の径８０㎝，南北の径約７０㎝　で羨道に続いている。前室の頂上すなはち竪穴の入口はこの地方で「へゲ石」と呼んでいる扁平な安山岩を数枚並べて塞いでいた。竪穴式前室の深さは１㎝で，底は平坦であった。羨道は竪穴式前室の北方に続いていて入口（羨門）の幅は５５㎝，長さ２０㎝で奥に向って開いており玄室の接点においては幅７０㎝　であった。長さは９０㎝で天井は平らであった。玄室は竪穴式前室と羨道とに直角に長方形を呈し，東西の長さ１６０㎝，奥行（南北）８０㎝，天井は平たく，東方が高く西方が低い。東壁は高さ７０㎝で中央に傾斜して高さ９０㎝でほぼ中央に至り，西壁は５０㎝で中央に傾いていた。奥の北壁は高さ７５㎝で，入口の高さ９０㎝より２０㎝低い。玄室の底面は平坦で，竪穴式前室の底より５㎝ぐらい低かった。

この古墳は竪穴式前室も羨道，玄室もほとんど土に埋まっていたが，遺物は何もなかった。

第２号墳

第２号墳（図３）は第１号墳の南方約９ｍのところにあり，竪穴式前室を北に玄室を南にして営まれていたが，古墳の中軸線は南北の線より３０度東に傾いていた。竪穴式前室はその頂上部を５枚の細長い安山岩を並べて塞がれていたが，竪穴式前室は底が広く上が狭く造られていたが，これは蓋をするのに都合が良いためであろう。竪穴式前室の入口（頂上部）は東西７０㎝，南北５５㎝の長方形であったが，深さ１５０㎝で下に降るに従って広くなり底面は東西，南北各９５㎝の長方形となっていた。羨道はその奥壁に開いており，東と西の壁がそれぞれ１５㎝縮まって，その間に幅５５㎝，長さ東側で１２㎝，西側で１８㎝の羨道があった。羨道と玄室の天井は壊れていたが，高さは８２㎝と計られた。
天井はアーチ形に近い形であったらしく，底は平坦であった。玄室はその奥に続いており，竪穴式前室や羨道に直角に東西に長い長方形であるが，奥壁が西方に

長く伸びているので，平面形は梯形に似た形をしていた。東壁の長さ１２０㎝，奥壁の長さ１９０㎝であるが，奥壁は中央部が張り出していた。西壁は１０５㎝で，北壁は１５０㎝であるが，北壁の東端から５０㎝，西端から４３㎝の間に羨道がある。玄室の天井は壊れていたが，屋根形をなしていたものと思われた。東壁の高さは５０㎝，西壁の高さは５５㎝あり，これから天井に傾斜していた。奥壁は５０㎝残っていたが，羨道の高さから見て８０㎝あったものと考えられた。天井は寄棟造りの屋根形をなし，平入りとなっていたものと思われた。底面は平らで，東壁の北端に壁に平行に剣が１振柄を北にして置かれ，これと交叉して東北隅に鉾を置き剣の柄と交叉して鉾が１振あった。また玄室の中央西寄りに鉄鏃の破片が２個あった。

遺物　剣１振，長さ５６．３㎝，柄部の長さ１２．３㎝木質とその上を巻いている紐の１部がよく残っている。柄幅２．５㎝である。身長４４㎝，身幅中央で３㎝で厚さ０．６㎝である。

鉾身１振　全長３０㎝，身の長さ１８．５㎝，身幅４㎝，厚さ１㎝，鐏（けら）首（ぐち）は長さ１１．５㎝，袋穂の径は２．７㎝である。

第３号墳

地下式第３号墳（図４）は第２号墳の東北約５ｍのところに３枚の蓋石が積重ねられたところと少し離れた北方に１枚の平たい石とがあったので，古墳の破壊されたものと思い，積石を除くと竪穴式前室があった。前室の頂上部は６０㎝四方の隅丸方形に近い形で底に降るに従って広く，底面までの深さ８０㎝，底は平たく７０㎝四方となっていたが，羨道も玄室も破壊されており，計測できず，遺物は何もなかった。思うにこれは形が小さいから，小児の墓であったものと思われるが，竪穴式前室を南に玄室を北にして営まれていた。

第４号墳

地下式第４号墳（図５）は地下式第２号墳の南方約６ｍのところにあって，第１号と第２号と第４号墳とはほとんど１直線上に位置していた。この古墳は形も整然としていて，この地の古墳の代表的な形をしていた。しかし蓋石もなく，遺物は何もなく，既に早く盗掘されたものと思われた。

この古墳の構造は見るべきものがあった。これも竪穴式前室を南に玄室を北に

して営まれていたが，その中軸線はほとんど正確に南北に方位していた。竪穴式前室の入口は1辺を55㎝とする方形で，この部分を蓋石で蔽うていたものと思われる。深さは120㎝で，降るに従って広くなり，底部は1辺を75㎝とする方形で北壁に羨道が開口していた。前室の底面は平坦であった。

羨道は北壁に穿たれており入口の幅60㎝，長さ約20㎝，高さ70㎝で天井はアーチ形であった。玄室は竪穴式前室と羨道とに直角に東西に長い長方形で，東西の長さ170㎝，奥行中央で95㎝，東壁に膨らみがあるが，ほぼ整然たる形をしていた。玄室の底部は羨道の底より約10㎝低く底面は平坦であった。天井の高さは95㎝で寄棟造りの家形をなし，棟の線は東西に通り羨道は平入になっていた。遺物は何もなかったが，2号墳も4号墳も玄室の壁は黄白色を呈していて，何かを塗っているかのように見えたが，自然現象であるかどうか不明で，今後の発見例を俟たねばならない。

第5号墳

地下式第1号墳より第4号墳までは，われわれがA区と名づけたところの第1トレンチの拡張区内にあったが，第5号墳と第6号墳および地下式板石積式石室墳第1号とはB区と名ずけた地区内（A区の北方）にあった。地下式第3号墳の東北方約20mのところにあたる。

この古墳（図6）は玄室の天井が1部破壊されて発見されたもので蓋もなかった。発掘を始めたころに地表下に平たい石が1個あったが，これがこの古墳の蓋石の1つであったものと思われた。竪穴式前室を南に玄室を北にして営まれていたが，古墳の竪穴式前室と羨道，玄室を貫ぬく中軸線は南北より25度東に傾いてていた。竪穴式前室は東西に長い長方形で，東西の長さ100㎝，東西の幅70㎝，深さは110㎝，これは底の方が狭く，東西75㎝，南北50㎝，となっていた。前室の底は平坦であった。羨道は入口の幅45㎝，長さ30㎝，高さ55㎝で天井は平たく，底は前室の底より約15㎝高くして玄室に連なっていた。

玄室は東西に長い長方形で，東西の長さ150㎝，奥行中央で117㎝，天井は平たく高さ65㎝で，底は平らで羨道の底がそのまま延びていた。遺物は玄室の東北隅に鉄鏃が2本南北の方向に刃を北に向けて併行状に置かれ，東南隅にも鉄鏃1本が同じ方向にあった。

遺物のうち鉄鏃1本は，総長14㎝で平根の鉾形で身幅は最広部4．2㎝。

他の１本は総長１４cmで２段の逆刺をもつもので，身幅は最広部２．２cmである。

（石川　恒太郎）

第６号墳

６号墳（図７）は，今回調査した遺跡のほぼ中央に位置し，その主軸はＮ２３°Ｅで，周囲には，北８mの所に地下式横穴５号，１６m南々西に同３号，南西２０mには同１号がそれぞれ構築されていた。本墳も他と同様に竪穴閉塞型式の地下式横穴で第１オレンジ層の上に開口した竪穴を５枚の安山岩で閉塞していたが，すき間から流入した黒土色が充満し内部は完全にふさがれていた。竪穴入口は若干いびつの方形で横６０cm，縦４８cm，底部も方形で横７０cm，縦７０cmの広がりをもち，深さは第１オレンジ層から１２３cmあり竪壙の形は末広がりの截頭角錐状である。羨道は，奥行１５cm，幅６５cm，高さ５２cmと一般に短かい。玄室は羨道に対して横に広がる平入りの形式で床面プランはほぼ方形を呈し奥行き１２５cm，幅は奥壁で１５０cm，中央部で１８５cmあり，本地下式横穴群で最も広い玄室であった。天井は，破壊と剝落のため形状を見ることはできないが，奥壁，側壁との連なりや他号との比較からやはり四注式造りであったと思われる。床面の深さは，地表から２１０cm，第１オレンジ層の下部を天井として，その下の白斑ローム及び白斑とパミス混りの黒褐色粘質土層をくり抜いて玄室を造り淡黄褐色砂質土層を床面としていた。人骨は，完全に腐朽したとみえ検出できなかったがシラスが３cm程の厚さで一面に敷きつめられていた。副葬品は，玄室の北東側壁下に剣が３本側壁に平行して置かれていた。その副葬状態をみると玄室内寄りにある剣は，切先の部分が欠失していたが莖を南東に向け，その位置は，真中に副葬されていた長剣の中程に莖尻があった。３本のうち中央に副葬されていた長い剣は，逆に莖を奥壁に向けていた。側壁寄りの３本目の剣は，玄室内寄りに副葬されていた剣と同様莖を南東切先を奥壁に向けて置いていたが，その場所は全く逆で中央の長剣をはさんで平行移動したかのように長剣の中程から南東寄りに位置していた。

副　葬　品

剣

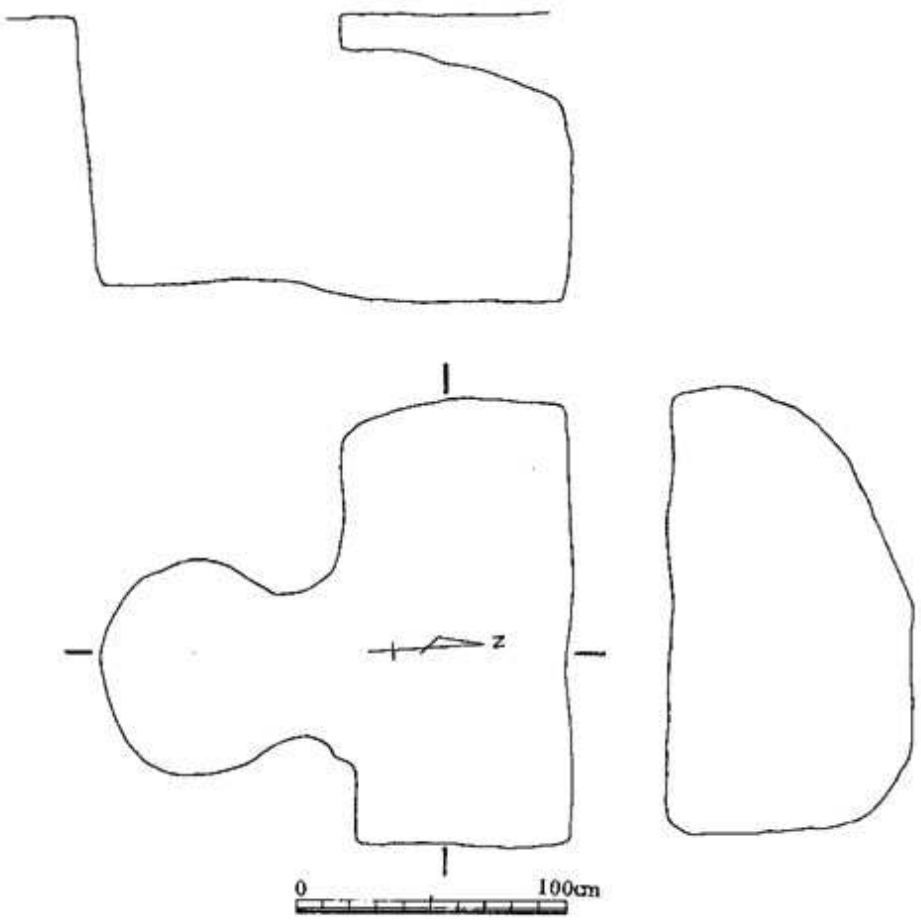
①　玄室の内寄りに副葬されていた剣，図８の(4)は，身の中程から切先にかけ

て欠失しており，現長３０㎝。柄木が残っているが，鉄錆のため造りは不明，ただわずかな部分で細い糸が繋く巻かれているのがわかる程度である。柄の長さ１１．３㎝，柄元幅４．５㎝。剣身は，鎬がみられ，身幅関寄りで４㎝先端部寄りで３㎝である。

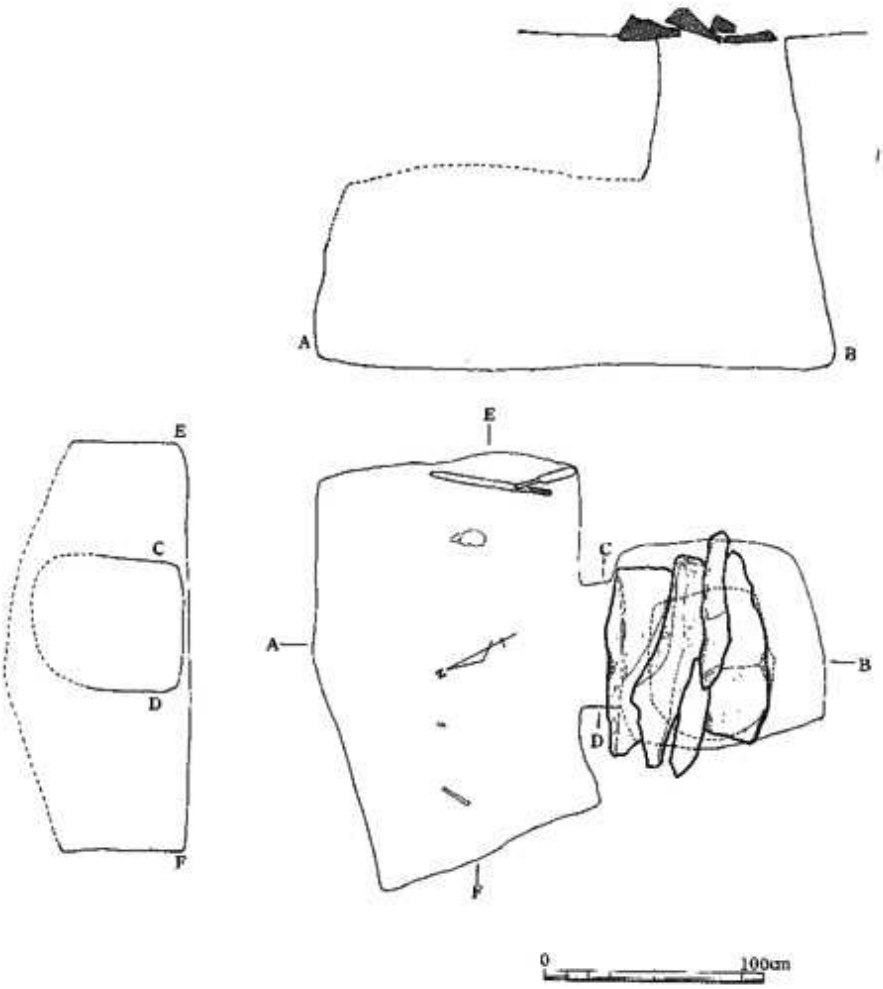
② 図８の(3)，３本のうち中央に副葬されていた剣でほぼ完形に近い状態にあった。全長６４㎝で外装の木質部がところどころ残っている。莖の長さは，１３．１㎝，柄元には木質部が残っているが，拵は不明である。剣身は鎬造りで身幅中央で３．２㎝，厚さ０．７㎝である。

③ 図８の(5)．側壁寄りに副葬されていた剣で全身２６．８㎝，莖の部分は柄木でおおわれているが鉄錆のため拵は全く不明，長さ７㎝，身幅は中程で２．５㎝，厚さ０．４㎝である。

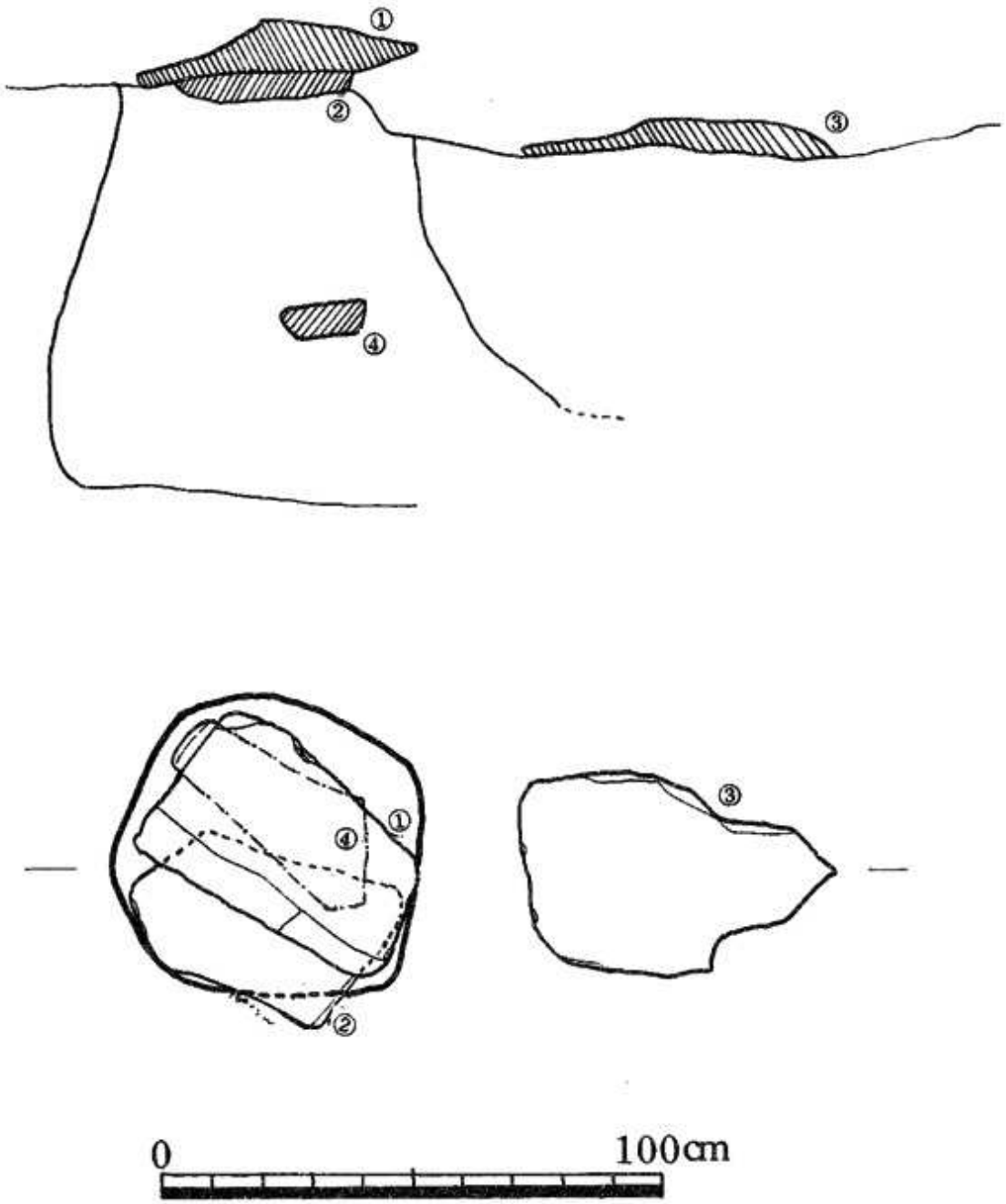
（田中　茂）



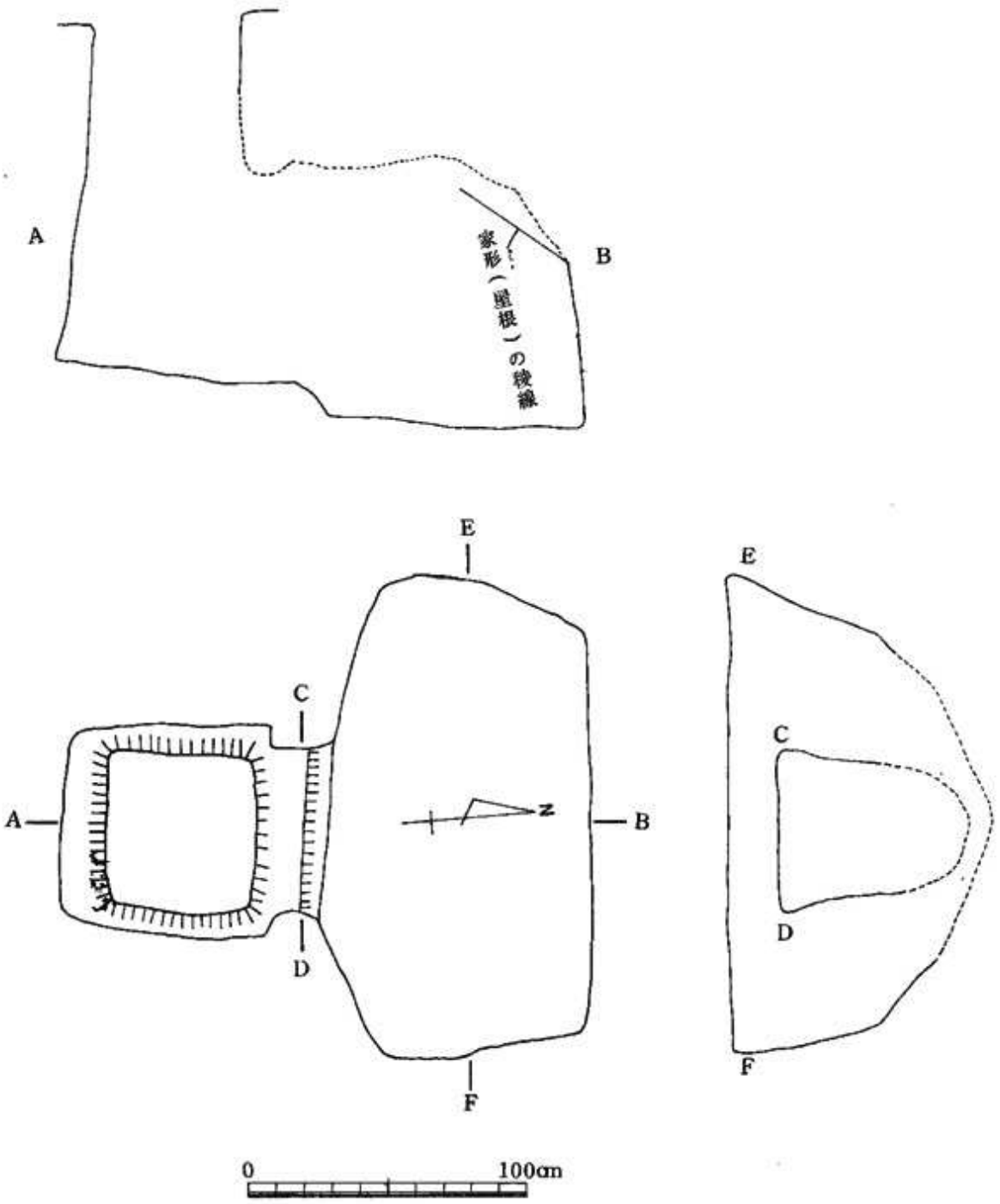
第2図　地下式横穴1号



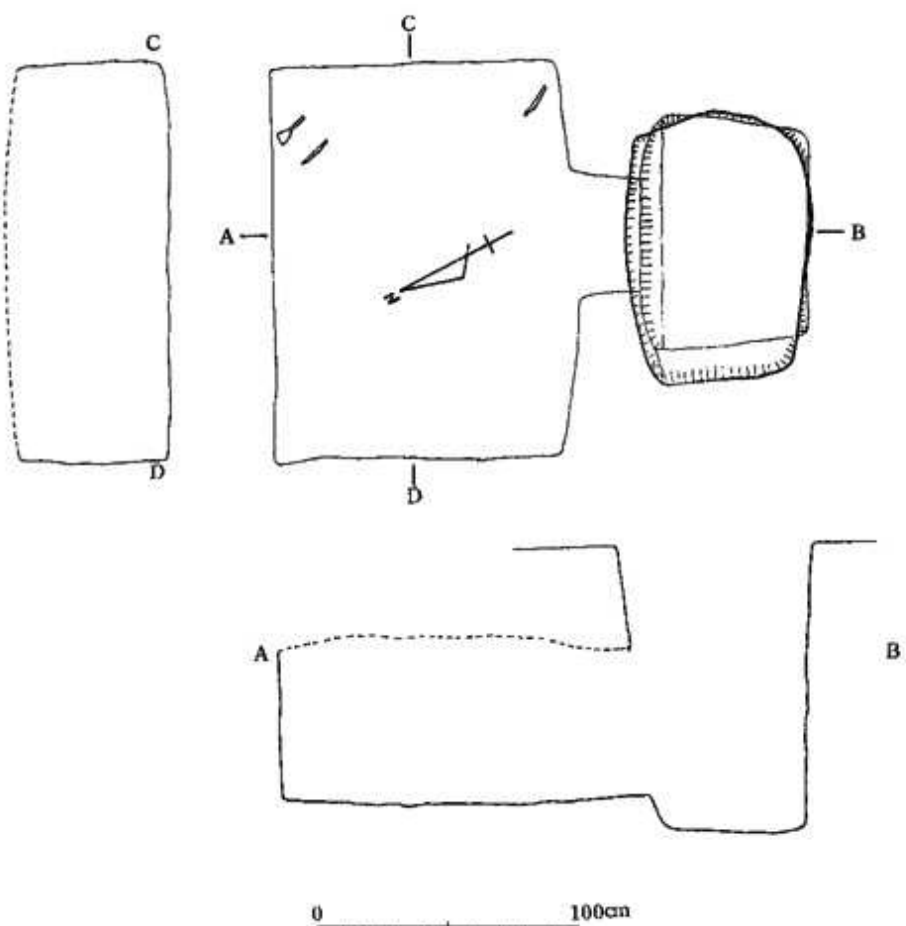
第3図　地下式横穴2号



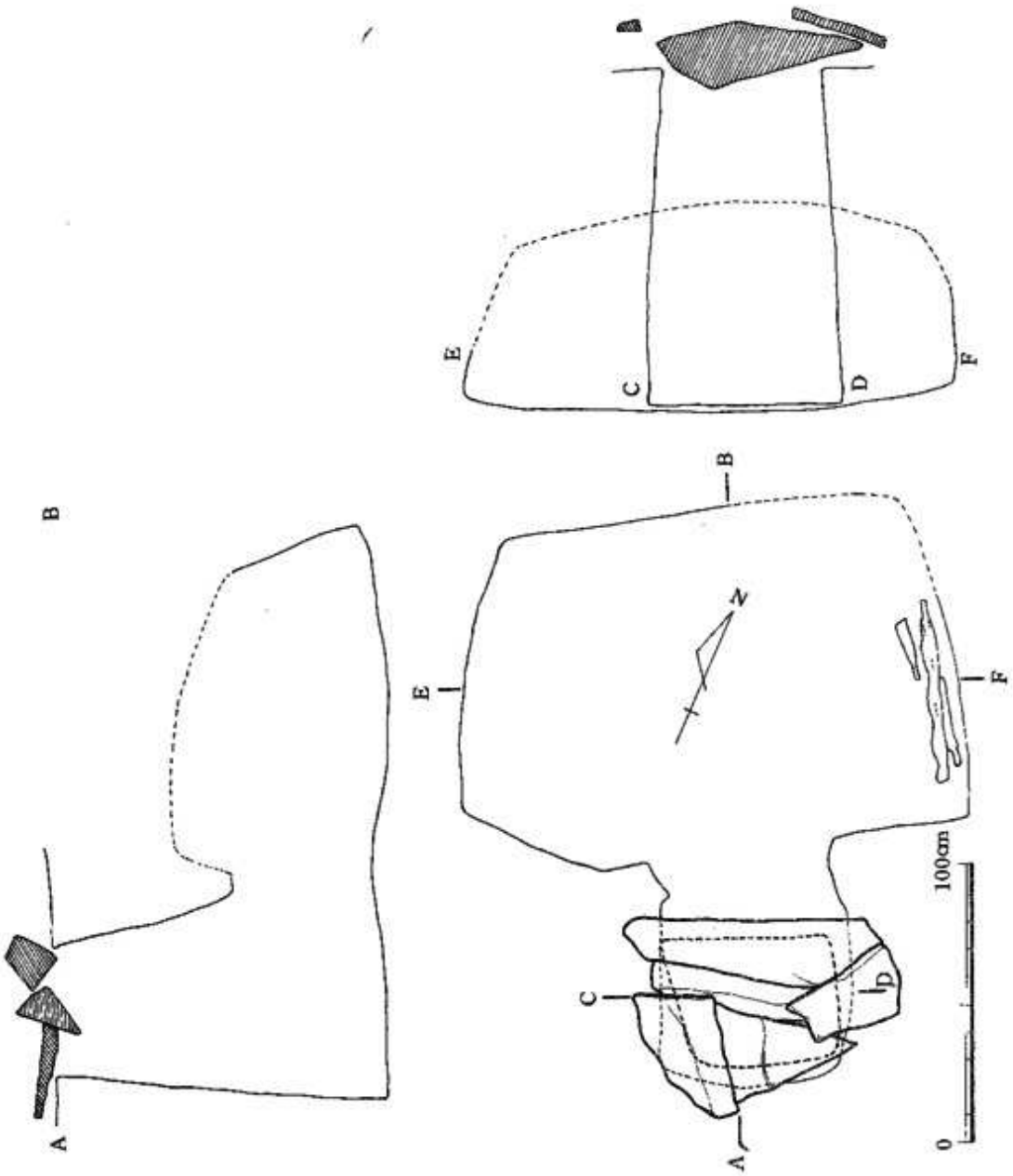
第4図　地下式横穴3号



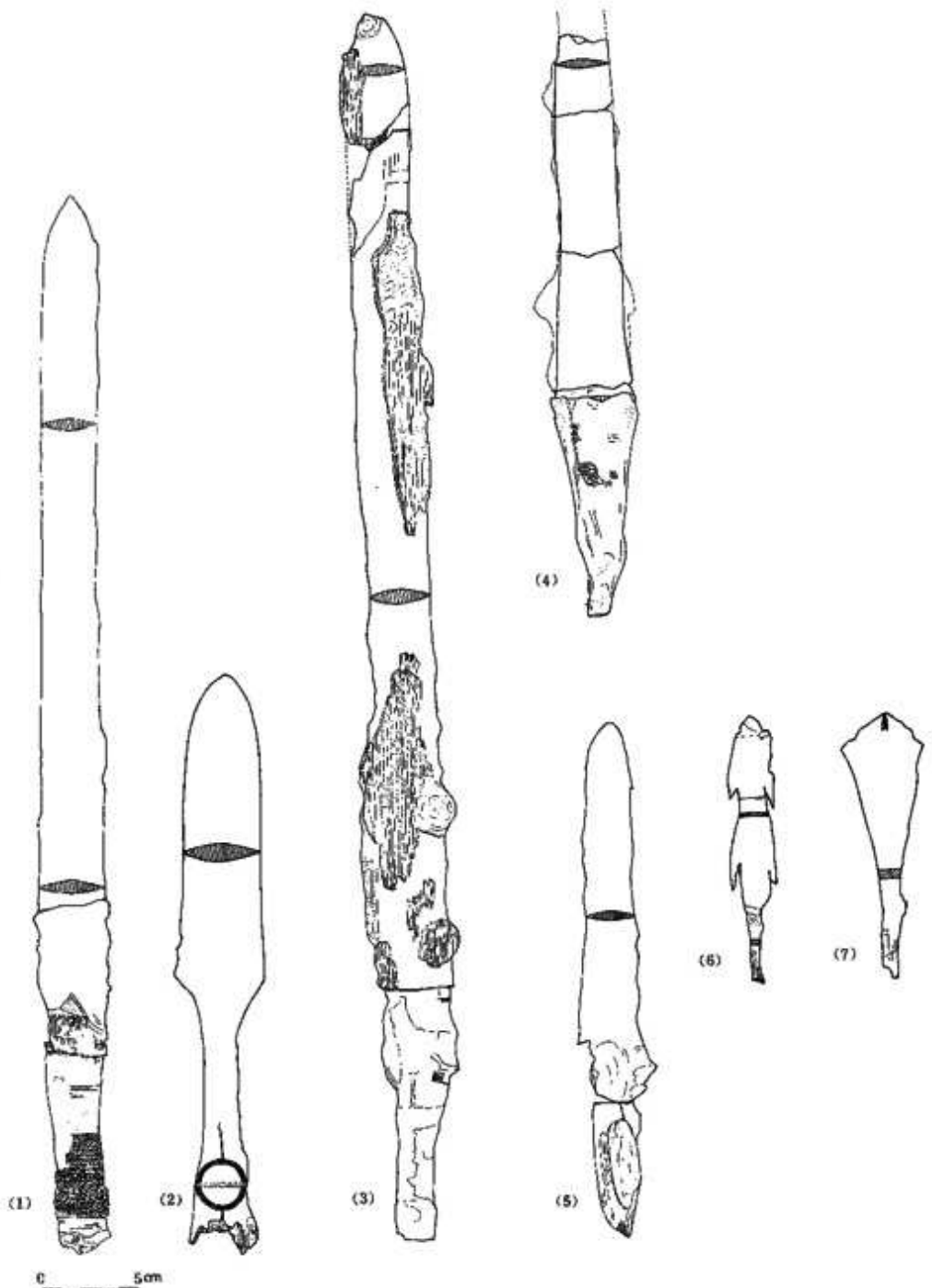
第5図　地下式横穴4号



第6図　地下式横穴5号



第7図　地下式横穴6号



第8図　(1)・(2)　2号出土
(3)・(4)・(5) 6号出土
(6)・(7)　5号出土

第７号墳

地下式第７号墳（図１０）から同１７号墳までは関係台地の西北部で，当時牧草の植えてあった畑に群在し，特に第１１号墳と第１２号墳・第１３号墳と第１４号墳などは相接していた。第７号墳は台地の周縁に接し，第５号墳の北方約１５ｍのところにあり，竪穴式前室を西南に，玄室を東北にして営まれていた。

この地区の地下式古墳については，われわれは蓋石の上部に盛土があったかどうかということを調べることに重点を置いたが，何れも蓋の上方に褐色の土が高さ５０cm内外存在することを確認したが，人夫たちもこの事実に気づき，褐色の土が出ると「近くに石があるぞ」という程になった。この褐色の土は玄室などを掘った土で，その余った土で竪穴式前室の上の蓋石や玄室の上を蔽うたものであることが知られた。

第７号墳の蓋石を除くと，直径６０cm内外の竪穴式前室の入口（頂上部）が現われた。中の土を除くと，前室の西南部（外側）の壁はやや外に反った形に穿たれており，前室の深さは１００cm，底部は直径６５cmの円形をなし，その東北方に羨道が続いていた。羨道には何らの閉塞もなく幅５７cm，長さ３０cm，高さ８０cmで天井は平らで，ややロの方に開き，底も平坦であった。玄室は羨道と直角に長方形に造られており，長さ１４５cm，奥行は東南壁で１００cm，西北壁で８５cmでやや西北が狭い。奥壁はやや丸味をもって天井に接しており，天井は起伏があるがほぼ平らである。床面も平らで竪穴式石室から同じ高さで続いている。遺物は奥壁に接して北方に頭蓋骨が１個あり，南西隅に近く脛骨などの破片があったから，人骨１体が奥壁に接して平行に葬られていたことが知られる。副葬品は玄室の西北隅に近く剣１振が柄を東に鋒を西にして置かれていた。

遺物，剣１振，総長２３cmうち柄長７．３cm，身は鋩を欠損しており，身幅中央で２．７cm，厚さ０．５cmである。

第８号墳

地下式第８号墳（図１１）は第７号墳の東北約４ｍのところにあり，この古墳は西北より東南に方位し，竪穴式前室や羨道を西北に，玄室を東南にして営まれており，古墳の中軸線は南北より３０度西に傾いていた。竪穴式前室は数枚の安山岩で入口を閉塞されており，蓋石を除くと５５cm，四方の隅丸方形の入口（頂上）が穿たれており，深さ９５cm，竪穴は下底がやや広く，東西６０cm，南北

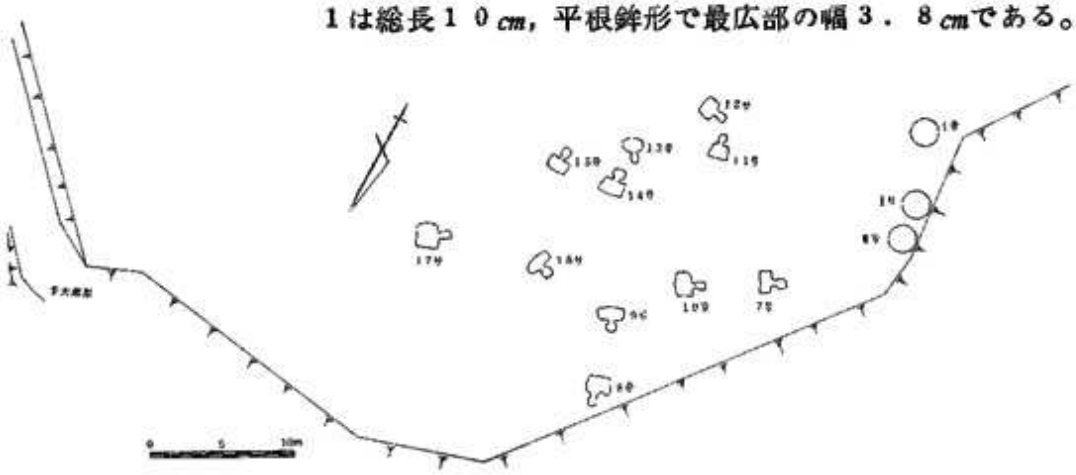
６５cmとなる。底面は平坦で羨道に接し，羨道は入口の幅５０cm，長さ３０cmであるが，東側は壁が狭まって羨道に接していたが，西側は竪穴式前室の壁がそのまま奥に伸びて羨道の壁となっていた。羨道は天井も底面も平坦で玄室に接していた。玄室はその奥に続いており竪穴式前室や羨道と直角に，東西に長い長方形で，長さ１７０cm，奥行は東壁で９５cm，西壁は９０cmで東壁に中央の幅１３cmの棚状施設があり，南壁にも幅５cm内外の棚状施設があった。玄室の底面は平坦で竪穴式前室および羨道に続いており，天井は高さ６５cmで寄棟造の屋根形をなり棟は東西に走り，その両端から四方に屋根が降りていた。

人骨はすでに消滅しており，副葬品は西側の棚上に剣が１振柄を北に鉾を南にしてあり，柄部に鉄鏃３本が刃を三方に向けて置かれ，棚の下に剣が１振，柄を南に鉾を北に向けてあった。これは棚からずり落ちたものであろう。

遺物　剣１振　　これは棚上にあったもので総長５６cm，うち柄長６cm，柄幅２．３cm，柄部鍔口に木質が残っている。身は３ヶ所で折れているが接合して完全形となる。身には鞘の木質が残っており，身幅は先端近くで３cm，厚さ０．５cmである。

剣１振　　これは棚の下にあったもので，総長６２cm，うち柄長１４．５cm，莖幅１．７cmで鍔口や中央部に木質が残っている。身幅は先端近くで２．７cm，厚さ０．６cmであるが鞘の木質がよく残り，鞘幅５cm，鞘厚２cmでこの部分の剣身は幅４cm，厚さ１．２cmが測られる。

鉄鏃３本　　１は総長１４cm，平根鉾形で最広部の幅３．３cm。
１は総長１３．５cm，平根鉾形で最広部の幅３cm。
１は総長１０cm，平根鉾形で最広部の幅３．８cmである。



第９図　灰塚第２次調査地下式横穴・地下式板石積石室分布図

第9号墳

第9号墳（図12）は第8号墳の東北方約6mのところにあり，竪穴式前室と羨道を北に，玄室を南にして営まれていたが，古墳の中軸線は南北の方向より約30度西に傾いていた。この古墳も竪穴式前室を扁平な安山岩数枚で蓋をしていたが，これを取り去ると，長さ55cmの隅丸方形の入口が現われたが，竪穴式前室の深さは1mで入口は南側が高く北側が約10cm低い。前室の底面は幅65cm，奥行55cmの楕円状をなし，その底部は羨道と玄室に向って傾斜しており，その傾斜は玄室の南壁で13cm低くなっている。羨道は入口の幅50cm，長さ20cmで奥に向ってやや広がっていた。底面は平らであるが，やはり玄室に向って傾斜している。天井は剝落があったが中央が半円形に凸起して凸字状を呈していた。玄室の底面は約5cm羨道および竪穴式前室より低く，この部分全体にシラスを敷きつめておりこれによって竪穴式前室や羨道と同じ傾斜となっていた。玄室の天井もほぼ平らで，高さは65cmであった。玄室はやはり竪穴式前室と羨道に直角に，東西に長い長方形で，長さ148cm，奥行80cm，天井は平らで高さ70cmであった。

遺物は玄室の中央西壁に接して4体分の頭蓋骨が，ほぼ完全な形で残っていた。そしてその頭蓋骨から東方東壁までの間に骨々が点在し，大腿骨，脛骨などがあった。副葬品は羨道から玄室の入口にかけて環頭太刀1振が，柄部を西に鋒を東にして，外部からの侵入者を阻むかのように，横たえられていたのが印象的であった。この外，西壁の南隅に鉄鏃1本と剣1振が，十字形に交叉してあった。また玄室の東北隅に鉄鏃2本が北壁と東壁に平行して刃を西に向けて直角形に置いてあった。

遺物　環頭太刀1振　総長70cm，うち柄長19cm，柄幅3cm，柄部には木質が多く残っている。柄頭は高さ4cm，幅4．5cmの環頭で，環の径は0．6cmである。刀身は中央で3cm，棟幅0．8cmである。

剣1振　総長55cm，うち柄長12．5cm，柄幅1．5cm，柄頭から2cmのところに目釘穴が1個ある。身幅3cm，厚さ0．6cmである。

鉄鏃3本　1は総長17cmの平根鉾形で，刃の最広部の幅4．5cmである。

1は総長15．7cm，平根鉾形で刃の最広部の幅4．5cm。

1は総長14．8cm，平根鉾形で刃の最広部の幅3．7cm。

第１０号墳

地下式第１０号墳（図１３）は第９号墳の西北方約５ｍを隔つる周縁に接する所にあり，この古墳は西南に竪穴式前室を置き玄室を東北にして営まれていたが，この古墳の中軸線は南北の方位より４０度東に傾いていた。これも竪穴式前室を平たい数枚の安山岩で閉塞していたが，これらの石を取り除くと，東西５５㎝，南北５０㎝の四角形の竪穴式前室の入口があった。そして前室は下に降るに従って均１的にやや広くなり，深さは１１０㎝で，底部の広さは東西６２㎝，南北６５㎝の四角形となり底部は平らで羨道に連なっていた。羨道はその奥にあり，入口の幅５０㎝，長さ３５㎝，高さ７０㎝で天井はアーチ形を呈していた。玄室は竪穴式前室や羨道に対して直角に長い長方形をなし，東西の幅１７３㎝，奥行中央で１２０㎝，北壁の中央西寄りに張出しがある。底面は羨道より約１０㎝低く奥に高くなっているが，床面の４㎝内外の厚さに混軽石火山灰層が出ている。天井は平らで高さ７０㎝である。

遺物は玄室の東北隅に近く２個の頭蓋骨があっただけである。

なおこの古墳については蓋石の上の土層について調べたが，蓋石は地表下約６０㎝のところにあり，この古墳の玄室の底は現在の地表下２１０㎝のところにあるが，この場所では地表下５０㎝に黒土層があり，その下に厚さ１０㎝内外の黒褐色土層があり，約４５㎝の第１オレンジ土層があり，その下に厚さ１ｍの褐色粘質土層があり混軽石火山灰土層となる。そして古墳の玄室や羨道などはこの褐色粘質土層に掘込まれているのであるが，その土は蓋石の上約５０㎝に積っていた。これはこの台地が畑となった際，盛土を削った結果であって，昔はもっと高く積まれていたことが知られる。

第１１号墳

第１１号墳（図１４）は第７号墳の東方約９ｍを隔つる所にあり，竪穴式前室を南に，玄室を北にして営まれていたが，古墳の中軸線はほぼ正しく南北に方位していた。この古墳も竪穴式前室の上を２枚の扁平な安山岩で閉塞していた。石を除くと南北５０㎝，東西４２㎝の四角形の竪穴式前室の入口が発見された。この穴も深さ９０㎝で底がやや広がり底面は東西６０㎝，南北６０㎝で北壁に羨道が開いていた。底部は平らで羨道に向ってやや傾斜していた。羨道は入口の幅５０㎝，長さ２０㎝，高さ５５㎝で底面は平たく，天井も平らであった。玄室は

その奥に続いていて竪穴式前室や羨道に対して直角に長く東西中央で１３０㎝，南北１００㎝であったが，奥壁の長さ１４５㎝，南壁の長さ１１０㎝であるから玄室は梯形を呈し，全体の平面形はビン状を呈していた。床面は平らで，天井は高さ６０㎝で平坦であった。

遺物は玄室の入口に長い刀が１振，柄を東に鋒を西に，刃を外に向けて侵入者を阻むかのように置いてあった。これは第９号墳の素環頭太刀と同様であった。さらに東壁に接して剣１振，刀の傍らに鉄鏃が１本あった。

遺物，刀１振，総長８３．５㎝，うち柄長１６㎝，柄幅２㎝で柄には木質が多く遺存している。身幅３㎝，棟幅０．７㎝で４片に折れているが接合して完全となすことができる。

剣１振　総長２５㎝，うち柄長５．５㎝，莖幅１．５㎝で目釘穴が１個ある。身幅中央で３．５㎝，厚さ０．７㎝。

鉄鏃１本　総長１６㎝，平根鋒形，最広部の幅４㎝である。

第１２号墳

地下式第１２号墳（図１４）は第１１号墳と僅かに３０㎝の間隔を置いて八字状に存在した。第１１号墳と対称的に竪穴式前室や羨道を西に玄室を東にして営まれていたが，その方位は殆んど正確に東西南北に位置していた。竪穴式前室の入口は数個の石で蓋をされており，この石を取除くと，東西７３㎝，南北５５㎝の楕円に近い長方形の入口があったが，中の堆土を除くと底に近く剣１振と鉄鏃１本が重なって柄を北壁に接して鋒を下に斜めに置かれていた。前室に土師などがある例はあるが，剣や鏃が置かれている例は最初の発見であった。前室は深さ９０㎝，前室壁がそのまま伸びて羨道となっていた。底は羨道に向って傾いていた。羨道は幅５５㎝，長さ２０㎝，高さ６０㎝で天井は平らで外にやや開いていた。玄室はその奥にあり，羨道に対して直角に長く，長さ１５０㎝，奥行１００㎝で底部は平らで混軽石火山灰土層が２㎝内外敷いたように存在した。天井は寄棟造りの屋根形で棟は南北に通り，高さ８０㎝で，１部剝落はあったが正しい形をしていた。玄室の遺物は鉄鏃７本が玄室の東南隅に１塊りとなっていた。

遺物　剣１振　これは竪穴式前室にあったもので総長６８㎝，折れているのが接合して完全となる。うち柄長１４．５㎝，莖幅１．５㎝，柄頭から３㎝の所に目釘穴が１個ある。身には鞘の木質が多く付着しているが，身幅３．５㎝，厚さ

0．7㎝である。

鏃1本　これは竪穴式前室に剣と共にあったもので総長21．5㎝，平根鉾形で，最広部の幅4．5㎝。

鏃1本　これも上に同じで総長14．5㎝，平根鉾形，最広部の幅4㎝。

鏃7本　これは玄室にあったもので何れも平根で鉾形3本，2段逆刺1本，他は一段逆刺のものである。

（石川　恒太郎）

第13号墳

13号墳（図15）は，11号，12号の北東1mの所にあり，北東の14号に接して構築されていた。蓋石は，赤褐色土層の上にあり，他の地下式横穴と同様安山岩を削平した石材，地元でいうヘゲイシを利用して入口を閉塞していた。13号墳は，この灰塚地下式横穴群の中では最も小さく，北西に竪壙，南東に玄室を設け全長174㎝であった。内部には流入土が充満しており規模が小さいので土の排除には難渋した。竪壙入口のプランは，ほぼ方形で最大幅55㎝，竪壙の深さは，赤褐色土層からわずか85㎝，底部の幅は60㎝でこれも方形状であった。羨道部は奥行き20㎝，幅50㎝，天井の高さ50㎝と小さく，しかも玄室との境が判然としないタイプのものである。玄室は，竪壙および羨道に対して横に広がるつまり平入りの形式で天井は所々剝落していたが四注造りの姿をとどめていた。奥行き97㎝，中央幅140㎝，天井の高さ60㎝で成人ひとりはいるのがやっとという広さでおそらく羨門部分から腹ばいの格好で掘削したものと推定される。

玄室の奥壁東寄りに剣が1本切先を北東に向け奥壁に対して平行に副葬されていた。この剣の副葬位置からみて被葬者は頭部を北東にして葬られ，また，玄室その他の規模からみて小人だったと考えられる。

副葬品

剣　　身の長さ13．8㎝，莖6．7㎝，身幅は中央で3㎝，身の厚さ切先寄りで0．4㎝，断面は，鉄錆で明瞭ではないが菱形と推定される。関は両関で直角式造りに近い。莖の一部には，木質が残存している。全体的に見て長さが短いわりには身幅が広く寸のつまった形をしている。

（田中　　茂）

第１４号墳

地下式第１４号墳（図１６）は，第１３号墳の東方約１００㎝程，隔てたところに位置し，竪穴を南に，玄室を北にして，南北の方位にあり，主軸を１０度程，東にふって造られていた。竪穴は安山岩の縦長の板石５枚で閉塞されており，閉塞石はすべて南北の方位に用いられていた。また形状は方形で南北に７７㎝，東西９０㎝であった。閉塞石をとりはずすと竪穴は完全に埋っていた。このことは，埋葬後竪穴を５枚の板石のみで閉塞し，その後流入土によって埋ったのにしては，閉塞石の直下から，かなり堆積土が締っているため，埋葬時点かあるいは後世に何らかの事由により意識的に埋めたのではないかと思われる。

羨道も埋っていたが，非較的良く残っていた。側壁の上部から天井にかけては，一部分が剝落していた。入口幅５０㎝，長さ２０㎝で天井は平らで，高さ６５㎝，底も平らであった。

玄室は，東西に長い長方形の床面をしており，奥行１００㎝，東西１５８㎝であった。天井は剝落しており，現存の高さは７０㎝で平らかったようである。玄室の床面は，平坦で遺物は東側の側壁にそって剣１振が副葬されていた。

遺物　図２２の(3)

剣　１　　全長２７．１㎝，身長１９．２㎝，身幅２．２㎝，莖幅１．６㎝，厚さ０．５㎝で，細身の短剣であり，保存状態が非較的良好であり，目釘孔もはっきり残っている。

第１５墳

地下式第１５墳（図１７）は，１４号墳の東南の約３５０㎝程隔てたところに位置し，竪穴を南に玄室を北にして，南北の方位にあり，主軸を４度程西にふって造られていた。竪穴は安山岩の縦長の板石４枚で閉塞されており，閉塞石は総て南北の方向に用いられていた、また竪穴の形状は方形で，上部は南北５５㎝，東西５７㎝，下部で南北８０㎝，東西８５㎝で深さ９５㎝である。閉塞石をとりはずすと竪穴は，完全に埋っていた。このことは埋葬後竪穴を４枚の板石で閉塞し，その後流入土によって埋ったのにしては，閉塞石の直下からかなり堆積土が締っているため，第１４号墳と同様のことがいえるのではないかと思われる。

羨道及び玄室にもかなりの土量が堆積していた。羨道部は入口幅４５㎝，長さ２０㎝，高さ４５㎝で底は平らであり，天井は剝落していた。

玄室は東西に長い長方形の平坦な床面をしており，奥行９０cm，東西１５０cmで正面奥壁に寄せ棟造りがみられ，天井は一部分が剥落しているが，東西の方向の棟木の部分が残り，寄せ棟造りの形式が確認された。

遺物は，玄室東側，南隅の側壁にそって剣１振りと西側の中央部の床面に鉄鏃２本が幅葬されていた。

遺物　図２２の(5)～(7)

(1) 剣　１　　全長３１．１cm，身長２６cm，身幅２８cm，莖幅２．０cm，厚さ０．５cmで細身の短剣であり，保存状態が非較的良好であり，目釘孔もはっきり残っている。

(2) 鉄鏃　イ）長さ１１cm，刃幅３．２cmの平根形

ロ）長さ（現存で）１０．５cm，刃幅３．７cmの尖根形で柄の部分を欠損している。

（野間　重孝）

第１６号墳

第１６号墳（図１８）は，９号と１７号のほぼ中間に位置する。蓋石には３枚の安山岩が利用されていた。方位は竪壙をほぼ西にし，羨道，玄室を東にして構築されていたが，その中軸線は，東西の線から南に２０度傾いていた。蓋石を除去すると黒色土が竪壙に充満しそれは羨道から玄室部まで及んでいた。竪壙入口は，ほぼ方形で最大幅５０cm，深さは赤褐色土層（第１オレンジ層）から１２０cm，底部プランは隅丸方形で最大幅は６７cmである。従って竪壙は若干末広がりに掘下げられている。竪壙上部閉塞形式の地下式横穴では，この末広がりの方法は度々見られ，特に顕著な例としては，小林市尾中原地下式横穴がある。

羨道部は短かく，奥行き１５cm，幅４５cm，高さ５８cmで玄室に続いているが，床面が竪壙底部より一段あがっているのが異色であり，その比高は約１０cm程である。玄室は，四注造りに構築され平入りで奥行き６０cm，幅１８５cm，天井の高さ７２cmの大きさで床面プランはほぼ隅丸方形を呈していた。土層は，淡黄褐色砂質土層の中まで掘下げられていた。他の遺構と同じように床面にはシラスが薄くしかれていた。

人骨は１体分で，玄室の中軸線からやや左，すなわち北側，長軸の左中央に頭

骨が残存していたが，酸性の強い火山灰の流入土で若干おおわれていたため保存状態は悪かった。長崎大学の坂田邦洋助手の調査により，下顎骨は埋葬当時の位置にあると推定されるが頭蓋部は右に９０度ずれ顔面が西を向いた状態にあることがわかった。

また，この頭骨の位置から６２㎝はなれた東南の側壁隅寄りに大腿骨と脛骨が各各残存していた。この状態からみて埋葬は，仰臥屈葬だったことがわかる。発掘後の長崎大学医学部の調査により被葬者は年令は不明であるが男性であることが確認された。

副葬品は，剣が１本で頭骨に最も近い羨道北側から玄室左前壁へカーブした２０㎝程の所に切先を上にして斜めに立てかけてあった。このように剣や直刀を斜めに立てかける例は他の地下式横穴でも度々見られる副葬法である。

副葬品　図２２の(4)

剣　　ほぼ完形品で全長２８．６㎝，莖５．２㎝，身幅は中央近くで３．２㎝，両関の直角式造りである。

第１７号墳

第１７号墳（図１９）は，１６号墳から７ｍ東方，縦貫自動車道予定路線外に最も近い場所から発見された。蓋石は，６枚の安山岩を利用し，その閉塞は全ての石の長軸が地下式横穴の主軸に沿うて平行に置かれていた。このうち北側に位置した蓋石の上やその周辺から土師式土器高坏の破片が発見された。竪壙内には流入した黒色土が充満しており更に玄室内部も天井近くまで及んでいた。この流入土を排除する際，竪壙内からやはり土師の高坏破片が発見された。これは蓋石の上に重なるような状態で発見された破片と同一個体のものでおそらく上部から土と一緒に下へ流れこんだものと推定される。

竪壙の入口は方形で幅約５０㎝，深さ赤褐色土層（第１オレンジ層）から130㎝，底部プランは，隅丸方形で最大幅７０㎝，やはり末広がりに掘下げられていた。羨道は奥行きが短かく２０㎝，幅は比較的広く６０㎝，天井の高さも８７㎝あった。このような竪壙上部閉塞型式の地下式横穴では，羨門部に何等の施設や構築もないのが普通であるが，１７号では，羨門部の両壁に５㎝～１０㎝幅の縦に続く切りこみがあり横穴の閉塞用の切りこみに酷似していた。しかし，周辺には，閉塞に用いられるような礫もブロック状の粘土もなく推定しがたい切りこみ

であった。板木等のような腐朽し易い有機物質が使用されていたとも考えられるがそのような例は今まで発見されておらず今後の問題としたい。

１７号墳は，西から東にかけて構築され全長２４５㎝，玄室は，平入りの四注造りで床面プランは隅丸方形であった。天井の剝落も少なく軒先きも造られており規模も大きくこの地下式横穴群中では代表的な遺構であった。玄室奥行き150㎝，幅は羨道寄りで１６０㎝，奥壁で１４０㎝，天井の高さは１００㎝あり，軒先き（棚状）までの高さ奥壁で５５㎝，北壁４２㎝，南壁５５㎝，西側は羨道部に連絡するので軒先きの切りこみはなく，天井から傾斜した面は羨道部の中央天井まで下っており，その位置からまた上り羨門入口に続いている。従って羨道部天井の縦断面は逆三角形状を呈している。

構築された遺構の地層は前述したように，深さ８０㎝程に堆積した黒色土層，その下に深さ３０幅の第１オレンジ層がある。この第１オレンジ層を天井とし，白斑ローム と黒褐色土層をくり抜き更にその下の淡黄褐色砂質層まで掘りこんでいた。従って地表から玄室床面までの深さは２２５㎝程になる。床面には同じようにシラスが２～３㎝程の厚さで一面に敷きつめられており天井まで付着していた。しかし，シラスは元来さらさらした性質なのでそれがどうしてこのように今日まで天井に付着していたのか，その目的と共に疑問であった。

天井の近くまで黒色の火山灰土が充満していたので人骨は完全に腐朽していた。副葬品は，玄室南側の奥寄りしかも壁面に沿うて剣が１本斜めに立てかけており，続いてその手前に矛身が鏃先きを前にした状態で出土した。剣は保存が悪くすでに大部分が朽ち果てていた。剣の位置から北側２５㎝～４５㎝の所に平根の鉄鏃があり，それは１本と錆でくっつき合った３本とに分れて発見された。この鉄器の副葬状態からみて被葬者は，剣，矛が置いてあった南壁側を頭部として埋葬され，鉄鏃の位置は胸部付近になると推定される。

副葬品

１．鉄鏃　図２２の(8)～（１０）は，錆着した状態で発見された鉄鏃である。

(8)　円頭腸抉２段型の平根鏃で茎の部分は欠失している。現長１０．８㎝。

(9)　平根三角鏃，茎欠失，現長８．７㎝。

(10）平根柳葉形鏃，現長８．４㎝

(11）平根三角鏃，現長１３㎝，最大身幅４．５㎝，茎の基部に矢柄が残っている。竹管が使用され，その上に桜の皮が残存していた。

(2)矛身　基部は若干欠損している。現長２４．５㎝，刃部（穂）の断面は菱形で身幅１．６㎝，厚さ０．７㎝，袋は円筒形で外径３．０㎝，内径２．１㎝。
(3)剣　　剣の保存状態は悪くほとんど朽ち果て長さも推定し難い。しかし莖は残っており長さ１１．５㎝である。

2　土師器

(1)コップ形土器

図２３の(1)～(5)は，地下式横穴第８号の北東４ｍ程の黒色土層中から発見されたものである。

(1)のコップ形土器は，丸底で中すぼみになっている。器高８．６㎝，口径８㎝，腹径（中すぼみの所）６．７㎝，色調黄褐色で焼成良好，ほぼ完形品である。

(2)高坏脚台

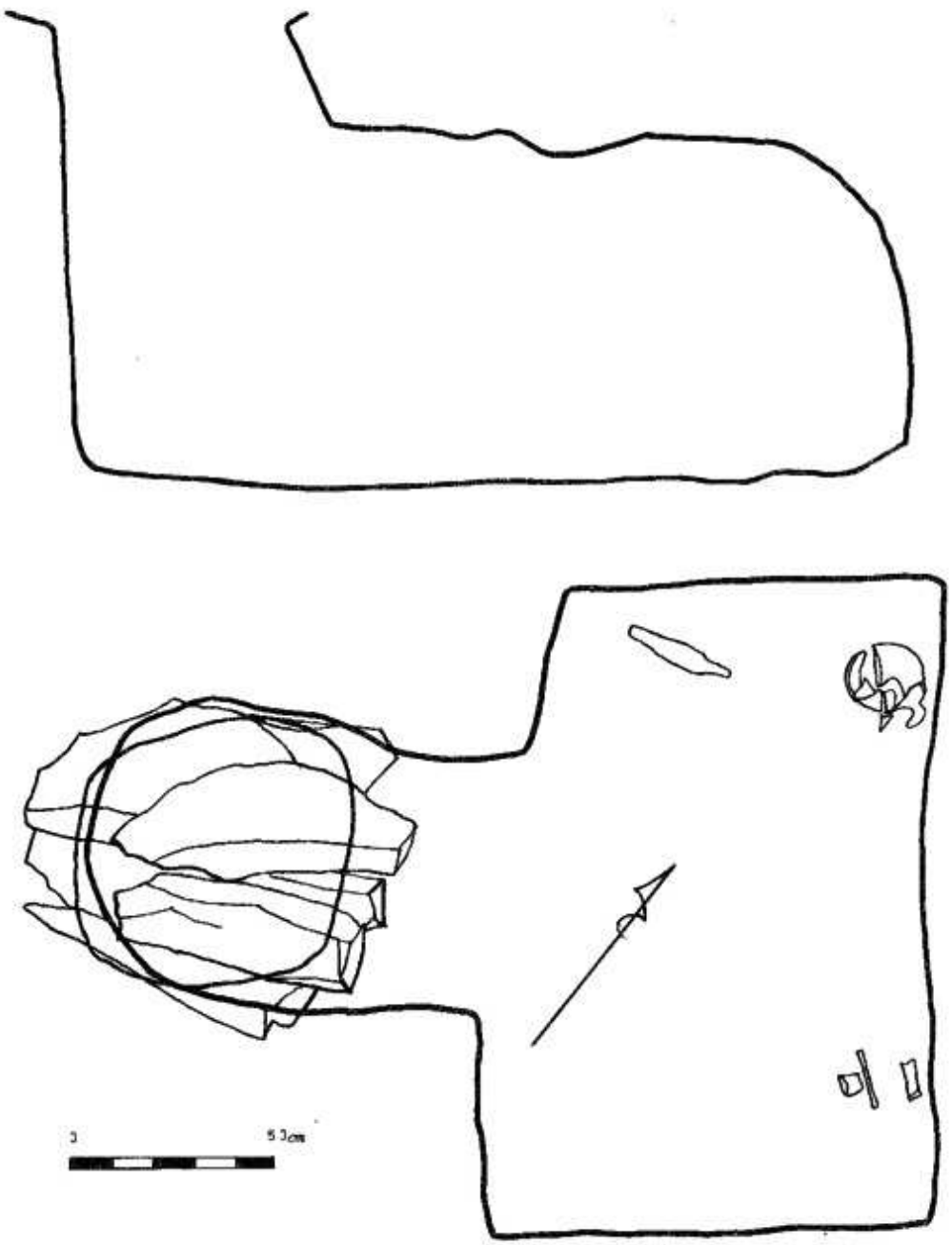
図２３の(2)～(5)は，高坏台脚円筒柱の部分が主である。台脚は，いづれも短かく中膨みで坏部の柄（ほぞ）で接合されているのが特色である。焼成は良好で，色調は赤褐色である。

(3)高　坏

図（２４）　既述のように，地下式横穴第１７号の蓋石上及び竪壙の流入土中から発見された破片を復元した高坏である。推定口径２２．５㎝，器高１６．７㎝，色調は赤褐色で器表面は研磨調整され，坏内面の口縁部周辺や裾部内側には刷毛目調整のあとがみられる。

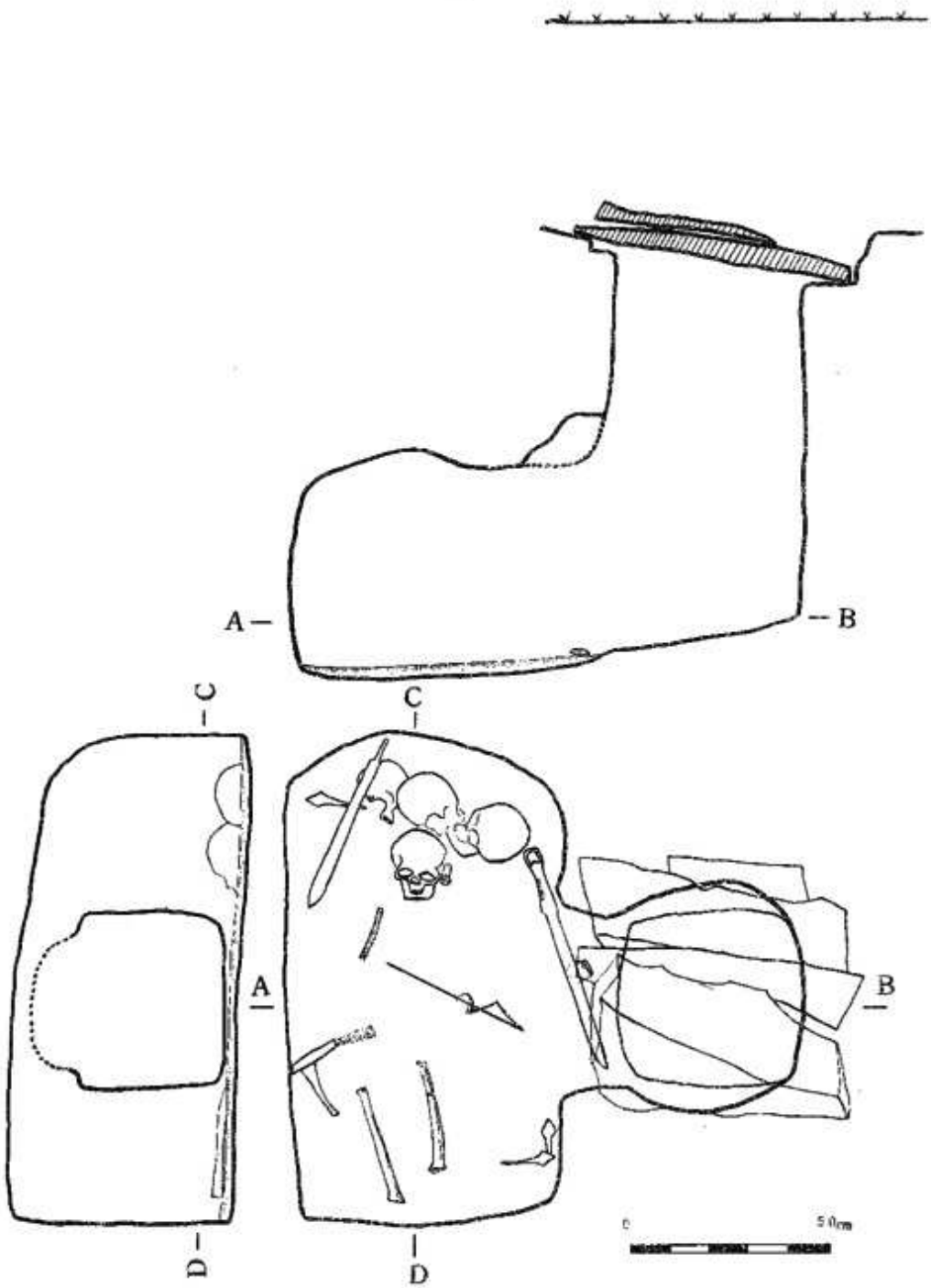
台脚は中空で中膨みの傾向があり，裾部は接合か所から若干膨みを有しながらラッパ状に広がり縁辺は丸みをもっている。坏部の広がりは比較的角度が急で接合部の稜はない。

（田中　茂）

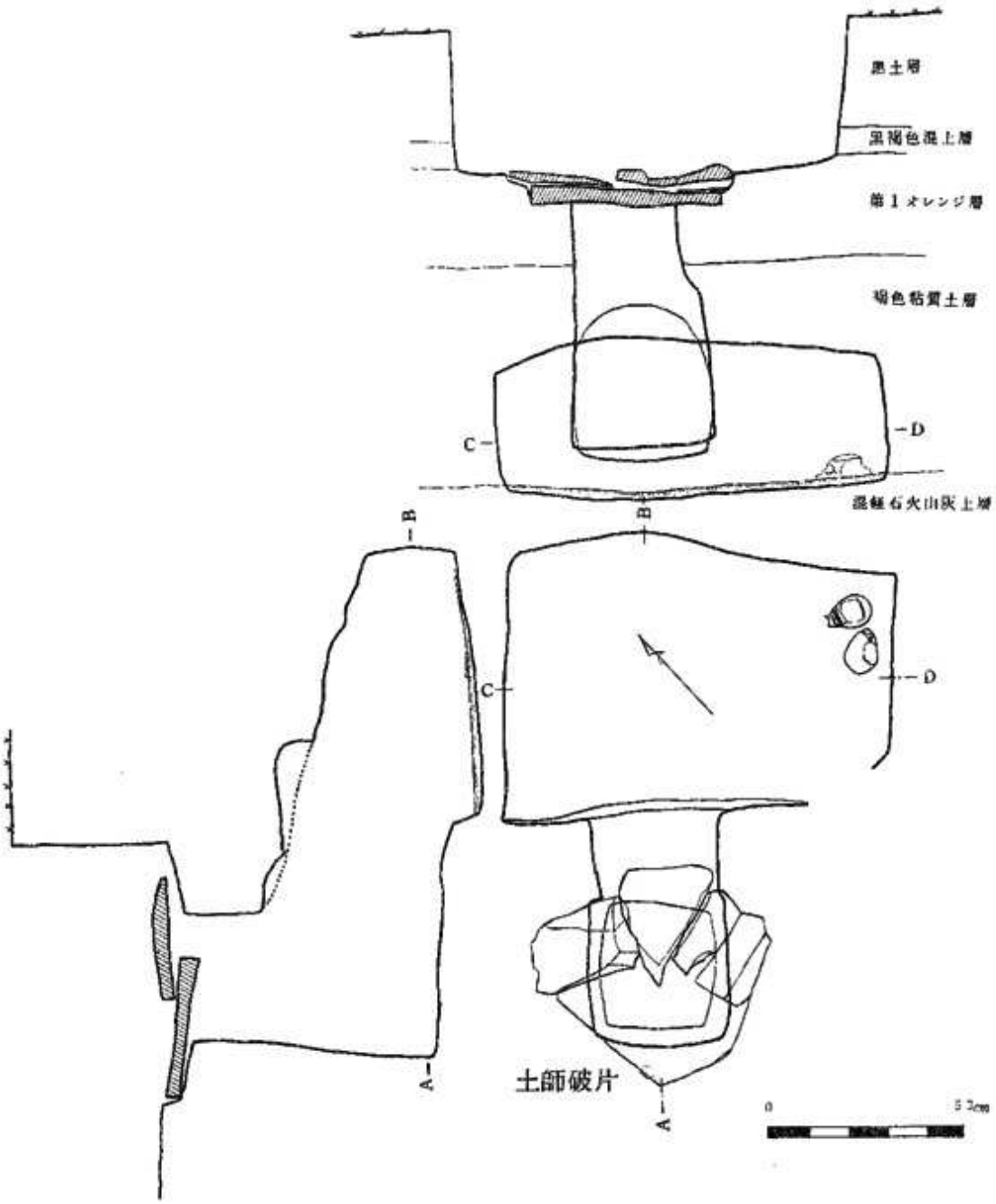


第１０図　地下式横穴７号

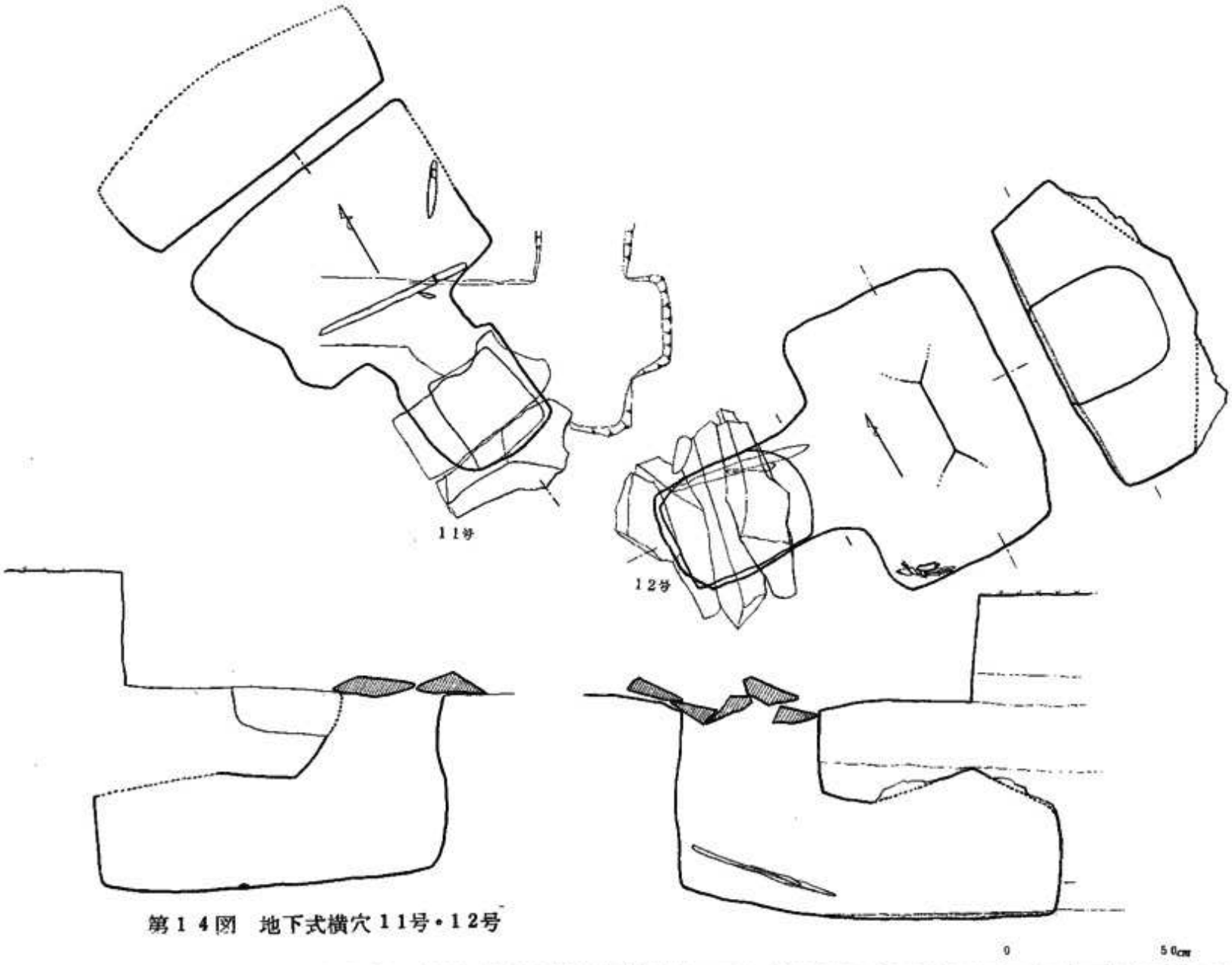
第１１図　地下式横穴８号



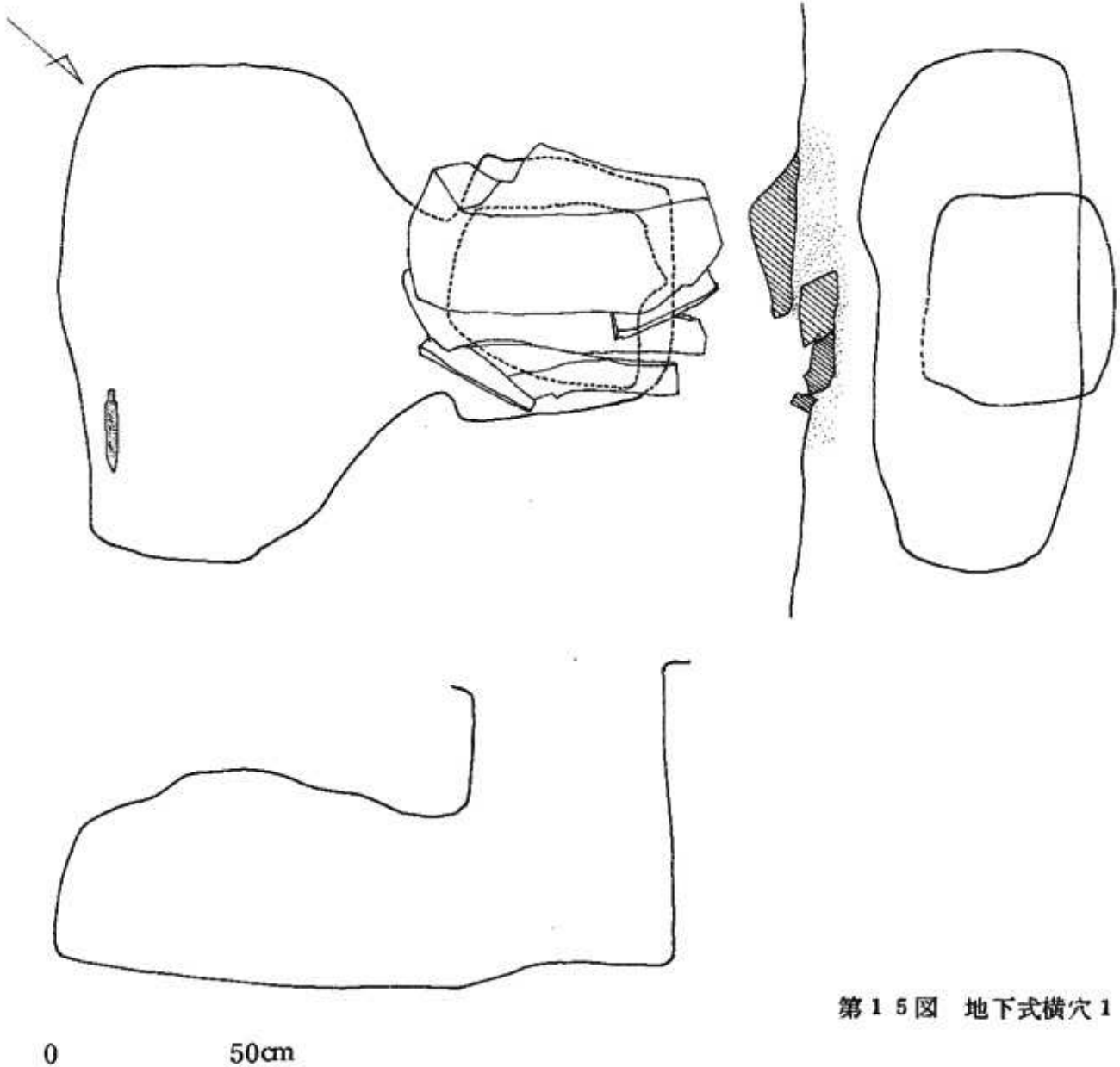
第１２図　地下式横穴９号



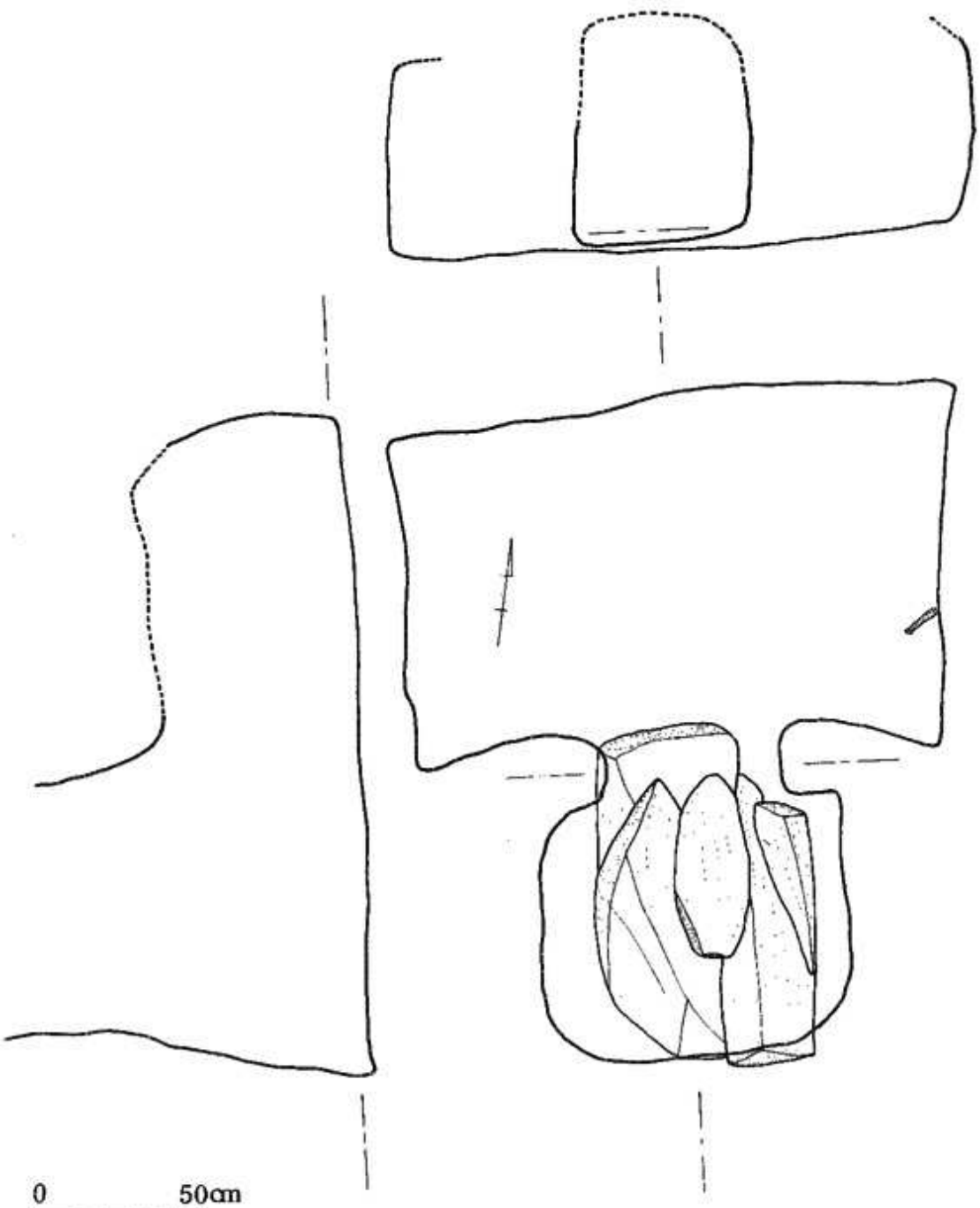
第１３図　地下式横穴１０号



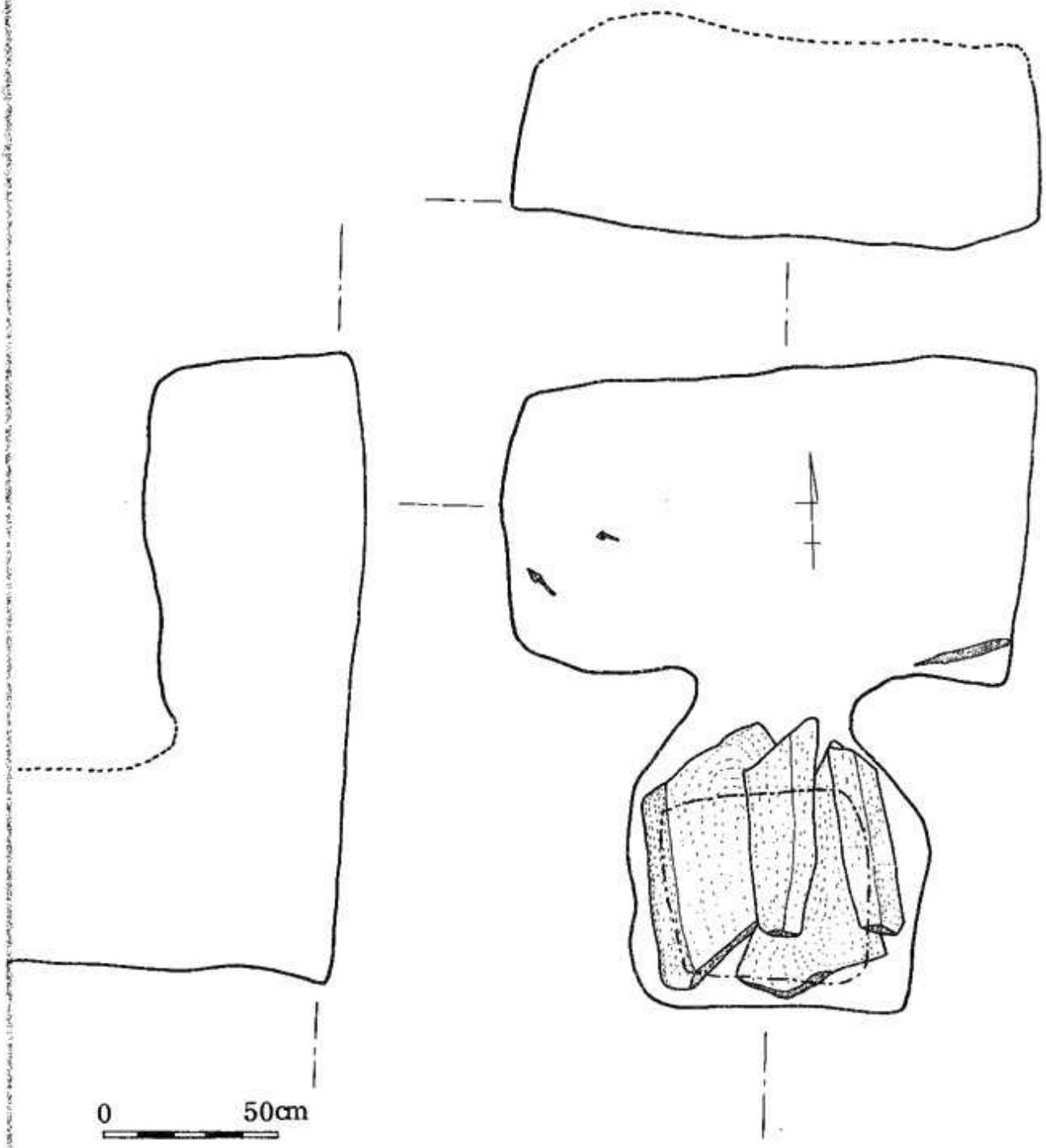
第１４図　地下式横穴１１号・１２号



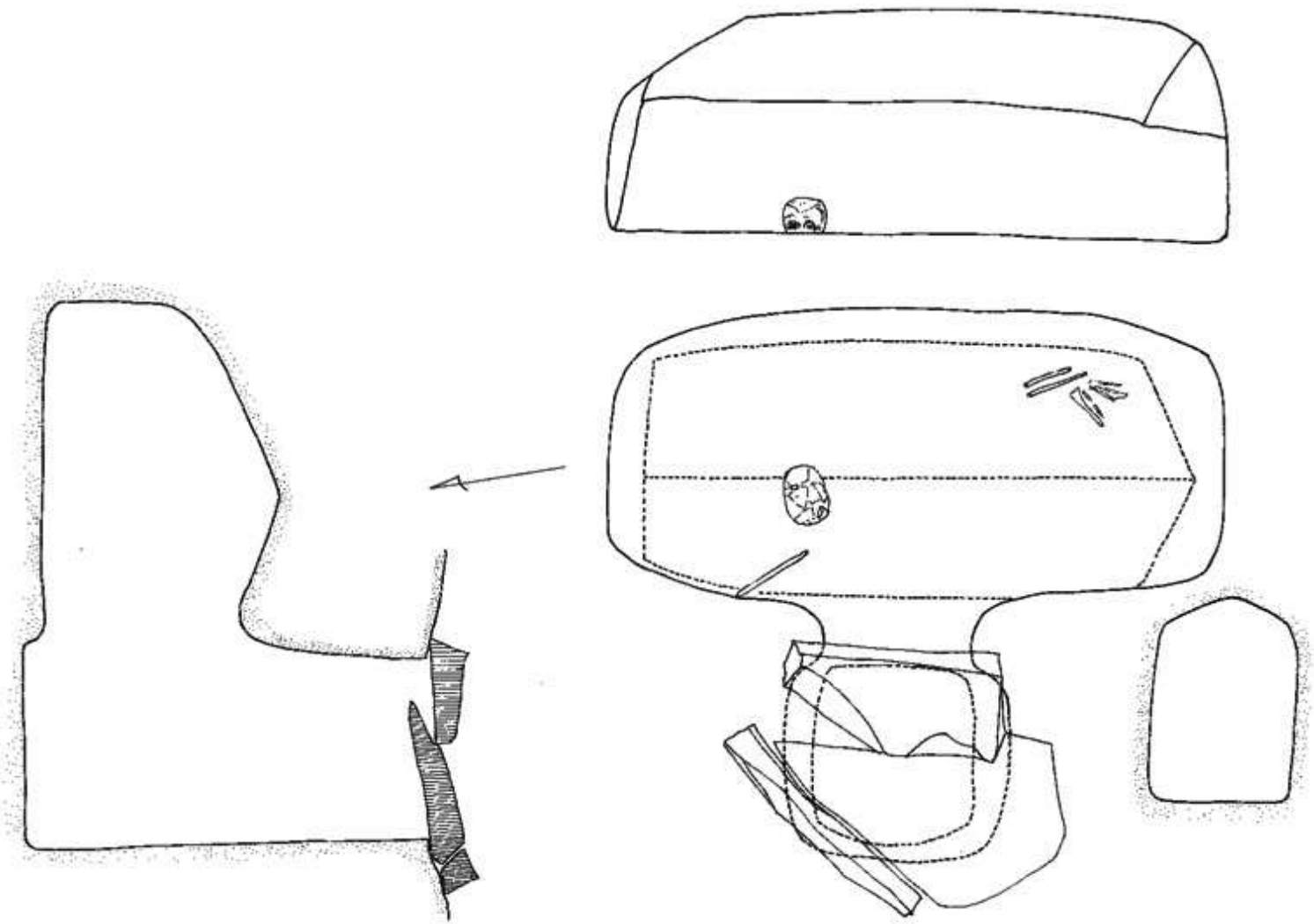
第１５図　地下式横穴１３号



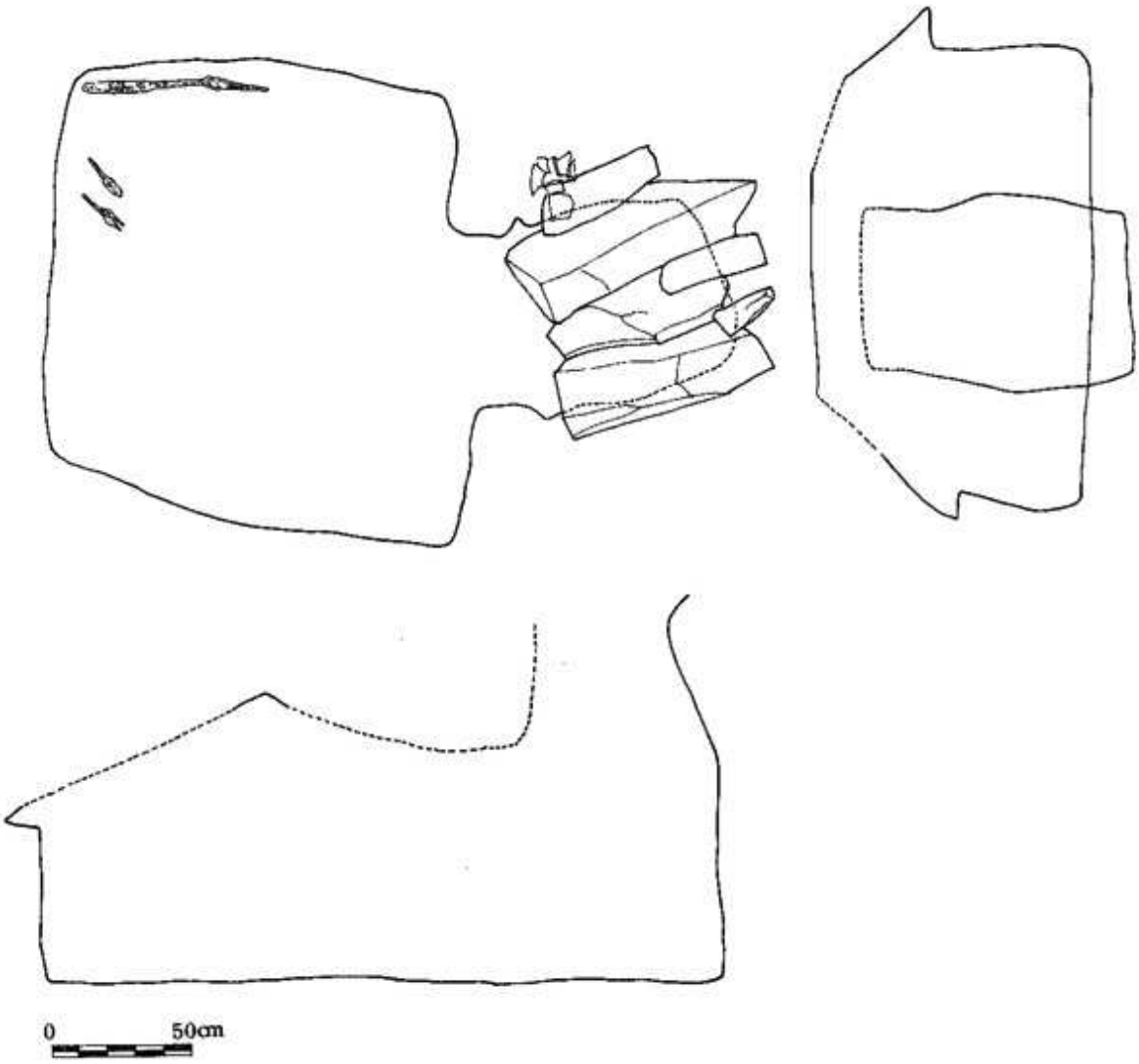
第１６図　地下式横穴１４号



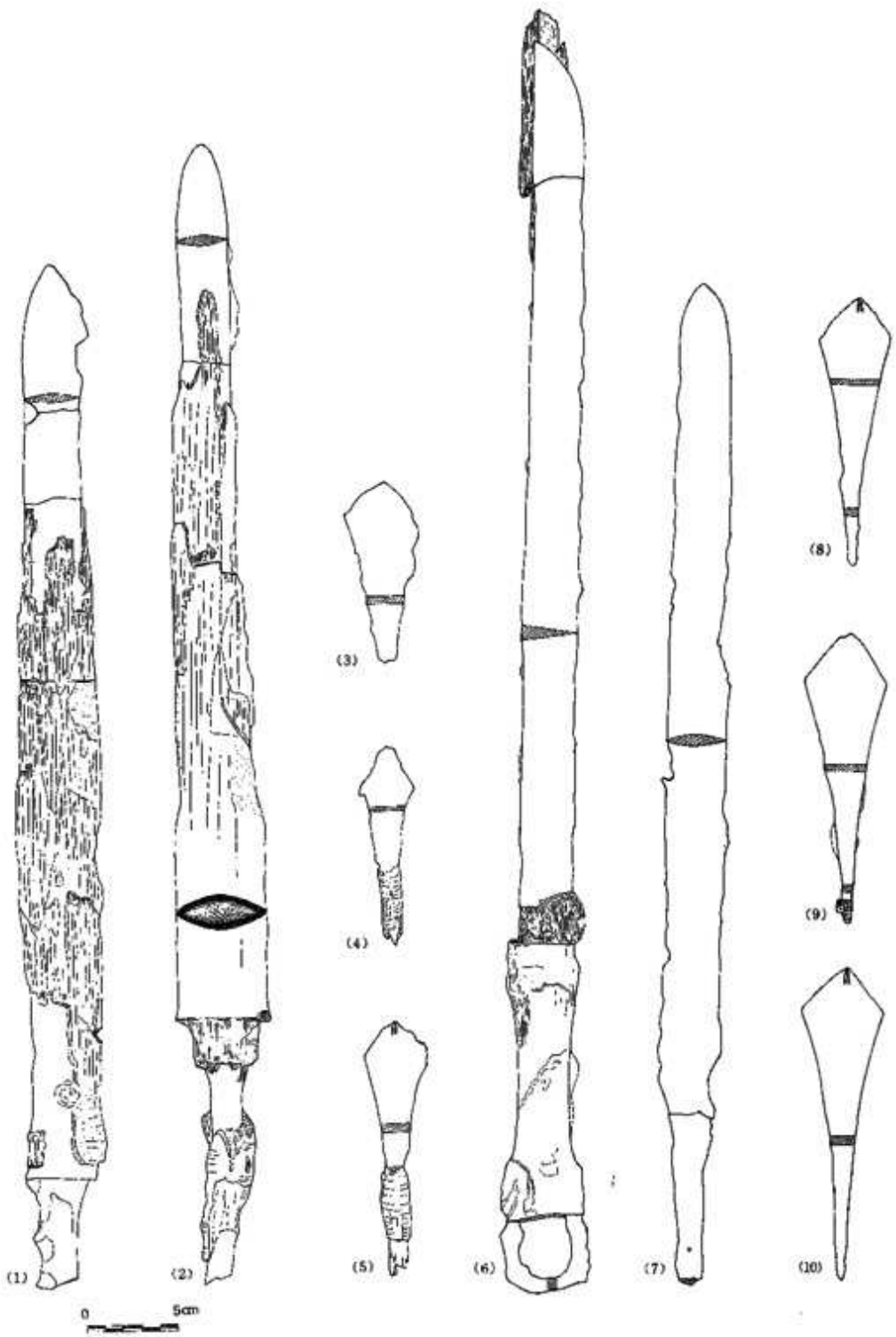
第１７図　地下式横穴１５号



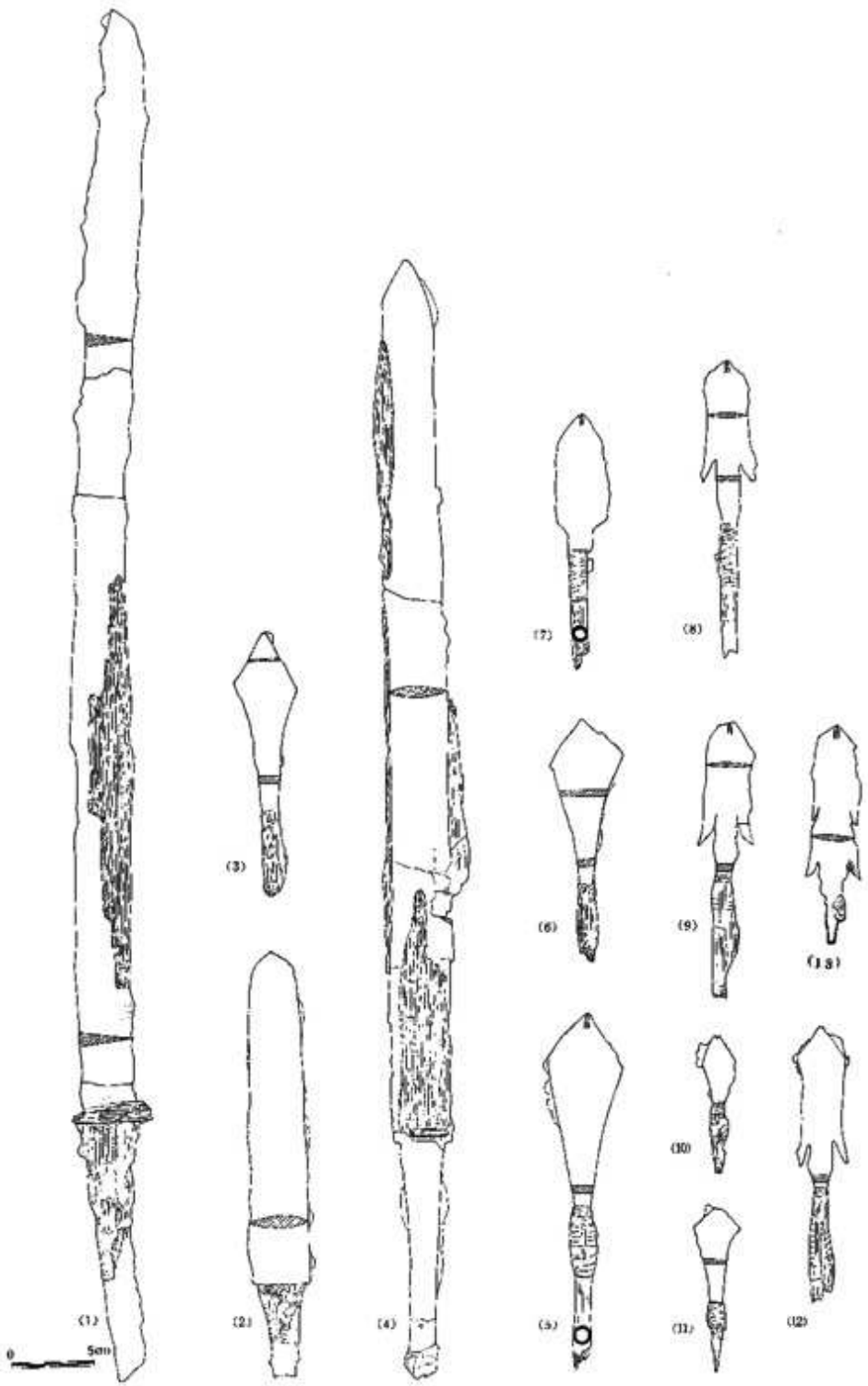
第１８図　地下式横穴１６号



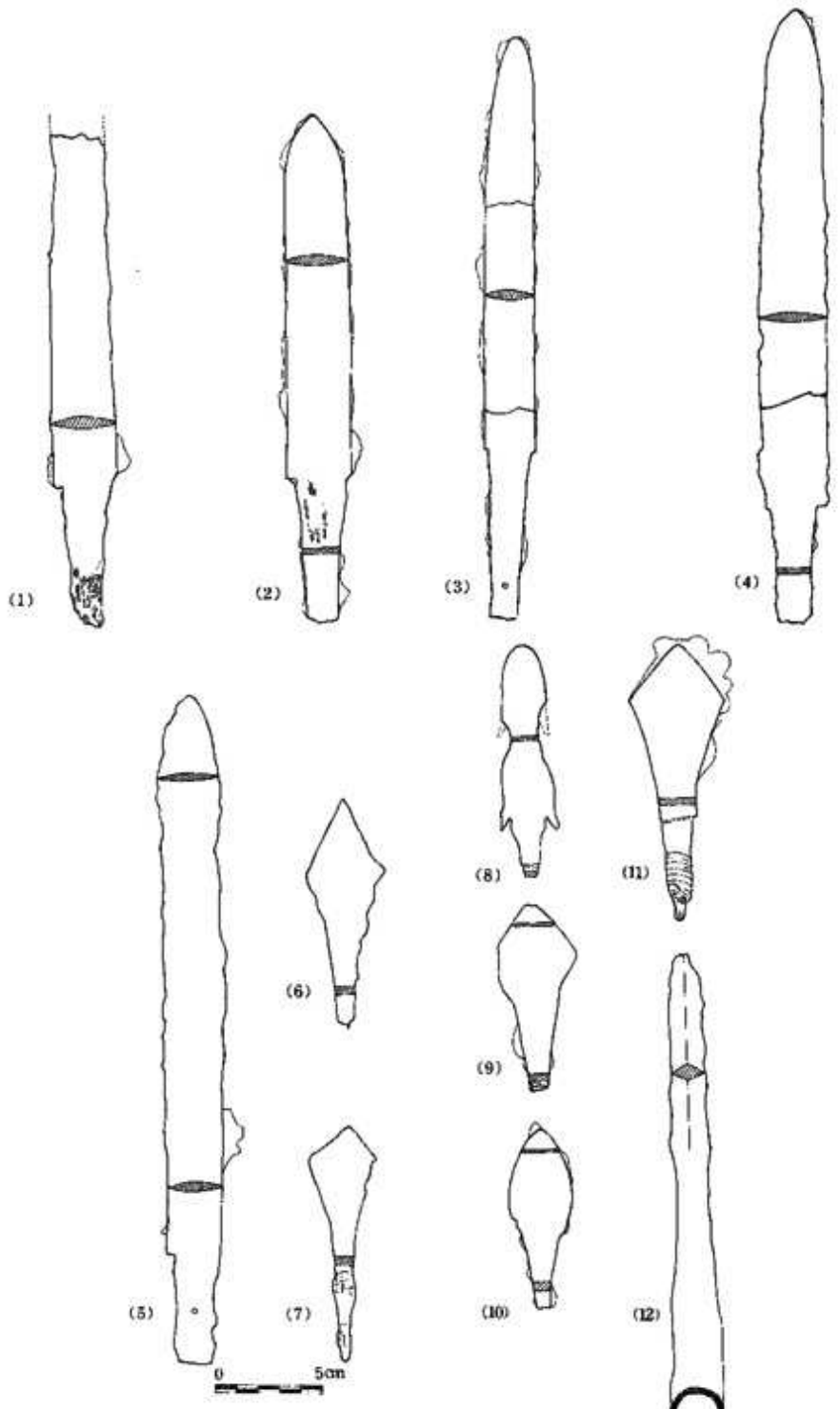
第１９図　地下式横穴１７号



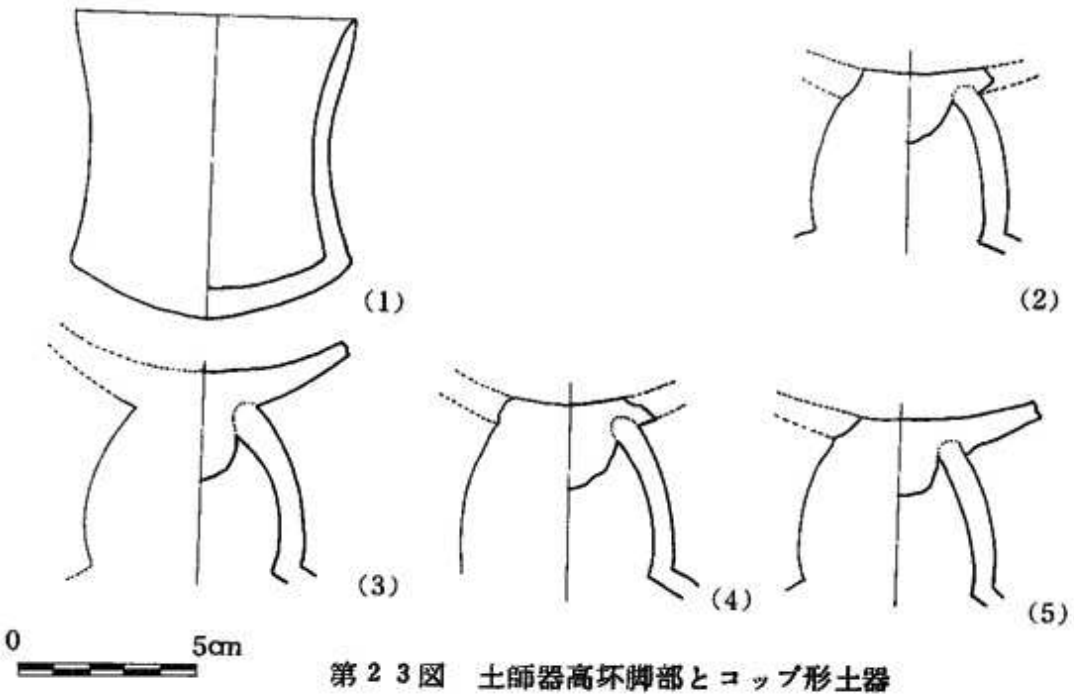
第２０図　(1)～(5) 8 号出土
(6)～(10) 9 号出土



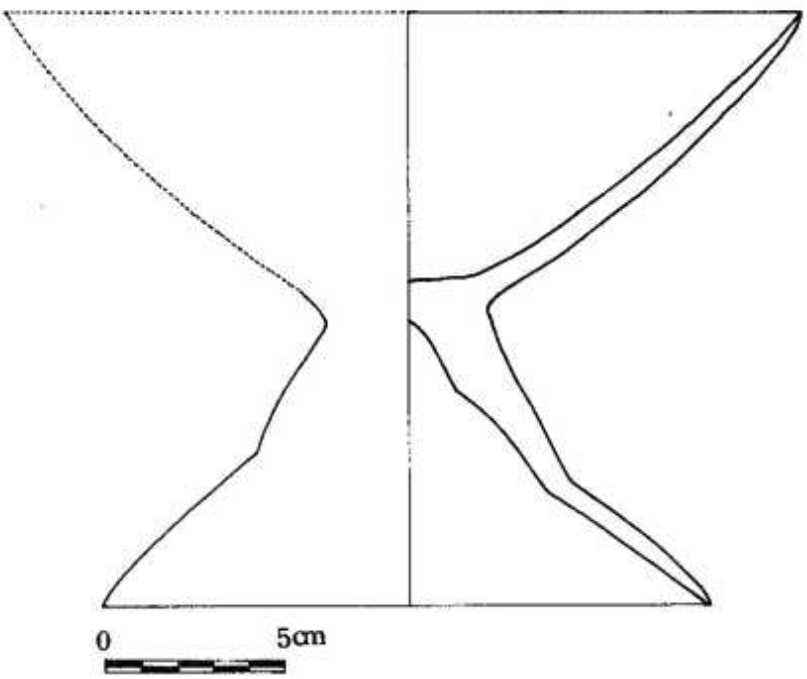
第２１図　(1)～(3) １１号出土
(4)～(13) １２号出土



第２２図　(1)　７号出土　　(4)　　１６号出土
(2) １３号出土　　(5)～(7) １５号出土
(3) １４号出土　　(8)～(12) １７号出土



第２３図　土師器高坏脚部とコップ形土器



第２４図　土師器高坏復元図

第2章　地下室板石積石室

第1号

これは地下式第5号墳の北方に接して発見されたもので，宮崎県下で発掘された最初のものであった。しかもこの古墳は殆んど完全であった。その構造は直径210㎝の円形の中に安山岩14個を円形に立てた石室内に人体を葬り，副葬品を置きその周囲に平たくてやや長目の石を菊花状に積み重ね，中央に花の芯のごとく2枚の扁平な石を置いたもので，その美麗荘厳さは見る人を粛然たらしむるものがある。石積の幅は210㎝内外で，高さは70㎝であった。

遺物は人骨は既になく剣2振があった。

遺物　剣1振　　総長30㎝，うち柄長4．5㎝，柄幅1．5㎝，身幅中央で3㎝，厚さ0．5㎝。

剣1振　　総長19㎝，うち柄長3．5㎝，柄幅1㎝，身幅2㎝，厚さ0．4㎝である。

（石川　恒太郎）

第2号

地下式板石積石室2号は，台地の西縁沿いに板石積石室3号と並んで構築され，その位置は，灰塚地下式横穴群のほぼ中央部に所在していた。周囲には，板石積石室3号のほか，4m東方には，同1号も隣接し，また，南々東8mには，地下式横穴第5号も構築されていた。

葺石の天井にあたる部分で南側の一部が欠失しており，そのためか，中央部の葺石が崩って中側へ落ちこんでいた。石材は，1，2号や地下式横穴の竪穴閉塞用と同様安山岩を板状に剝ぎ取ったものを使っていた。地元ではこの石をヘゲイシと呼んでいる。石はかなり遠方の霧島連山の山腹から運搬したものである。葺石は，表土やその下層にあたる黒色土層中に主として構築されているが，石室の基礎となる側石や葺石の下部になる部分は第1オレンジ層以下に切りこまれていた。築造の状況をみると，径210㎝×213㎝の真円形に近い土壙の中に15個の安山岩を側壁として石室を構築しており，その径は南北160㎝×東西165㎝の真円に近い円形プランで側石の基部は淡黄褐色砂質土層に掘りこまれていた。側壁は他の板石積石室と同様に若干内側へ傾斜させて配置しており，葺石第一段を側石の外側に斜

めに立てかけその上に順に内側へ口をのぞかせ周囲から中心に向って持ち送り式に重ねられており，それは１１段から所によっては１７，１８段もあり，かなりの高さであったと思われる。黒褐色土層を床面としその深さは，地表から１５０～160㎝程で，一般的な地下式横穴の深さに比較すると地下式板石積石室は浅い方である。

覆土の中には３号と同じように，縄文土器片や打製石鏃が含まれていたが，これは埋葬の際，かく乱された土が混入したもので複合遺跡の一端を示すものである。床面にはシラスの薄い層や第１オレンジ層の小土塊が発見された。シラスは他の遺構からも検出されておりこれは床面等に人為的に散布されたもので，その目的が呪術的なものか，単に装飾的なものか今のところ不明である。副葬品は小鉄剣が１本石室の中心に床面から浮いた形で発見され，すぐ横には同じレベルで小板状２枚の安山岩が認められた。人骨は，完全に朽ち果てて発見することはできなかったのでどのような姿勢で葬られていたかは不明であるが，あるいはこの２枚の石が枕石として使用されていたのかも知れない。鉄剣は，切先を中心に向け，莖は，錆がひどくすでにバラバラになっていたが，剣の全長は，２４㎝であった。

第３号

地下式板石積石室第３号は，第２号と同じく台地の西縁に構築され，周囲には，板石積石室第２号のほか，北東９ｍに地下式横穴第７号が隣接し，さらに東方１５ｍの位置には地下式横穴１１号，１２号が構築されていた。

葺石のうち地表に一ばん近い中央部は欠失していたがこれは耕作のつど農具の先にあたる部分が除去されたものとみられる。石材は，やはり安山岩を削平したものを用い，直径２００㎝×２０２㎝の真円形に近い土壙の中に構築され，葺石の平面は円形でその径は２ｍ程であった。葺石は，現在４段まで重ねられた状態で残っていたが天井部が欠失しているのでさだかではないが構築当時はおそらく１０段ぐらいまで持ち送り式で重ねられていたと思われる。葺石１枚の大きさは最大のもので長軸が６０㎝程で，構築は他に見られるように石室側石の上に図のように１段目の石を斜めに立てかけ，２段，３段と順に傾斜をもたせながら周囲から内部中心に向ってそれぞれ持ち送り式に重ねて構築されている。

石室は，径１６２㎝×１６０㎝で正円形に近く他の板石積石室と同じく石英とパミス混りの黒褐色土層を床面としていた。側石は，削平した安山岩１３枚をやや内

傾させて配置し２０cm内外で下に切りこみ，中には，次層の淡黄褐色砂質土層に及んでいた。側石の高さは不揃いであり，また，側石間には間隙等もあったが構築上別に支障がないので意を介さかったようである。床面の深さは約１５０cm程であった。

覆土の中から縄文土器片が発見されたが２号と同じように埋葬の際，かく乱された土が使われたためであろう。床面近くになると木炭片が数多く見られ，シラスが一面にしきつめられており特に中央より南東部の側石にかけて顕著であった。人骨は発見されなかったが，南東側石の近くと北西の側石寄りに剣が各々１本ずつ，それに北東の側石寄りに平根の鉄鏃が３本副葬されていた。副葬品やその位置からみて，被葬者は複数であったと推定される。

副葬品

剣　図２８の(3)～(4)

① この剣は，石室南東側石寄りに副葬されていたもので先端にかけて中途から欠失している。現長２０cm，身幅関寄りで３．２cm，断面は錆のため明瞭ではないが中央が丸みがかっている。厚さ約０．６cm，関は，両関で無角である。莖の長さ６cm。幅２．３cmである。

② 図２７の(4)　完形品で，石室の北西側石寄りで発見された。全長18.4cm，莖の長さ３．６cm，身幅中央で３．１cm，厚さ０．５cmで断面は，中央が丸みがかっている。関は無角で莖に続いている。長さ３．６cm，一面に木質の残部がみられ，目釘穴が２個あけられている。

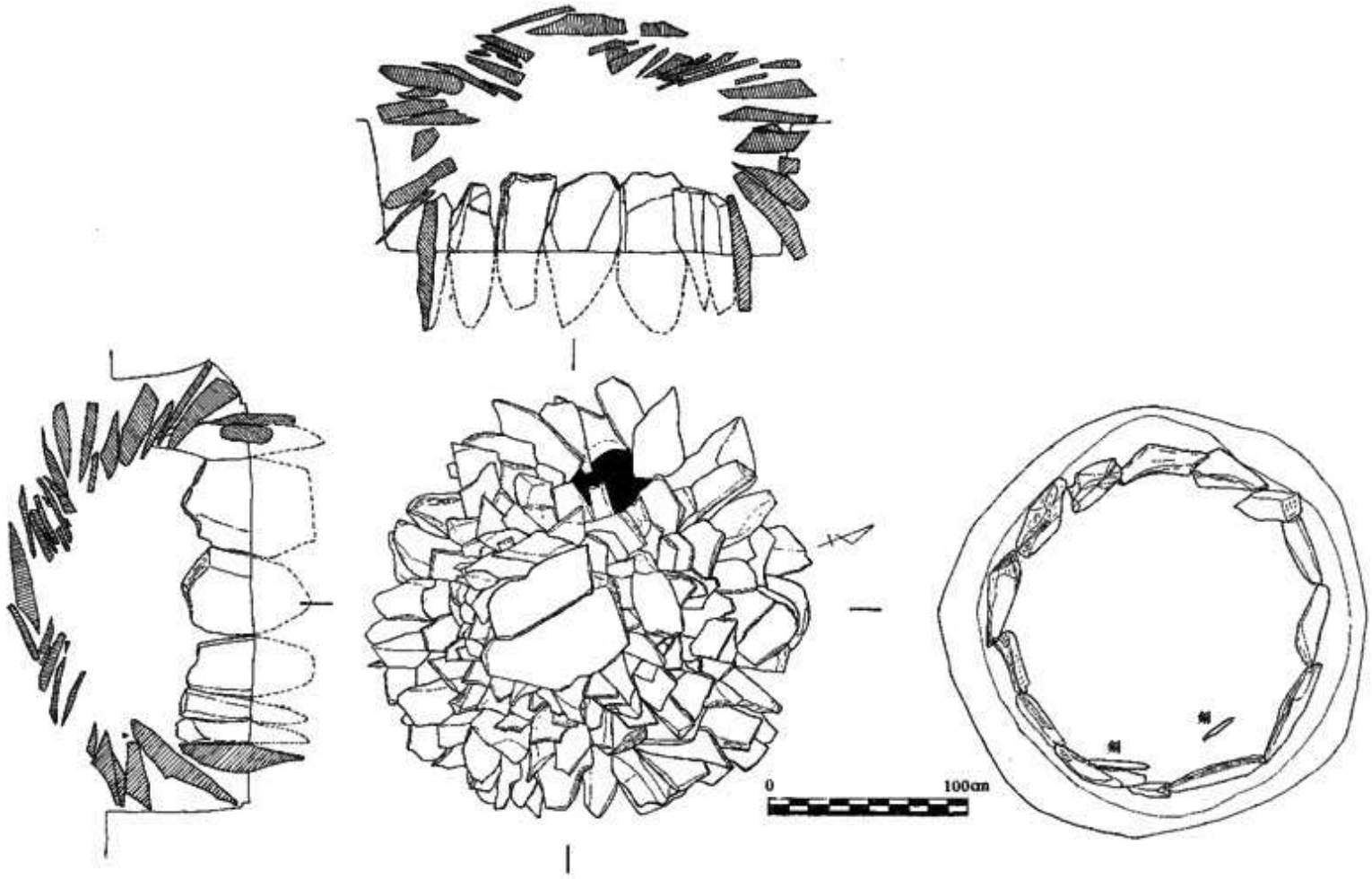
鉄鏃　３本が発見されたがみな平根の圭頭式であった。

① 図２２の(5)　長さ６．９cm，最大幅２．７cm，篦被の基部に篦の残欠がわずかにみられる。

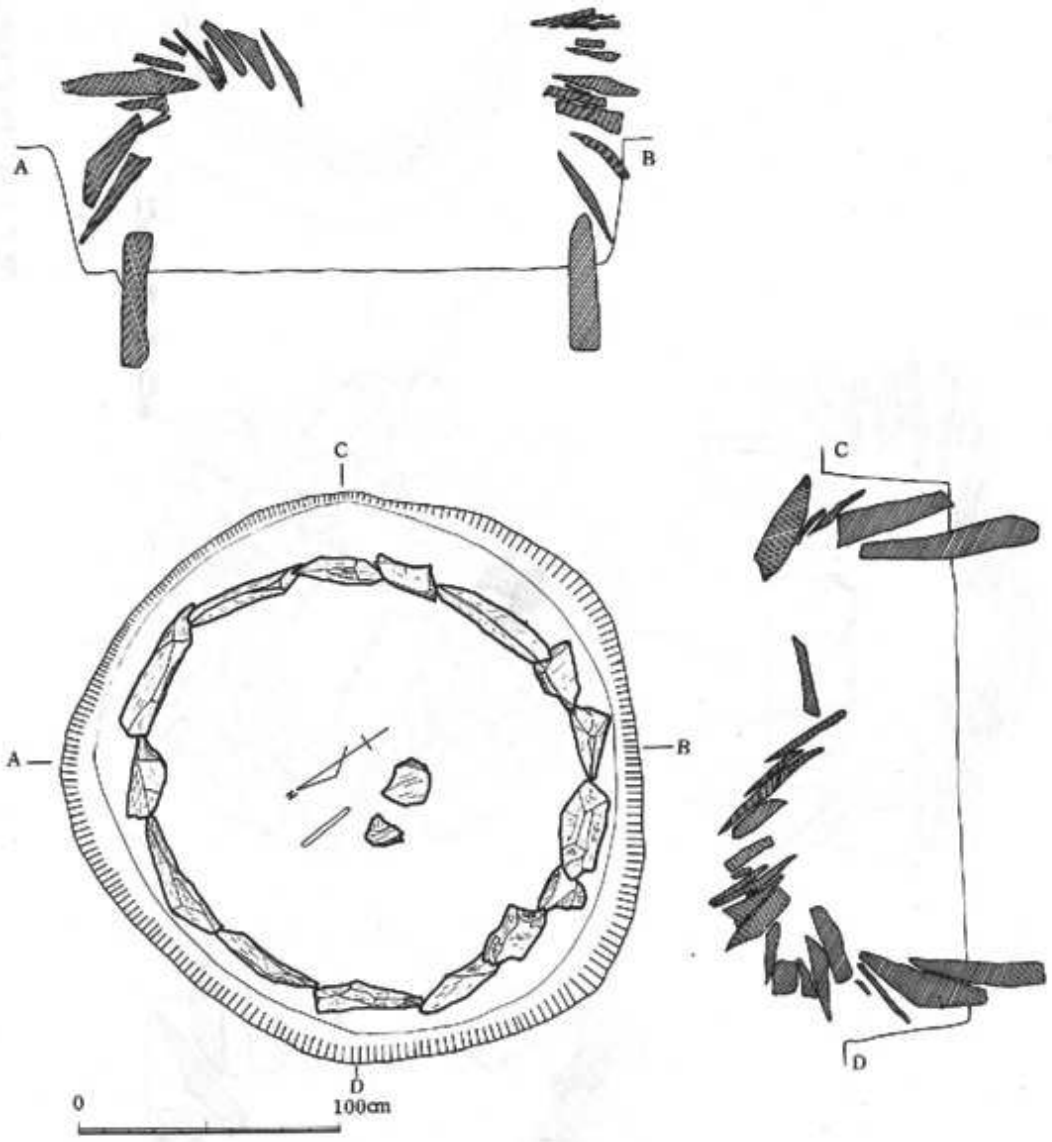
② 図２２の(6)　この鉄鏃は中途で折れており鋒の方は，①の下から発見された。長さ８．４cm，最大幅２．４cm，篦の竹管や口巻の桜皮が残っている。

③ 図２２の(7)　長さ６．９cm，最大幅２．８cm，これも同じように篦の竹管，それに口巻の桜の皮が残っている。

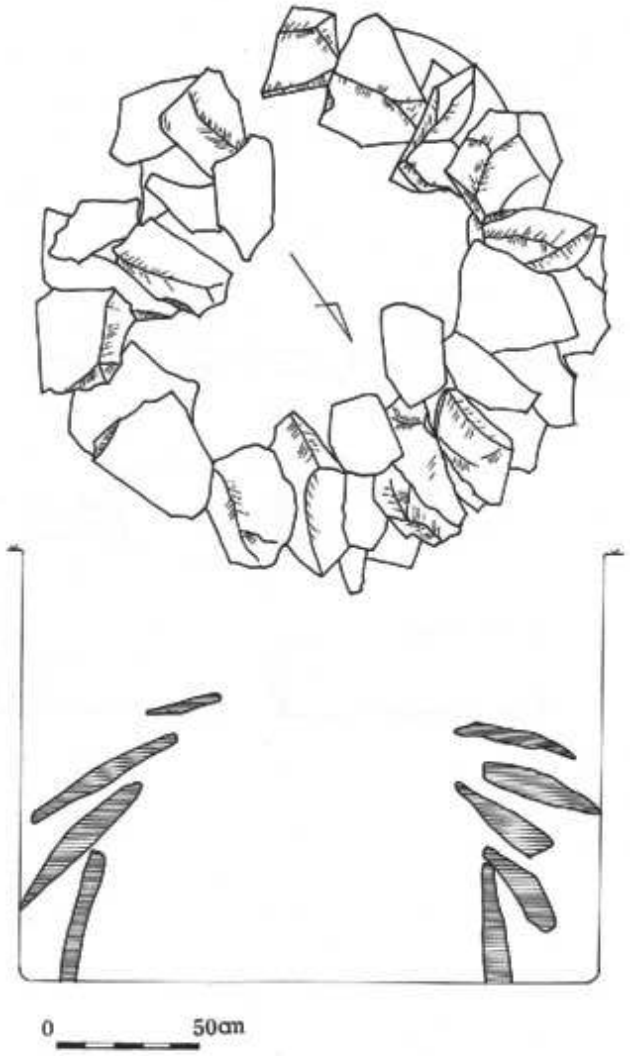
（田中　茂）

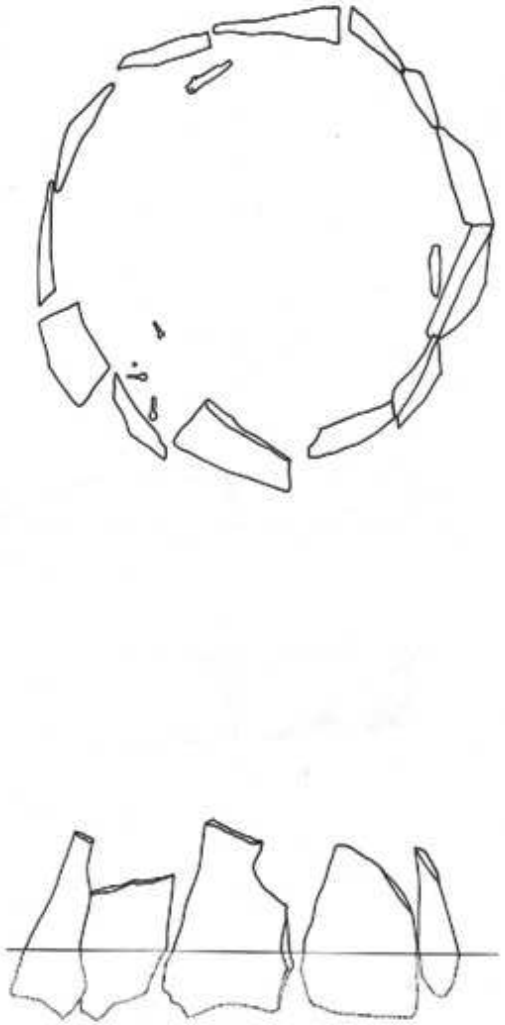


第２５図　地下式板石積石室１号

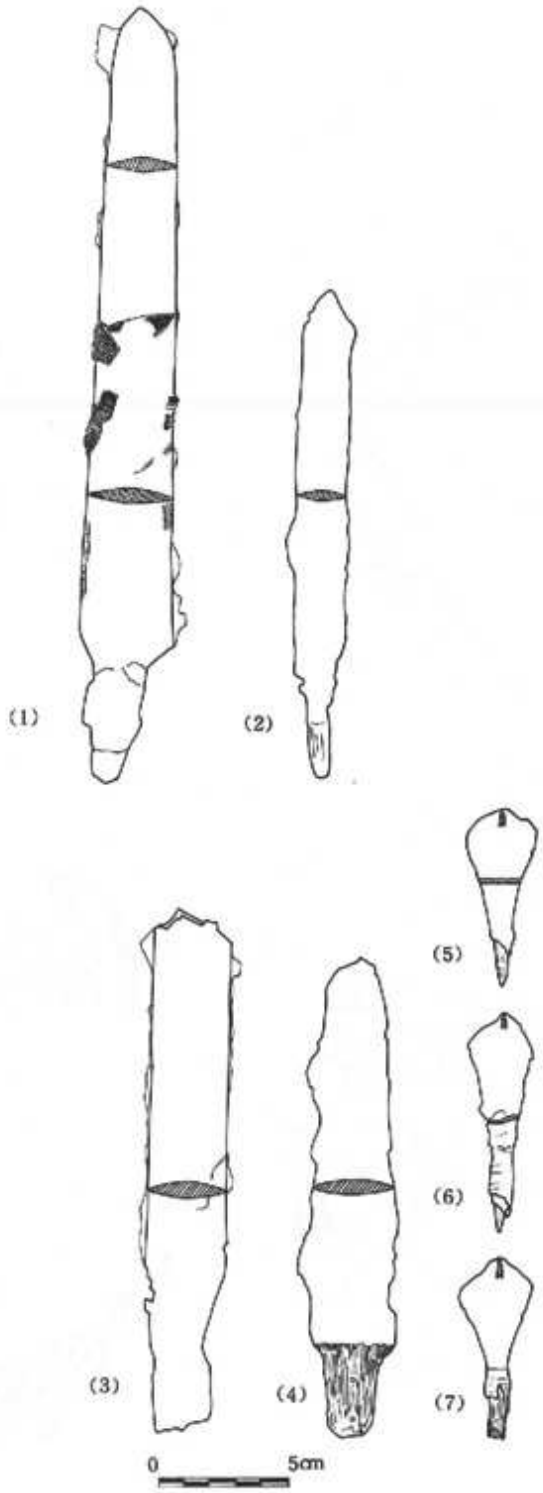


第２６図　地下式板石積石室２号





第２７図　地下式板石積石室３号



第２８図　(1)・(2)地下式板石積石室１号出土
(3)～(7) 3 号出土

第３章　縄文・弥生関係遺物

地下式横穴や地下式板石積石室の調査に伴い，各トレンチから，かなりの量の土器や石器が出土した。それは，縄文式土器であり，弥生式土器であり，あるものは古式土師器とみられるものであり，ふくそうした灰塚遺跡の状態を示すものであった。従って，それらの遺物は，それぞれの時代の生活遺構と関連づけられるものであった。しかしながら，これら出土遺物の多くは，直接，地下式横穴や板石積石室との関連が確認されたものをのぞき，各遺構との関連など十分検証されないまま採集されている。このような理由から，縄文土器や弥生式土器などは，墓地遺構外出土遺物として一括取扱うことにした。

以下　縄文土器，弥生式土器に分けて簡略に述べる。

縄文関係

灰塚遺跡は前述の如く主体が地下式古墳を調査する目的で進められていったものである。地下式古墳は耕作土を剝ぐだけで，遺構の検出が可能なため地下式古墳のみの調査に主力が注がれた。最初のうちは若干の弥生式土器が伴出していたが，少し深く掘ると縄文式土器も層位的に出土することが確認された。それ以後は第１図の如く各トレンチを設定した。

大きくＡ区，Ｂ区に分けたが，これはＡ区とＢ区において５０㎝余の段差があり，後述する土層においても違いをみたからである。１トレンチでは地下式古墳のみの検出作業に終始したため，層位的な確認は行なえなかった。他の区においては層位的な遺物出土の確認をすることができた。遺構については今回の調査期間が短かいこともあり十分な確認には至らなかった。

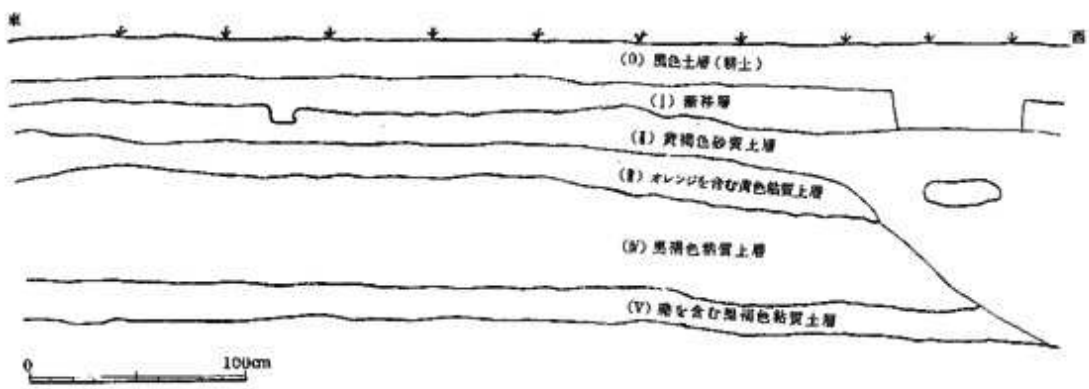
層　位　（第２９図）

まず表土にはこの地方でクロボクと呼ばれる黒色土層が２０㎝の厚さをなし，続いて第１層と呼ぶ灰黒色土層が地表下２０㎝～３５㎝の層をなし，その上部からは弥生式土器が出土し，下部からは縄文晩期の黒色磨研土器，精製土器，粗製土器片の出土が確認されたが，層の上部下部は明確に分かれているものではない。第Ⅱ層は黄褐色砂質土層で，割合さらりとした感触の土質である。厚さは平均２０㎝余り

で縄文後期の土器が主体である。第Ⅲ層はオレンジを含む黄褐色粘質土層で，第Ⅱ層下部と第Ⅲ層上部のいわば漸移層的なところより，縄文前期の土器が出土した。このオレンジを含む層は南に向うにしたがい厚くなり，遺物の出土は全くみなくなる。

以下Ⅳ層は黒褐色粘質土層，Ⅴ層は小礫を含む黒褐色粘質土層でともに無遺物層である。Ⅵ層は火山灰地特有のシラス層であり，切通しの断面で観察すると，数メートルの堆積に達している。

なお，B区における層位は灰黒褐色土層が厚い層をなしており若干の攪乱と思われ縄文後期の土器が主体をなしている。



第２９図　灰塚遺跡Ａ区３Ｔ南側断面図

土　器

晩期の土器　（第３０図１～１２）

晩期の土器の中には無文が多数を占めるが，中でも深鉢になる粗製土器が多く，次いで黒色磨研土器の浅鉢が占め，壺はわずか数点認められた。

第３０図 (1)

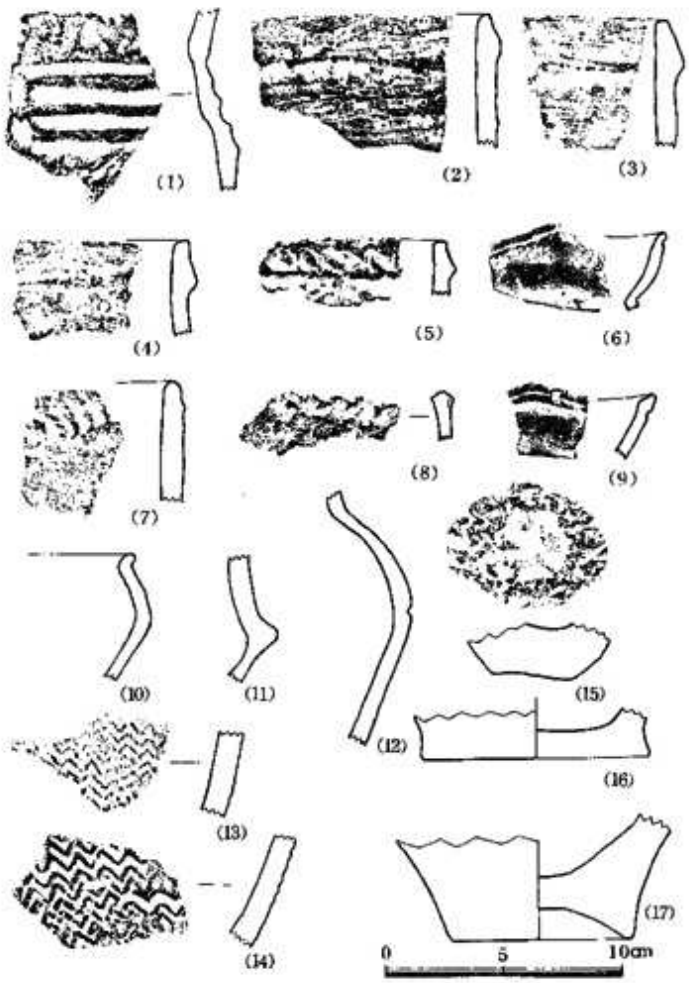
深鉢で口縁部に近い頸の部分と思われ，胴部もいくらかふくらむものである。焼成は良好で，素焼の状態である茶褐色を呈している。文様は太い３本の沈線を施し，その沈線の施文後に指先状施文具で２つの凹線文を上下２段につけその真中には爪状の痕がある。底部は第３０図（　）につながるものと思われる。

第３０図（2.3.4.5.7.8.）

この種の土器は口唇が直行し粗製で深鉢になるものである。口縁はわずかに「くの字」型を呈しており，器壁は例外なく，内外ともに条痕がみられる。(1)には外側全面にススの付着をみ，(4)には頸部にまるい刺突文があるが内側まで貫通していない。(5)は短い口縁部と頸部との間に段をもたせ，口縁部に斜行する長楕形の凹文をつけ，後期の時期にみられる文様構成をしている。(7)は胎土荒く焼成も悪くもろいが，文様は貝殻文に類似した特徴をもち口縁部は直行している。器壁内側はヘラ調整が行なわれている。(8)は晩期後半にみられる胴部が「くの字」型をなし，その張出し部に凹突文をめぐらすものと同じ文様構成で全体にススが付着している。

第３０図（6.9.10.11.12.）

ここにあげた土器は黒色研磨，粗製土器である。(6),(9) ともに黒色研磨の口縁が山形の波状をなす中鉢であり，口縁には口唇に沿って１本ないし２本の浅い沈線を入れたものであるが小片のため全体的な復元はむずかしい。(10) は黒色研磨でなく普通の粗製土器である。口唇部は若干のくびれをもちながら外反し，胴部はゆるやかにカーブし浅鉢を形成している。(11) は胴部だけであるが，口縁は外反していると思われ，胴部は極端に張り出しきつい「くの字」型をもち内外はていねいにヘラ調整が行なわれている。(12) この土器は黒色研磨の壺型土器である。口縁部，底部は破損しているが，大方の形状は予想できる。内外ともヘラでていねいに調整され，胴部には１本の沈線をもつ。



第３０図　灰塚出土土器拓影実測図

後期の土器

第３１図 (1)

口縁から胴部にかけてゆるやかにカーブし粗製の深鉢をなすものであるが，胴部上部から口縁にかけてはきわめて荒い縄文文様が施文されているこの種の土器はＢ区のみ出土し，層位は灰黒色土層となっている。

第３１図 (2)

ほとんど直行する口縁にヘラ描沈線をはっきりと施文し深鉢をなす。器壁外側にはススが全体的に付着し，胎土焼成とも良好である。

第３１図 (3)

器壁内外ともヘラ調整でよく整い，胴部はふくらみをもち沈線文を主体としているが，その間には磨消縄文の手法がとり入れられている。口唇部はヘラで×印が重

なるように施文され，比較的小型の深鉢と思われる。

第３１図（４）

複雑な沈線文様と列点文の組合せ口縁部で，口唇にも列点文が施文されている。しかし，この列点文は口唇部全体ではなく，波状口縁をなすうちの片方だけにつけられている。器型は深鉢になるものと思われるが，頸部がくびれ，胴部がふくらむ型になる。

第３１図（５）

部厚い断面をもち口縁部内側はヘラでよく調整が行なわれ，胴部にかけて１段うすくなるよう段がつけてあり，外側は荒い沈線文の直線と曲線が，山形口縁のＶ字型にくびれた所を中心に５重になって描かれている。器形は中鉢と思われるが，山形突起は４つからなり後期における土器の特徴をもつ。

第３１図（６．７）

（６）の土器は４つの山形突起の波状口縁をもつもので，その突起部にはり付を施し１段とふくらみをつけている。また口縁部全体にも列点文を施している。

（７）はやはり波状口縁をなし口唇部には，はり付に似せためくりはり付の手法を用い，沈線文を主体としている。この(6).(7)の土器は文様構成こそ違うが器型の上での類似点を有する。

第３１図（８．９．１０．）

この(8).(9)の２つの土器は同１個体と思われ，(8)が口縁部で口唇部には刺突文を施している。また沈線は(9)に比較すると深く口縁は直行している。(9)は胴部で(8)の下に続くものであるが，その器形は中鉢である。（10）も器形としては(8)と同じであり沈線文様は深くはっきりしている。

第３１図（１１）

小破片ではあるがその中に大きな凹文が指状施文具によって施され，口唇部にも指圧文が施されて波状をなしている。胎土焼成とも良好である。

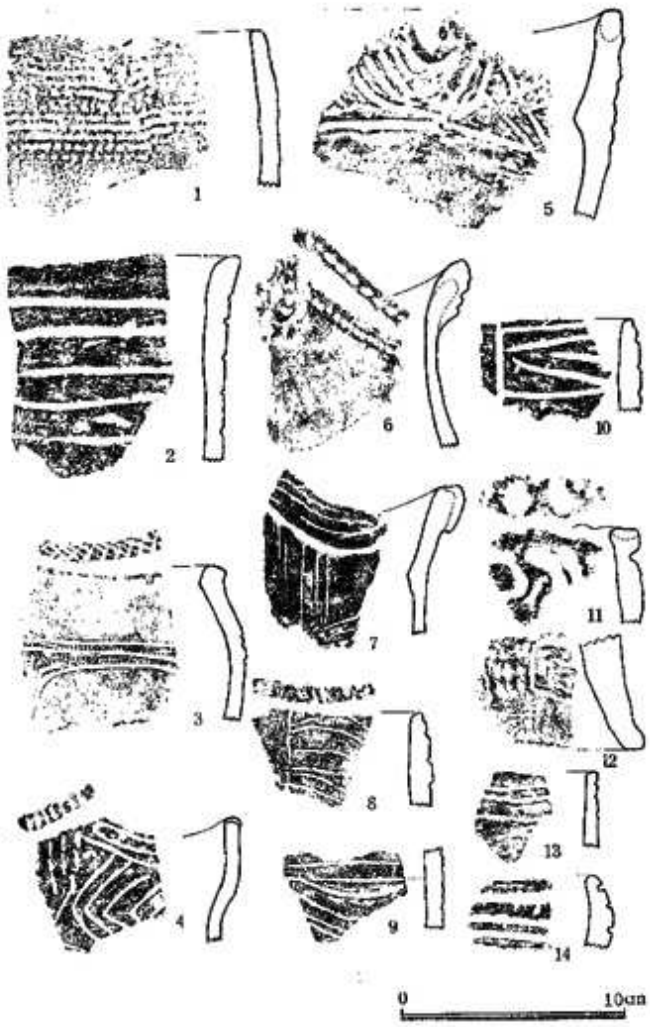
第３１図（１２）

胎土焼成ともあまり良好ではないが唯一の高坏土器の脚部である。文様は沈線と刺突文の組合せで様成されており，すかしがあるかは不明である。

第３１図（13．14）

（13）は器壁うすく口縁部に３本の沈線をめぐらし，（14）はやはり口縁部に３本以上の沈線をめぐらしているが，この土器は内外とも器面調整を行い，（14）の

場合は浅鉢になるもので磨消縄文をもつものが普通である。



前期の土器　　第３１図　灰塚出土土器拓影

第３２図(1)

うすい器壁ながら雲母を含んだ土器は焼成胎土とも良好である。文様は口唇部に列点文を施し，口縁部から胴部にかけては２本の沈線と，縦列波状文の組合せからなる。施文具はある程度先の尖がった道具を用いている。

第３２図（2. 7. 10）

(2)は刺突文と沈線文の組合せからなり胎土焼成とも良好である。(7)は縦列横線と刺突文の組合せで，(2)(7)(10)も同じ文様の系統である。

第３２図（３．８．１１）

(3)は口縁部で胴部にかけて横に数条のみみずばれ状凸帯文がつきススが付着している。(8)は縦にみみずばれ状凸帯文がつきさらに刺突文が加わりススが付着している。(10)は(3)(8)が直行しているのに対して，胴部がカーブしみみずばれ状凸帯と，帯状突帯に刺突文をめぐらし器壁は内外ともに貝殻条痕で調整されている。いずれも轟式である。

第３２図（４．５．１２）

この３点の土器に共通した点は全部口縁部で，胎土焼成ともほぼ同じであり，器壁内外に貝殻条痕の調整が施され，上下２段の刺突文をつけていることである。ただ細部にわたってみれば，(4)の刺突文は爪状のものに近く，(12)の刺突文はヘラの先端の尖った部分と考えられ，(5)のそれは先の鈍い施文具を使用していることが明瞭で，刺突文の施文具にそれぞれの特徴をみることができる。器形は口縁が直行し，胴部がいくらかふくらむ鉢と思われる。

第３２図（６．９）

縦列沈線文とそれに直行する細い条痕状沈線文から成るこの文様の土器は(1)(2)と同じ系統の土器と思われる。

第３２図(13)

黒く磨かれたように光沢のある胴部は何回も条痕で器面調整され，沈線文様の印象を与えている。おそらく口縁から頸部にかけては，はっきりとした別の文様で構成されると思われる。

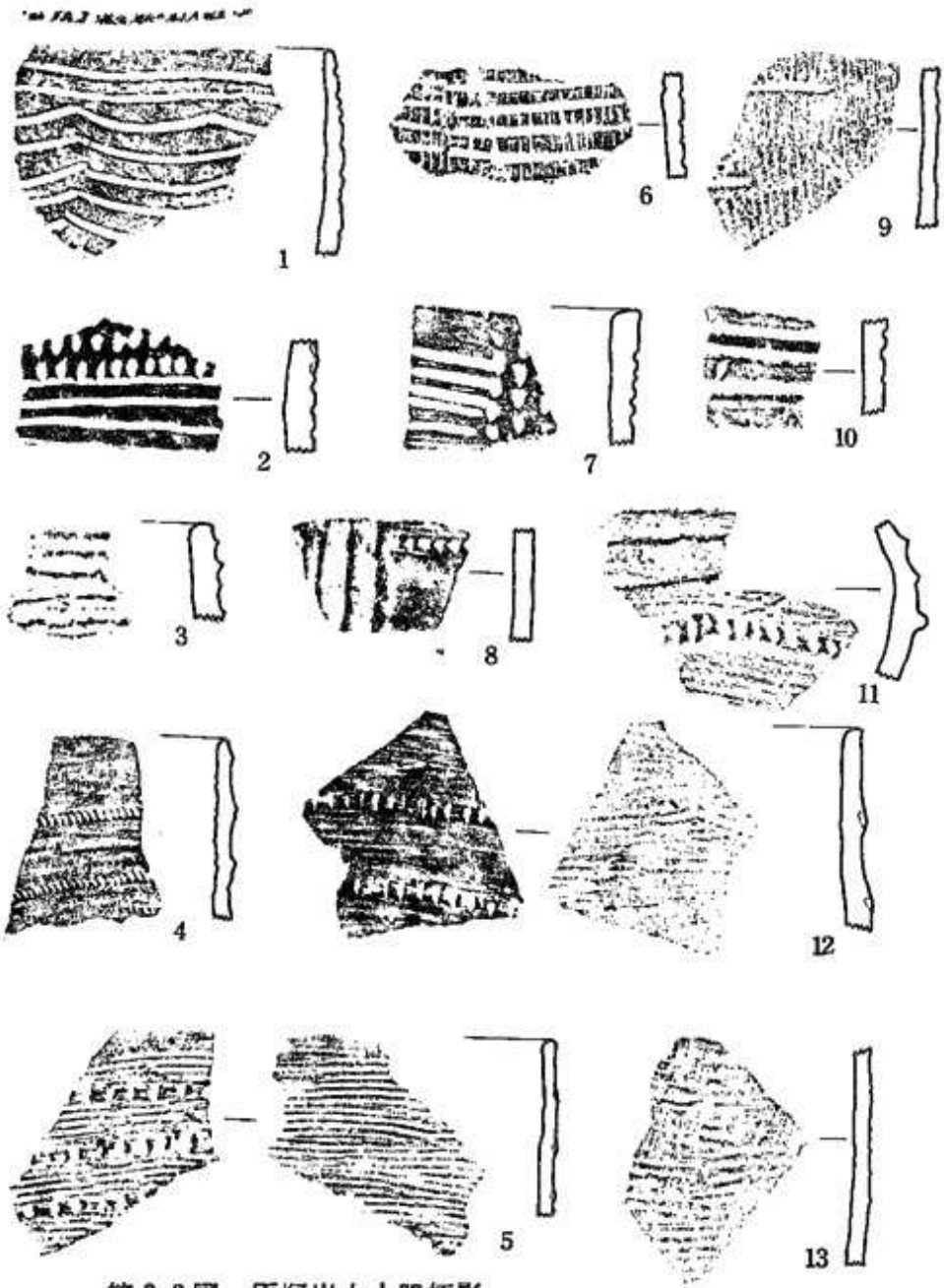
第３０図(15)

前期の時期と思われる底部はこの１点のみで，胎土焼成ともに荒くほとんど丸底に近いが，わずかに平底の部分も残している。文様は刺突文が下部まで施され，第１図(12)の刺突文の文様との共通点をみる。

押型文土器

第３０図（１３．１４）

押型文土器は層位的に検出することはできなかったが，３点の出土をみた。全部が山形押型文であり，施文は整然としており胎土焼成ともに良好である。



石　器　　第３２図　灰塚出土土器拓影

第３３図（１．２）

(1)はチャート製の石匙で薄い板状原石を加工したもので両面に自然面が残り，横長である。(2)もチャート製横剝で(1)に比較すると加工の度合は少ない。時期的には縄文前期の層より出土した。

第３３図(3)

チャート製で石匙に類似しているが一面だけていねいに刃部加工があり剝片石器の一面をもつ。

第３３図（4. 5）

不定形な三角形をした剥片石器で，わずかな刃部加工をしているにすぎない。石質はチャートである。

第３３図（6. 7. 8）

(6)(7)は不純物を含む霧島山系の黒耀石を材料とする縦長の剥片石器で，わずかに加工痕とも使用痕とも判断がつきにくい痕跡を残す。(8)については縦剥ぎの剥片石器で，くびれの部分に加工痕を残す。

第３３図(9)

チャート製で表裏に刃部加工を施し小型のスクレパーと思われるが，ある程度破損している。

第３３図（10. 11. 12. 13）

石鏃は層位的にとらえることはできなかったが，ここにあげた石鏃は(10)が安山岩質であり，他はチャートあるいは黒曜石製の剥片利用のものである。

第３４図(1)

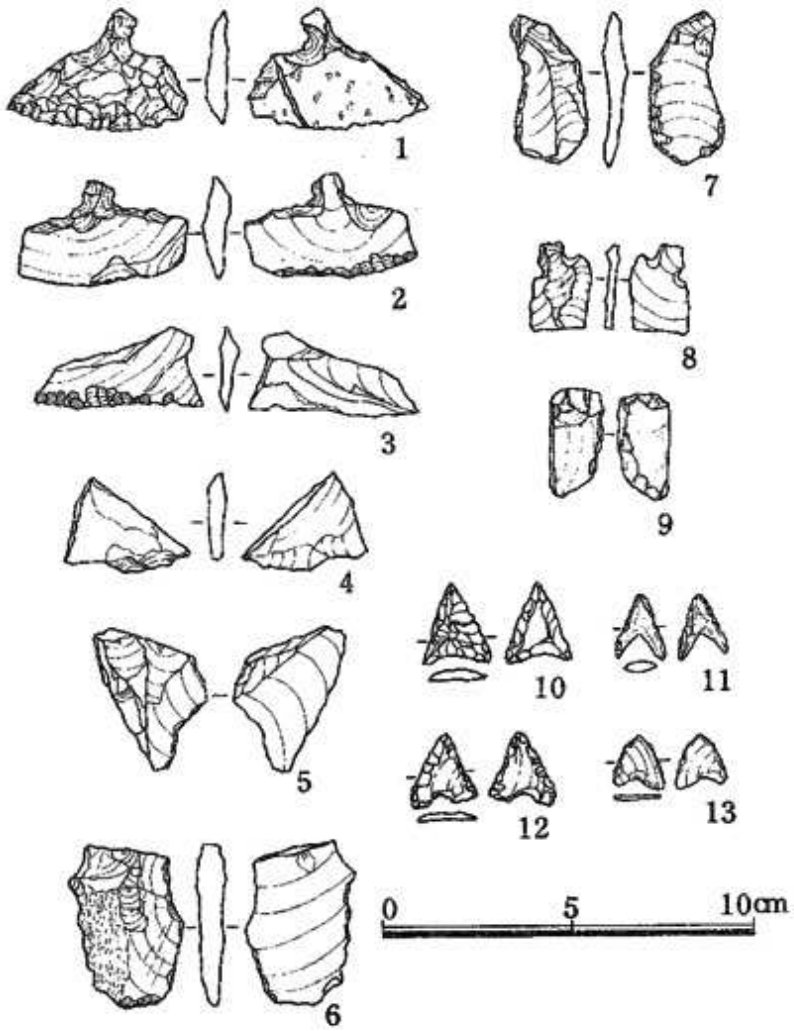
粘板岩製の大型スクレパーでプラットフォームに自然面を残し，右図は２回の剥離をしており，断面もぶ厚い。層位は不明である。

第３４図(2)

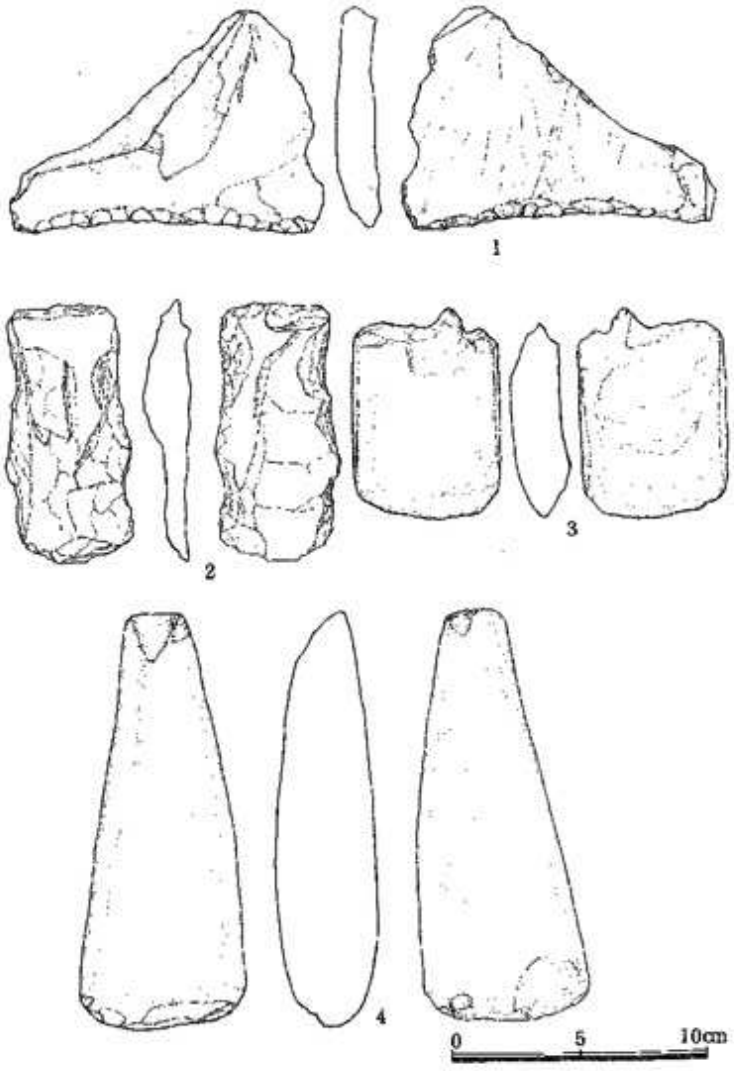
短冊型をした安山岩製扁平打製石斧で周辺加工も形を荒く整えている程度で，良好な石器とはいえない。層位は晩期土器との共伴である。

第３４図（3. 4）

どちらも磨製石斧で３の方は一部破損し扁平で両刃を磨き左右とも面どりを行なっている。(4)はぶ厚い全体に丸味をもった全面研磨の石斧で両尖端部を一部破損している。



第３３図　灰塚出土石器実測図



第３４図　灰塚出土石器実測図

考　察

灰塚遺跡の場合，霧島山麓の末端に位置し下方に川内川を見おろす舌状台地に営なまれ，すぐ近くに湧水があり水には恵まれているようである。小林・えびの地方における遺跡はこのような地理的環境に恵まれたものが多いようである。

小林・えびの地方において縄文晩期の遺物を出土する遺跡はあまり知られていないが，近年になって小林市東方中学校裏の畑地で確認され，昭和４７年九州縦貫道の調査で確認された小林市出の山遺跡がある。しかしこの両遺跡の資料は若干の量で黒色研磨土器数点だけであった。そういう点から今回の晩期土器の確認はセットとして把握できた意義は大きい，しかし層位的にはきわめて不安定な要素をもち多少の攪乱を受けた地点もあった。

後期の土器群は深鉢，中鉢，浅鉢，脚を有する土器と一応のセット関係はみられる。鐘ヶ崎や小池原系統にみられるような磨消縄文の手法も，かなりの距離をもつこの地方にも入りこんでおり，中九州的な要素をもつ反面，小型波状口縁土器や貝殻文を用いた文様など南九州的な要素も当然み受けられる。第３１図(5)(6)(7)にみられる特徴は田野町青木遺跡からも早くから確認されている。青木遺跡の場合数百点のメンコ状土製品が出土しているが，当遺跡からは２個の土製品が出土している。出土土器の割合は後期の時期が一番多い。

えびの地方における前期土器の出土は，同じ縦貫道区域内の小林市平木場遺跡に次ぐものである。平木場遺跡では出土量は少量であったのに対し，今回の調査では多くの資料を得ることができた。また第３２図(6)(9)の土器は平木場遺跡でも全く同じものが確認されており底部は丸底になる。前期土器を分類してみると，Ⅰ沈線をもつもの，Ⅱ沈線と刺突文の組合せのもの，Ⅲみみずばれ状突帯と刺突の組合せによるもの，Ⅳ貝殻条痕を基調とし，数条の刺突文を組合せるもの。Ⅴただ条痕のみのものとに分類できる。このように前期土器は多様にわたっているが，いずれも前期中葉の時期に相当するものと思われる。

石器をみてもこの地方特有の石質は不純物を含む原石は割合小さい角礫のものとチャートを素材として用いている。石器は土器との共伴関係で結ばれ，特徴的なものは剝片を素材とした小型のものがあげられた。

これからも川内川流域に点在する遺跡の調査が望まれるが，中九州的文化のつながりを求める上に灰塚遺跡は貴重なものである。

（安楽　勉）

参　考　文　献

(1) 日本の考古学Ⅱ　　河出書房

(2) 大分県文化財調査報告第十三輯　　横尾貝塚　小池原貝塚緊急発掘調査大分県教育委員会

(3) 文化財調査報告書(1)　　宮崎県教育委員会

(4) 曾畑式土器に関する研究　　江湖貝塚　　坂　田　邦　洋

弥生式土器

灰塚遺跡から出土した弥生式土器は，粗製甕形土器など4トレンチ及び3トレンチで採集された一部の土器をのぞき，破砕した細片が多く，出土量の割には，完形資料が少なかった。時期的には，終末様式とみられるが，三つに類別することができる。

A　類　35図の（1～3）

A類は，弥生式土器集成で中九州第Ⅲ様式Cにあげられている免田式土器である。完形品はなく，7点の小破片が，5トレンチ8区のⅡ層（黄褐色土層）より断片的に出土している。

(1)は，頸部つけ根から上腹部にかけての破片である。表面はよく調整され，色は灰褐色を呈する。内面は黒色で，凹凸が多く，粘土の継目が残るなど，輪積成形されたことがわかる。20本の条線の下段に，下弦の重弧文を描いている。(2)・(3)は稜をなす胴部にあたり，褐色である。(2)は，内面に横走する条痕がある。(3)は，数本の条線の下方，胴稜線上部の空間に，大小の重弧文帯を上下二段に施文している。下腹部には，縦行する刷毛目痕がみられる。推定胴径は18㎝である。

重弧文の鋸歯状になったものはみられないが，文様の沈線の浅いことや，胴の屈曲のゆるやかなことなど，免田式の中でも後半期に位置づけられるものであろう。当遺跡においては，免田式土器と地下式板石積石室との直接関係を示す出土例はなかった。

B　類　35図の（4～11）

頸部や胴部に一条乃至二条の刻目凸帯或は絡縄状凸帯をめぐらした壺形や甕形の土器である。量的に少なく，各トレンチから断片的にしか検出されていない。

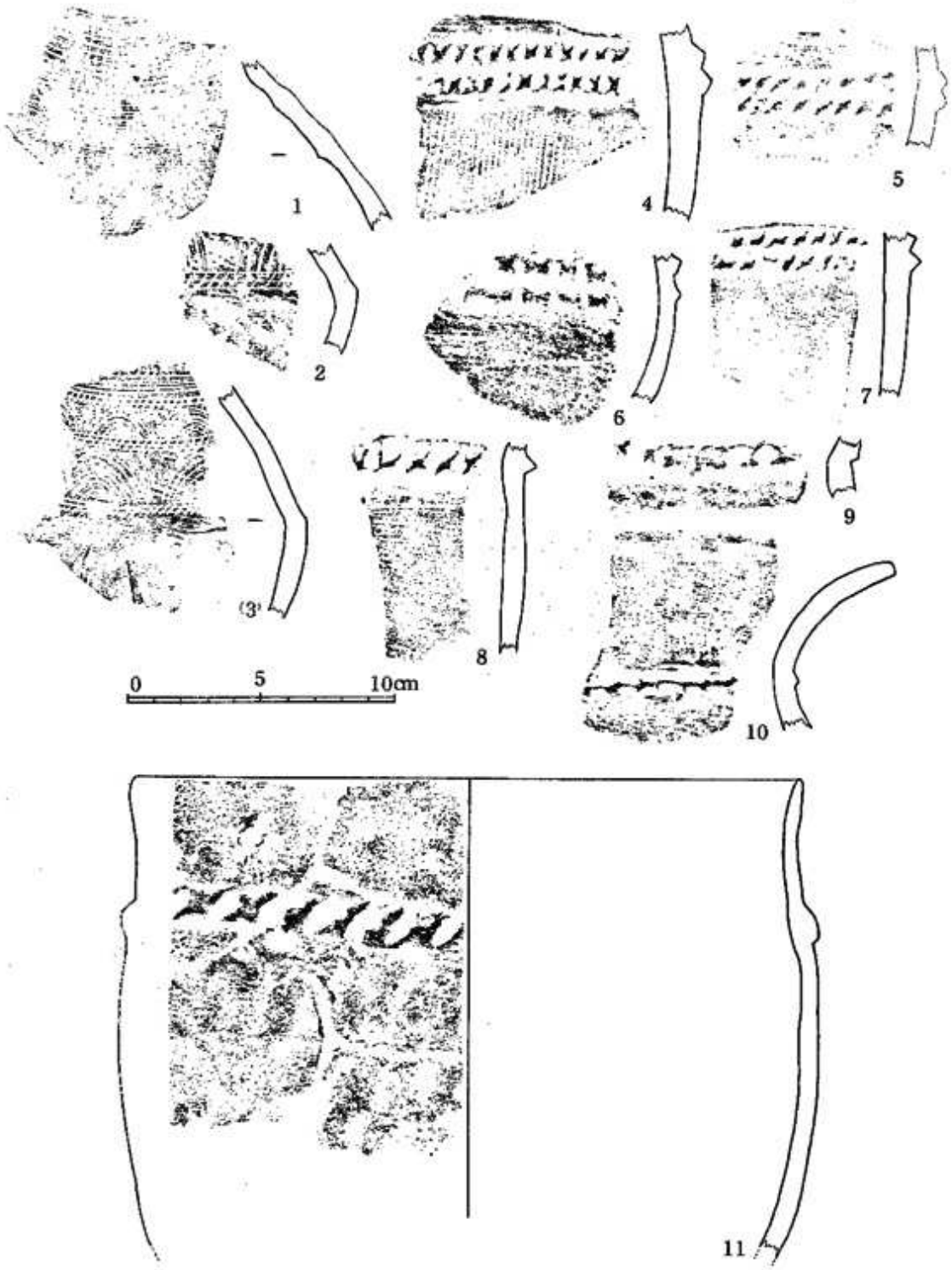
（4～7）は，壺形土器の胴部破片とみられる。 1・5乃至2㎝幅の凸帯を沈線で二条に分け，刻目をつけた篦或は布を巻いた施文具でもって，上下同時に，縦や斜に押圧して刻目をつけている。(4)は器面に縦行の刷毛目痕がある。

色は黄褐色乃至灰褐色で胎土には多量の石英砂をまじえる。このため表面の剝離したものはザラザラした器面となっている。

（8～11）の土器は，口縁の外反する甕形土器の破片である。凸帯断面が三角形のもの(8)と，台形のもの(9)がある。(8)は切目を入れた篦状のもので施文し，器面には横走の条痕がある。(10)は反りの大きい口縁部の破片で，口縁部と胴部のつなぎ目に，上下からつまみ出したように低い凸帯を貼りつけて成形したものである。刻目はみられない。色調は黄褐色で，胎土は粗く石英など多くの粒子を含む。

(11)の土器は，口縁部から胴部にかけ器体の四分の一ほどがのこっている。推定口径25㎝である。口縁部の反りは小さく，張りの少ない胴部は，そのまま下腹部から底部へ向って細まり，低い脚台状の底部がつく器形になるものとおもわれる。頸部をめぐる幅1．5㎝の凸帯には，斜に布目の押圧文が印され，絡縄状の凸帯となっている。色調は紅褐色，裏面は灰褐色を呈する。胎土には，他と同様珪砂の粒子を混入しており，表面の別離したところは，多くの粒子が表われ，肌が粗くなっている。器面には煤の付着がみられる。

これらの土器は，宮崎県内では，霧島山麓の西諸一帯に分布がみられる。これまで，完形資料の少ないこともあって，器種・型式共に明確でないが，弥生式土器集成の南九州第Ⅴ様式の成川式土器や，東九州のⅤ様式にあげられている赤江出土の一部に類例を求めることができる。後期末から終末期に位置づけられるが，小林市平木場遺跡等における古式土師器との接触など，時期的にはかなり下るものとおもわれる。



第３５図　灰塚出土土器拓影

C　類　36図の（12～41）

C類土器は，第4トレンチ2区の第Ⅱ層（黄褐色土層）に堀り込まれた土坑内に集積した状態で出土した甕形土器，甕用蓋形土器，小形蓋形土器，小形高坏形土器と，各トレンチ出土の類似土器とA類・B類以外の共伴土器を一括C類とした。

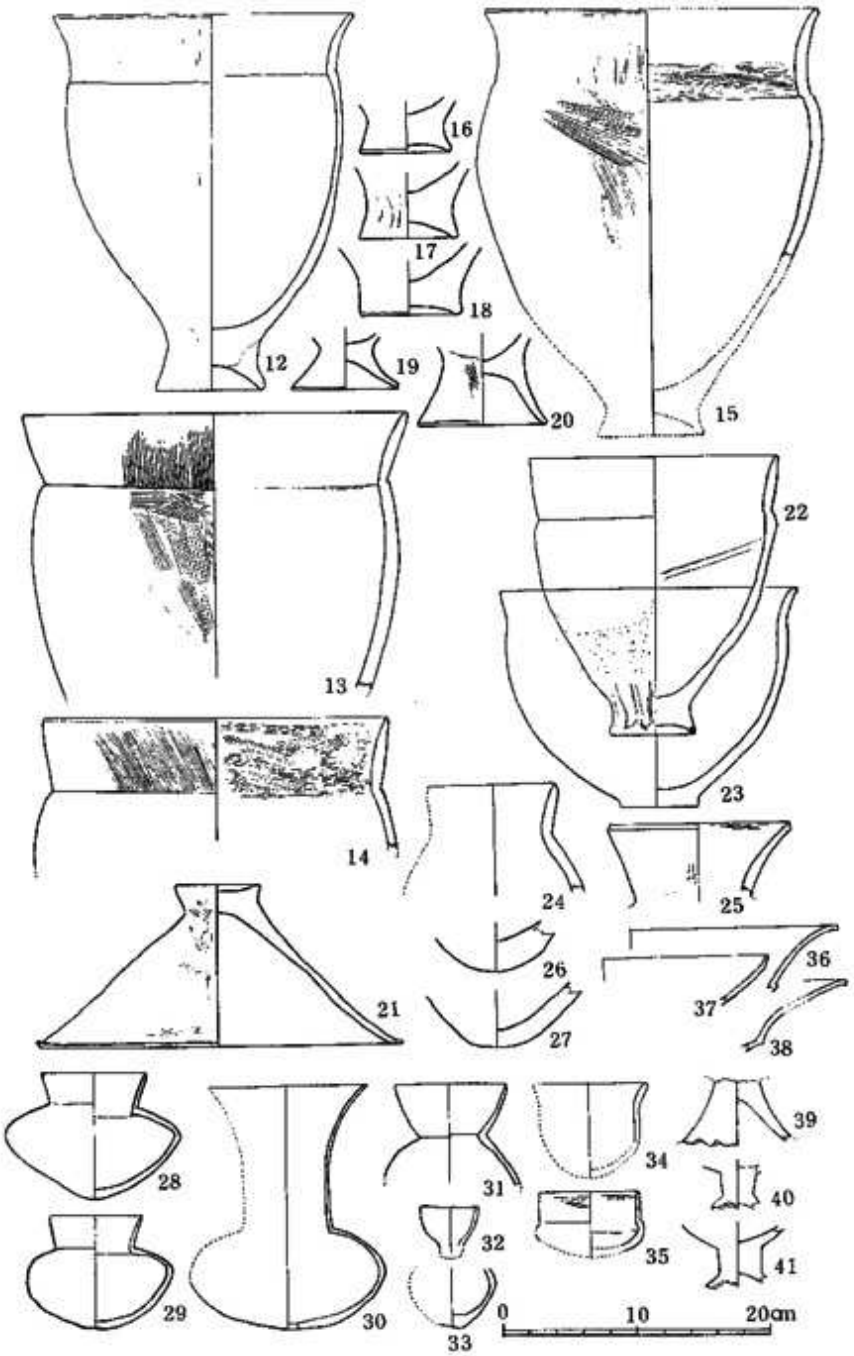
甕形土器　36図の（12～20．22）立ちあがりながら外反する口縁部をもち，胴部とのつなぎ目に，小さな段をつくるのを特徴する無文の粗製土器である。胴の張りは少なく，最大幅は上位にあり，口径と同じか，やや大きめである。底部は，外部に張り出す低い脚台状の上げ底がつく。底部の張り出しは，器体成形後に粘土輪を貼りつけたためらしく，貼り付け部分が完全に剝離したものもみうけられる。

色調は，灰褐色或は黄褐色で，やきあがりもわるい。胎土には，かなりの砂粒がまじる。器面調整は，篦仕上げによるものと，刷毛仕上げのものがあるが，どちらもあらく，装飾性のない，実用本位の成形である。

12の土器は，口径22．8cm，高さ28．2cm，比較的薄手に仕上げられている。器面調整は，ヘラ仕上げによるもので，研磨はなく，あらい調整である。灰褐色を呈する内面下腹部は黒色である。

13・14は，推定口径26～29cmで，厚手につくられている。口縁部には縦行または斜行の刷毛目痕が，頸部直下は横なでによる，胴部には斜走する刷毛目痕をのこしている。14は口縁内面にも横走する刷毛目痕があるが，胴部の刷毛目痕のあとはのこされていない。

15は，第3トレンチより検出されたものである。口径25cm，復元高は33cmである。13・14にくらべて胴の張りがみられる。口縁部内面には，横走する刷毛目調整痕が明瞭にのこされている。表面の剝離が著しく，器体の刷毛目痕は，わずかにあとをのこす程度である。色調は黄褐色である。22も第3トレンチから出土したものである。口縁は立ちあがり，底部にはヘラ削りのあとをのこす。器面調整は，12同様粗雑なヘラ仕上げである。常時鉄分の多い水中にあったのか下腹部にあかく鉄分が付着している。また，内面には，斜めに炭化物の付着線があり，この用器が傾斜した状態で使用されていたことを示している。口径18cm，高さ　20．8cmである。



第３６図　灰塚出土土器実測図

以上の甕形土器は，いずれも表面に煤が付着し，煮沸用器として使用されていたことを示している。特に13～15は，口縁部から上腹部にかけて煤の付着が著しく，下腹部は，灰黄色乃至灰白色を呈し，強い火焔にさらされていたことを物語っている。

甕用蓋形土器　３６図の（２１）　復元高１２㎝，直径２７㎝の笠形の土器で，灰褐色を呈する。胎土は粗く，やきあがりもあまりよくないが，甕にくらべると器面調整は丁寧で，部分的には研磨のあともみられる。つまみのつくりは，甕形土器の底部と全く同じである。つまみの径６．５㎝。

鉢形土器　３６図の（２３）　復原口径２２㎝，高さ１６㎝，色調は褐色，表面は煤の付着が著しく黒色を呈する。第５トレンチ８区のⅡ層から出土している。

壺形土器　３６図の（２４～２７）　出土例が少なく（２４・２５）の二点があるだけである。㉔は，推定口径９乃至１０㎝で，（２６・２７）のような丸底のつく長胴形の器形が予想される。やきあがりは堅く，褐色を呈する。㉕は，縦行の刷毛目痕のある口縁部で，口径は１３．５㎝である。色調は褐色，胎土，焼成は甕形土器と同じである。

高坏形土器　３６図の（３６～３８）　薄手のよく研磨された口縁部破片で，高坏形土器の坏部破片とみられる。㊱は，椀形の坏部が予想される。（３６・３８）は，口縁部と底部が別々につくられ，つなぎ目が稜をなす坏部となるものであろう。口唇と稜上部に刻目が施文されている。これに㊳のような裾開きする脚がつくものとおもわれる。

完形資料がなく推定の域を出ないが，和泉式土器のえいきょうもみられ，土師式土器とすべきものかもしれない。

小形土器

灰塚遺跡では，C類土器に共伴して，或は単独に（２８～４１）に示した様な小形の土器が出土している。手捏ねの非実用的なこれらの土器は，おそらく祭祀用土器として作られたものであろう。従って，単独に採集されている小形土器のなかには，灰塚遺跡の地下式墳等の墓地立地を考えるとき，埋葬儀礼と何等か関連をもって放置されていたものかもしれない。

（２８・２９）の小形壺形土器は，４トレンチ２区より（１２～１４）の甕形土器に共伴して出土したものである。胴の最大径が上位にあるため肩を張った丸底の器体に，立ちあがりの短い口縁部をつけた短頸壺形土器である。胎土，焼成は，甕形土器と全く同じである。色調は灰褐色を呈する。

㉘…… 口径７．８㎝，高さ９㎝，㉙…… 口径７㎝，高さ９㎝，

㉚扁球の胴体に，大きく口の開いた筒形の口頸部をつけた長頸壺形土器である。底部は円底で，底部中央が穿孔されている。復元形の口径１２㎝，高さ１８㎝，頸

部の長さ１５㎝である。胎土はよく精選され，やきあがりもよく，色調は淡黄色である。

㉙椀形の口縁部をもつ蓋形土器である。下腹部がないが，底部は円底か，それに近いものであろう。紅褐色を呈する。胎土も精選され，やきあがりもよい。

胎土，焼成，色調すべての面で，㉚・㉛は，土師式土器とみるべきでのであろう。

（３２～３５）は，坩形土器の破片である。灰褐色或は紅褐色の粗製品である。

（３９～４１）は，高坏形小形土器の脚部である。㊴は，脚部上部から開いた裾の広がる脚台である。（４０・４１）は支柱状の脚台で，いずれも紅褐色を呈する。㊵は，坏部内面が黒色になっている。

これらのC類土器は，甕形土器に特徴があり，それは方形周溝墓をもった都城市年見遺跡出土の甕形土器に類似し，終末期の土器として位置づけられるものであろう。

張りが小さく胴長で，低い脚台状の上り底をもつ器形には，赤江や川南など，東九州第Ⅴ様式の伝統もみられるが，刷毛の横なでによる粗い調整など，装飾性を無視し，実用本位に成形された器形の中には，土師器的要素も感じさせる。また，A類やB類など免田式・成川系土器との混在，或は小形壺器土器や高坏形土器など土師式土器との接触が明らかな土器との共伴など考えると，C類土器は，時期的には，すでに土師期にあったともいえる。非実用的な小形土器の存在と，共伴した高坏形土器片に類似する高坏形土器が，１７号地下式墳の石蓋直上に破砕された状態で存在したことは，土器副葬前の埋葬儀礼や，灰塚遺跡の墓地立地との関連を考える上で，C類土器のもつ意味は極めて重要であったのである。遺構との関連が十分確認されなかった事は，誠に遺憾であった。

石　器

石庖丁　３７図

弥生期の石器としては，図示した石庖丁が２点出土しているだけである。

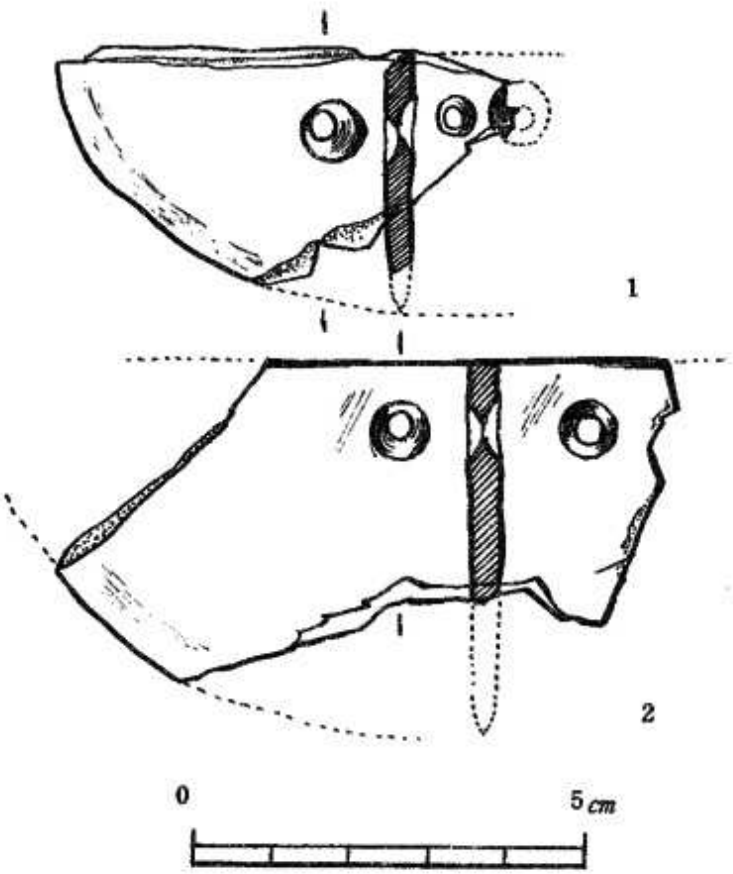
どちらも粘板岩製の，背部直線形，刃部弧状の基本形をもつ石庖丁である。

⑴は，半分欠損しているが，１０㎝程度の大きさと思われる。大小３ケの孔があけられている。やゝ，片刃である。

⑵は，破損の状態が大きいが，推定の大きさは１２．３㎝である。背部よりに２孔が整然と穿たれている。刃は両刃である。

6トレンチより単独に出土しており，A・B・C類のどの土器に伴うものか明らかではないが，いずれにしても，終末期における石器の使用を示すものである。

（茂山　護）



第３７図　灰塚出土石庖丁

第4章　灰塚地下式横穴人骨

内藤芳篤

わが国の古墳時代人骨に関しては，城（1938）[1]の研究をはじめとしていくつかの業績[2]が見られ，また少数例ではあるが各地における出土人骨について若干の報告例もあり，概括的には一応その形質が明らかにされている。しかしながら島・寺門（1957）[3]の近畿地方古墳時代人の頭骨に関する研究によれば，時代的変化の見られる項目と共に，時代差がなく近畿地方人に共通した項目のあることも明らかにされている。すなわち時代差と共に当時すでに地方差が存在していたことを示すものであり，このことは日本人の成りたちを考える上からもきわめて重要なことと思われる。

さて，著者がここに報告しょうとする資料は，えびの市灰塚古墳群の第2次調査において地下式横穴から得られた古墳時代人骨であるが，地下式横穴は古墳時代における南九州，とくに日向南部および薩摩，大隅両地方の一部に分布する特有な埋葬施設であり，これらの人骨形質を明らかにしていくことは地下式横穴の考古学的解明と共に興味深い問題である。このたび出土した人骨8体はいずれも保存状態が悪く，骨格の一部を残すのみであるが，幸い成人男，女性骨1体ずつの顔面頭蓋が比較的よく接合できたので，以下主としてその所見について述べてみたい。

なお計測法はMartin-Saller（1957）[4]の方法に拠ったが，比較資料として上記した城（1938）の西日本古墳人および島・寺門（1957）の近畿地方古墳人の成績を参照した。

表1　人骨資料

人骨	横穴	性別	年令	備考
灰1	第7号	女性	熟年	朱（眼窩部）
灰2	第9号	女性	熟年	
灰3	〃	女性	熟年	
灰4	〃	男性	壮年	顔面頭蓋の保存良好
灰5	〃	女性	壮年	顔面頭蓋の保存良好
灰6	第10号	不明	不明	
灰7	〃	不明	不明	
灰8	第16号	男性	不明	

資　料

人骨は灰塚古墳群の地下式横穴第7号，第9号，第10号および第16号の4基から合計8体が見いだされた。その詳細は表1に示すとおりであるが，いずれも成人骨で，男性2体，女性4体，性別不明のもの2体であった。

表2　計測値

項　目	男性（№4人骨）	女性（№5人骨）
上顔高	61	60
中顔幅	102	
上顔示数(V)	59.80	
眼窩幅	(ℓ) 43	(r) 37
眼窩高	(ℓ) 32	(r) 31
眼窩示数	(ℓ) 74.42	(r) 83.78
両眼窩幅	102	97
前眼窩間幅	24	22
前眼窩間示数	23.53	22.68
鼻幅	27	26
鼻高	42	45
鼻示数	62.29	57.78
全側面角	84.5	80.5
鼻側面角	93.5	91.5
歯槽側面角	64.0	58.0

所　見

(1) 顔面頭蓋

顔面頭蓋の主なる計測値は表2に示すとおりである。

1．男性骨（№4人骨，第9号横穴出土）

前頭部の膨隆は比較的弱く，眉上弓は隆起し，眉間も高まっており，鼻根との境は陥凹している。また鼻根の幅も比較的広いが，隆起は低い。

顔面部の諸径は一般に大きくないが，高径はとくに低く，一見して低・広顔の傾向が強く現われている。

すなわち顔型にはｈｙｐｅｒｈａｍａｅｐｒｏｓｏｐ（過低顔型）に属し，それに相応して眼窩および鼻部もそれぞれｃｈａｍａｅｋｏｎｃｈ（低眼窩型），ｈｙｐｅｒｃｈａｍａｅｒｒｈｉｎ（過低鼻型）に属している。

また前眼窩間示数が大きい値を示しているが，鼻根が広く両眼窩が離れていることを物語っている。

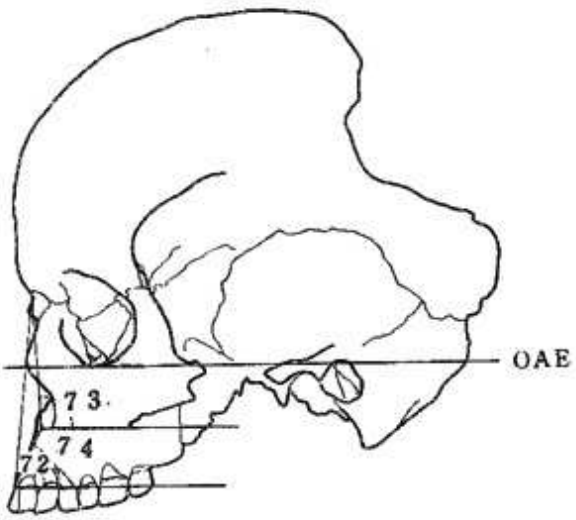


図１　男性人骨（№４）

７２：全顎面角
７３：鼻側面角
７４：歯槽側面角

次いで顔面角については，全側面角はｍｅｓｏｇｎａｔｈ（中顎型），鼻側面角はｏｒｔｈｏｇｎａｔｈ（正顎型）にそれぞれ属しているが，歯槽側面角はかなり小さく，ｈｙｐｅｒｐｒｏｇｎａｔｈ（過突顎型）となっている。

歯牙は鋏状咬合で，咬耗度はＢｒｏｃａの２度，右下顎第２大臼歯に齲歯が見られるが，第３大臼歯はいずれも萌出していない。また抜歯の痕跡は認められない。

２．女性骨（№５人骨，第９号横穴出土）

前頭部は比較的よく膨隆している。眉上弓の隆起は弱いが，眉間は僅かに膨隆している。また眉間から鼻根への移行部は陥凹が弱く，鼻根の隆起も低いが，幅

は広い。

顔面部は高径が低く，低・広顔の傾向は勿論現わしているが，幅径は男性の場合程著しいものではなく，比較的狭いもののようである。頬骨弓幅あるいは中顔幅の計測ができないため顔示数，上顔示数を求め得ないが，そうした傾向は眼窩あるいは鼻部の形態にも見られるようである。すなわち眼窩はｍｅｓｏｋｏｎｃｈ（中眼窩型），鼻部はｃｈａｍａｅｒｒｈｉｎ（低鼻型）にそれぞれ属している。また前眼窩間示数も大きいが，男性骨よりは小さい。

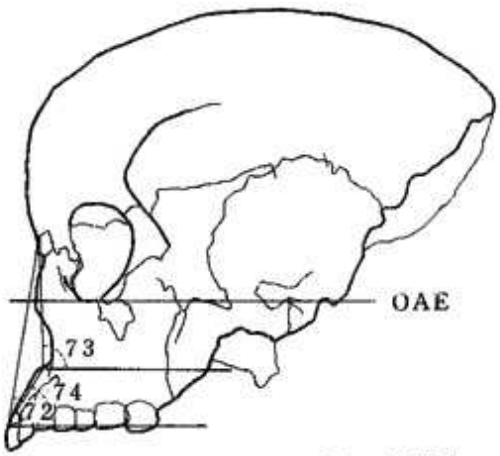


図２　女性人骨（№５）

７２：全側面角
７３：鼻側面角
７４：歯槽側面角

顔面角については，全側面角がｍｅｓｏｇｎａｔｈ（中顎型），鼻側面角がｏｒｔｈｏｇｎａｔｈ（正顎型）にそれぞれ属しているが，歯槽側面角は著しく小さくて，ｕｌｔｒａｐｒｏｇｎａｔｈ（超過突顎型）に属している。

歯牙は鋏状咬合で，咬耗度はＢｒｏｃａの１～２度，齲歯はなく，第３大臼歯はいずれも萌出が見られない。また抜歯の痕跡も認め得ない。

３．比　較

男性骨の上顔高は６１㎜であるが，西日本古墳人および近畿地方古墳人の平均値はそれぞれ６８．７㎜，７１．８㎜であり，明らかに低い。中顔幅では１０２

㎜で，西日本古墳人（１０２．６㎜）と差がなく，近畿地方古墳人（１０５．８㎜）よりは狭い。したがって上顔示数（Ⅴ．）（５９．８０）は西日本，近畿両古墳人よりも小さい値を示し，低顔性が強く現われている。

眼窩幅は４３㎜，眼窩高は３２㎜であるが，眼窩幅では西日本古墳人（４３．０㎜），近畿地方古墳人（４２．６㎜）とほとんど差がなく，眼窩高では西日本古墳人（３４．７㎜），近畿地方古墳人（３４．６㎜）より低いので，眼窩示数（７４．４２）ではかなり小さい値を示している。

鼻部についても，鼻幅が２７㎜，鼻高が４２㎜で，鼻幅では西日本古墳人（２６．０㎜），近畿地方古墳人（２６．６㎜）と大差はないが，鼻高では西日本古墳人（５１．１㎜），近畿地方古墳人（５２．０㎜）よりはるかに低く，したがって鼻示数では明らかに両古墳人より大きい値を示している。

また女性骨については男性骨の場合程著しいものではないが，同じ傾向が認められる。

(2) 大腿骨

四肢骨は残存部が少なくほとんど計測等はできないが，№４人骨（男性）と№５人骨（女性）の骨体部が残っていたので，附記しておきたい。

１．男性骨（№４人骨，第９号横穴出土）

左側大腿骨の骨体部で，ほぼ中央と推測される部位で矢状径２７㎜，横径２５㎜，断面示数１０８．０となり，なおこの部分の周径は８８㎜であった。骨体上部の扁平性は観察できないが，残った部分の後面における粗線はよく発達しており稜状をなしているが，著明な柱状形成とは認められない。

２．女性骨（№５人骨，第９号横穴出土）

左側大腿骨の骨体部が残っていたが，全体として円味があり，柱状形成などは認められない。ほぼ中央と推測される部位で，矢状径２５．２㎜，横径２５．４㎜，断面示数９９．２１であり，また同部位の周径は８２㎜であった。

総　括

灰塚地下式横穴から出土した８体の古墳時代人骨は一般に保存が悪く，骨格の一部を残すのみであったが，そのうち成人男，女性それぞれ１体ずつの顔面頭蓋が比較的よく接合できたので，主としてこれらの所見について記載した。以上述べたと

ころを総括すれば次のとおりである。

1．灰塚地下式横穴の古墳時代人骨は，ｈｙｅｒｈａｍａｅｐｒｏｓｏｐ（過低顔型）に属し，城（１９３８）の西日本古墳人に比して中顔幅ではほとんど差がなく，上顔高では明らかに低い。また島・寺門（１９５７）の近畿地方古墳時代人よりは中顔幅，上顔高共に劣り，とくに上顔高における差が著しい。したがって上顔示数（Ｖ．）では両古墳時代人よりはるかに小さい値を示している。すなわち古墳時代人の中でも一層強い低顔の傾向が現われている。

2．眼窩，鼻についても顔型と全く相応した形態を示し，両古墳時代人より高径で著しく劣り，幅径ではほとんど差異が見られない。

3．また鼻根の形態については，その幅は広いが，隆起は低く，高い隆起を示している縄文時代人骨と異なり，古墳時代人に共通した形状を示している。

4．顔面角では，歯槽側面角において，ｕｌｔｒａ－，ｈｙｐｅｒｐｒｏｇｎａｔｈ（超――過突顎型）を示し，とくに女性骨の例では強い突顎性が認められた。

5．歯牙は鋏状咬合で，咬耗度は著明でなく，禹歯の見られた例もあった。なお抜歯の痕跡は認められない。

6．大腿骨の骨体部において，男性骨の例では後面の粗線がよく発達していたが，強い柱状形成はなく，女性骨の例では丸味をおびたもので粗線の発達も弱いものであった。

以上要するに，灰塚地下式横穴の古墳時代人骨は保存状態も悪く，研究資料としてはきわめて不充分ではあったが，従来いわれている古墳時代人の特徴を現わしながらも，西日本一帯から集められた城の報告，あるいは近畿地方の出土例を集められた島・寺門の報告に見られる古墳時代人骨よりも明らかに強い低・広顔の傾向が認められることは注目すべきである。

なお，著者は現在同地方の地下式横穴から得られた人骨を整理中であり，資料の整備をまって詳しい報告を行ないたいと考えていることを附記しておきたい。

文　献

1）　城　　一郎（１９３８）：古墳時代日本人人骨の人類学的研究。人類学輯報，第１輯：１－４３７。

2）　佐野　　一（１９６６）：九州地方古墳時代人人骨の研究（予報）。日本人類学会・民族学会連合大会　第２０回記事：２１２－２１４。

3）　島　　五郎・寺門之隆（１９５７）：近畿地方古墳時代人頭骨について（略報）。人類学雑誌，６３巻２号：５７－６４。

4）　Ｍａｒｔｉｎ－Ｓａｌｌｅｒ（１９５７）：Ｌｅｈｒｂｕｃｈ ｄｅｒ Ａｎｔｈｒｏｐｏｌｏｇｉｅ Ｂｄ. Ⅰ. Ｇｕｓｔａｖ Ｆｉｓｃｈｅｒ Ｖｅｒｌａｇ, ｓｔｕｔｔｇａｒｔ.

第５章　結　　語

灰塚遺跡における最大の考察課題は，地下式板石積石室と地下式横穴との関連，弥生終末期の土器群と前記墓制との関係であろう。

地下式板石積石室の発掘調査は，本県では昭和３３年２月北諸県郡高城町香禅寺において調査された一例しかなく，[①] しかも今回のようにほぼ完形に近い遺構群の調査は初めてであり，その上，１７基を数える地下式横穴群と共存して発見されたことは本県の考古学研究史上例のない画期的な調査であった。えびの市内において，過去の地下式板石積石室の発見例は近年になって若干知見されるようになったが，何れも未調査のまま破壊されている。[②]

当遺跡の地下式板石積石室の築造年代については，地下式横穴と密接な関係があるので，まず，地下式横穴の特色及び編年から先きに取り上げ，その上で関連的に考察したい。

地下式横穴の閉塞方法としては，扁平な自然石を利用して竪壙上部をふさぐ型式と，羨門部を礫あるいは扁平な自然石，または赤褐色土層のブロック等を利用して閉塞しさらに竪壙を完全に埋め戻す型式の２種類がある。前者の型式は，えびの市内に多くまた，北薩の大口地方にもかなり見られる。その北東限は現在のところ小林市石塚尾中原地下式横穴である。[③] 今回の調査では１７基が発見されたが全て竪壙上部を閉塞する型式であった。この種の閉塞型式は，西都市，国富町周辺及び志布志湾沿岸一帯の地下式横穴には見られない。おそらく加久藤盆地及び隣接の大口盆地等で発生したものであろう。もちろんこの両地方にもそのほか後者の閉塞型式も数多く見られる。

さて，当地下式横穴の内部構造であるが，玄室の床面プランは，方形，あるいは隅丸方形で広がりは構造全体の中軸に対して横に広がる平入りの型式であった。天井は，剝落のため推定のものもあるが四注造りか，あるいはその様式をとどめていた。

副葬品の特色は，剣と平根三角鏃が最も多く直刀がわずかに２口で，刀子，長頸鏃が皆無であるということである。しかも平根三角鏃はすこぶる巨大で最も重いものは８０９あった。

この１７基のうち，遺構の保存状態が最良で玄室がかなりの大きさであった１７号の竪壙内外から発見された土師高坏片は，おそらく壙外で祭祀後，破砕されたも

のとみられるがこれは時期的には関東の和泉期相等に編年されてよい土器である。従って一応の地方差を考慮しても5世紀末から6世紀初頭の所産といえる。また，地下式横穴の構造上の編年からみても妥当な年代と思われる。ほかの地下式横穴の築造年代も玄室構造に若干退化現象の見られるものもあるが，副葬品に差も認められないのでそう大きな時間的開きはないと考えられる。

県内の地下式横穴の副葬品として平根の大形三角鏃もたびたび見られるがそれには細根式が共伴している場合が多い。しかし，今回のように，17基を通して大形の平根三角鏃ばかりで細根式の副葬が皆無という例は今まで見られなかった。しかも，本地下式横穴群に近接していた小木原地下式横穴群中，本群より編年的に若干古いとみられる2．3の地下式横穴から多量の細根式が出土しているのでその影響は当然受けているものと推察される。にもかかわらず17基全てが大形の平根三角鏃の副葬品で占められていたということは全くの偶然だろうか。やはり副葬品用として仮器的な性格を持ったものとして考えてもよいのではなかろうか。後日の問題としたい。

さて，この地下式横穴群のほぼ中央部に構築されていた3基の地下式板石積石室であるが，構造も規模もほぼ同様である。大きな規模に比して副葬品は3基とも少量で，最も多かった3号でさえ小剣2本，平根の小形圭頭鏃の3本に過なかった。しかし，地下式横穴群で普遍的に見られた鏃とは型式がはっきりと違い構築の年代差が表われていた。

最近調査された鹿児島県姶良郡吉松町永山遺跡の地下式板石積石室10号墳の周溝から多量の成川式土器が発見され編年の重要な資料となっている。④成川式土器の編年についてもいろいろ論議されてきたが一応5世紀中葉に比定されている。⑤この貴重な調査例は，同じ円形プランの石室を有する本地下式板石積石室の編年について重要な手がかりを与えてくれた。しかも，台地南西部で発見された一群の弥生終末期の土器群にはかなりの成川式土器が含まれている。これ等の土器群が発見された地点には，両種墓は構築されておらず，しかも住居址も確認されなかったと発掘担当者は述べている。従って考えられるのは，当然，地下式板石積石室・地下式横穴との関係でそれも祭祀的なつながりであろう。しかしながら今回の調査範囲内では，この関係を実証するだけの十分な資料は確認することができなかった。しかも板石積石室内からも直接関連のある土器片の出土もなかった。それでも，当市に隣接する吉松町の例や他の鹿児島のいくつかの実例が示すように，この2つの遺跡は

関係をもちながら平行して営まれたことが十分に推測される。従って当地下式板石積石室も5世紀中葉の成川式期に構築されたものと考えてよい。

このようにみてくると，当然，灰塚地下式横穴群は，地下式板石積石室に後続して築造されたもので，まず最初に17号等が構築されたものと思われる。人骨を調査された長崎大学の内藤芳篤氏は，人類学の立場から灰塚地下式横穴の被葬者を6世紀頃のものと推定されている。⑥

地下式板石積石室の埋葬法は，おそらく，北薩地方との関連のもとに構築されていたと思われるが，それはわずかな期間で程なく現在の西都市や国富町付近で発生したと考えられる地下式横穴の構築法が波及し，今まで大へんな労力を必要とした板石積石室は，簡便な地下式横穴にとって替わられたものと思われる。また，この頃，加久藤盆地に高塚が築造されたと思われるが，それは，地下式横穴の墳丘と見てよかろう。

さて，地下式横穴の閉塞方法について，先に紹介したが，竪壙上部閉塞型式の地下式横穴の分布は本県においてはえびの市内が中心であり，鹿児島県においては，大口盆地に見られるようである。しかもこの両地域は，何れも地下式板石積石室の分布地域でもある。そこでえびの市の場合をみると，閉塞石に用いられている石は，地下式板石積石室の99パーセントをしめている安山岩の扁平な石で地元で俗にヘゲイシと呼んでいる石と全く同じである。地下式横穴の葬法が波及し，当地方で最初に構築が取りいれられた折，そのままの形で受け入れられたが，また一方では，伝統的な板石積石室の石室を葺く方法が，地下式横穴に取り入れられ，より簡便な上部閉塞の型式が生まれたのではないかと考えている。しかしこれについては，まだ基礎的な研究が進んでいない上，乙益重隆氏のように地下式板石積石室を薩摩隼人の所産であろうとする考え方もあるのでこれ⑦等をふまえて今後の研究が必要となってくる。ここでは一応の仮説にとどめておきたい。

さらにまた，前記，弥生終末土器群や古式土師器についての性格づけは，今すこし時間をかけて考察しなくてはならない。

縄文関係では，西諸県地方にもかなりの遺跡が知られているが，その実態についての詳細は不明な遺跡が多く，その解明が急がれている。今回の調査では，地下式横穴の調査の過程で発見された関係上，十分な追求ができなかった。さらに層位も攪乱が多く不安定であった。しかしながら，縄文早期を代表とする押形文や轟式を主とする前期土器，また，後期の小池原式土器等を確認し得たことは，資料の少な

い本地方にとっては貴重な発見だったと言える。

今回の調査においては，長崎大学医学部解剖学第二教室の方々が自主的に協力参加していただき，その上，内藤芳篤教授からは御多忙中にもかかわらず玉稿をいただいた。また，本報告書を執筆するにあたって，乙益重隆氏，倉田芳郎氏からも丁重な御教示を受けた。併せてここに記し謝意を表する。

（田中　茂）

註

① 石川恒太郎「香禅寺遺跡」〔宮崎県文化財調査報告書　第四輯〕所収　（昭．３４．３）

② えびの市杉水流において耕地整理及び水路工事のとき，明治年間に２基，昭和１５年・１６年頃に４基以上が破壊されている。また，同市島内でも，近年砂利採集の際数基が消滅している。

③ 栗原文蔵「小林市尾中原発見の地下式横穴」〔宮崎県文化財調査報告書　第９輯〕所収（昭．３９．３）

④ 河口貞徳・河野治雄・池水寛治・上村俊雄・林敬二郎・出口浩「永山遺跡」〔鹿児島考古　第８号〕所収　（昭．４８．１２）

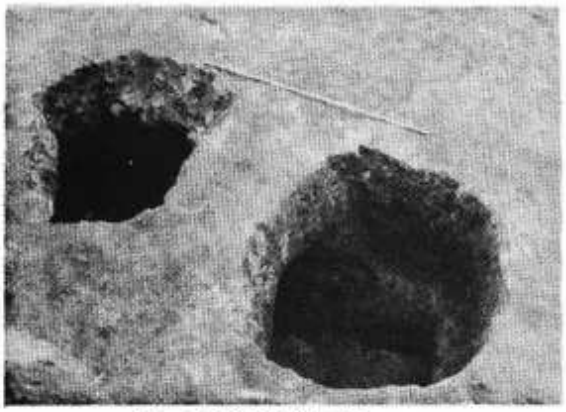
⑤ ④に同じ。

⑥ 宮崎考古学会第２回研究発表会「灰塚地下式横穴の人骨について」の発表内容から。

⑦ 乙益重隆「熊襲・隼人のクニ」〔古代の日本３　九州〕所収　（昭．４５．２．２８）

図　　版

地　下　式　横　穴

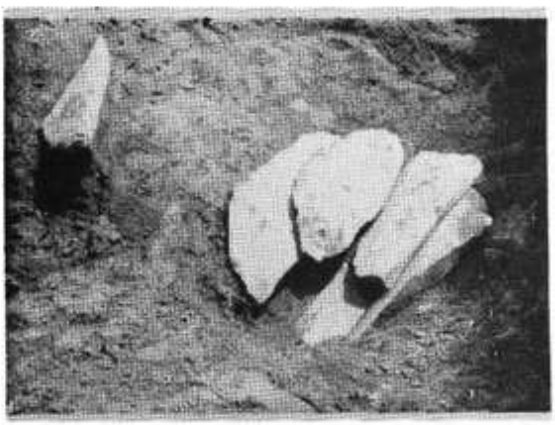


地下式横穴第5号

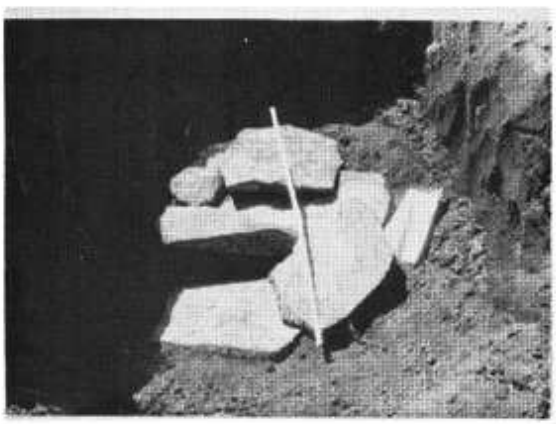
第5号玄室内

地下式横穴第6号竪壙蓋石

第6号副葬品出土状況



地下式横穴第7号蓋石



第8号蓋石

地下式横穴第８号　剣の出土状況

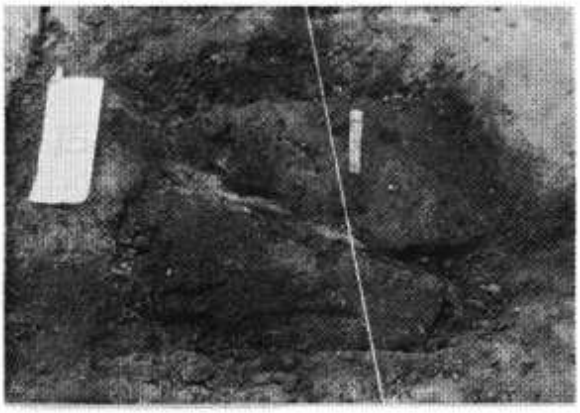
第９号蓋石

⑰ 地下式横穴第１０号蓋石

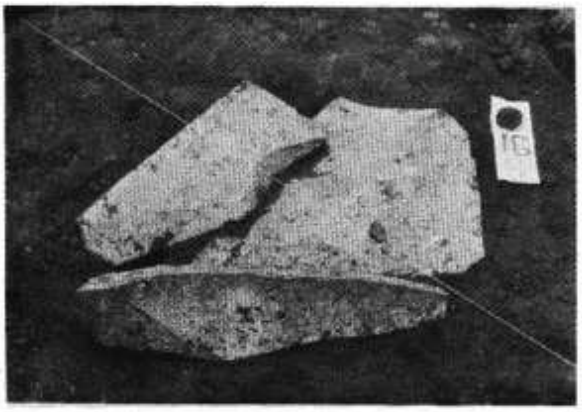
第１３号竪壙

地下式横穴
第１３・１４号の竪壙

１５号の蓋石

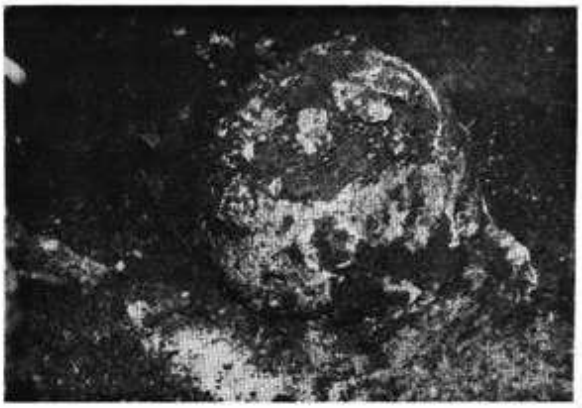


地下式横穴第１５号
流入土が充満している。



１６号の蓋石

１６号竪壙



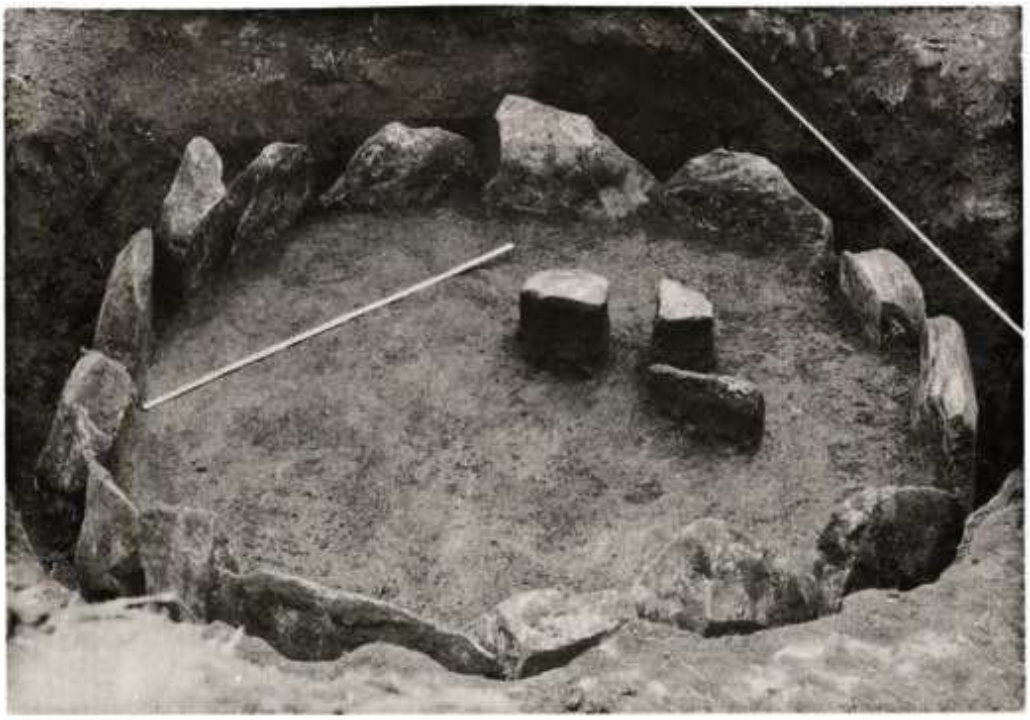
１６号玄室内の人骨

地下式横穴１７号の副葬品

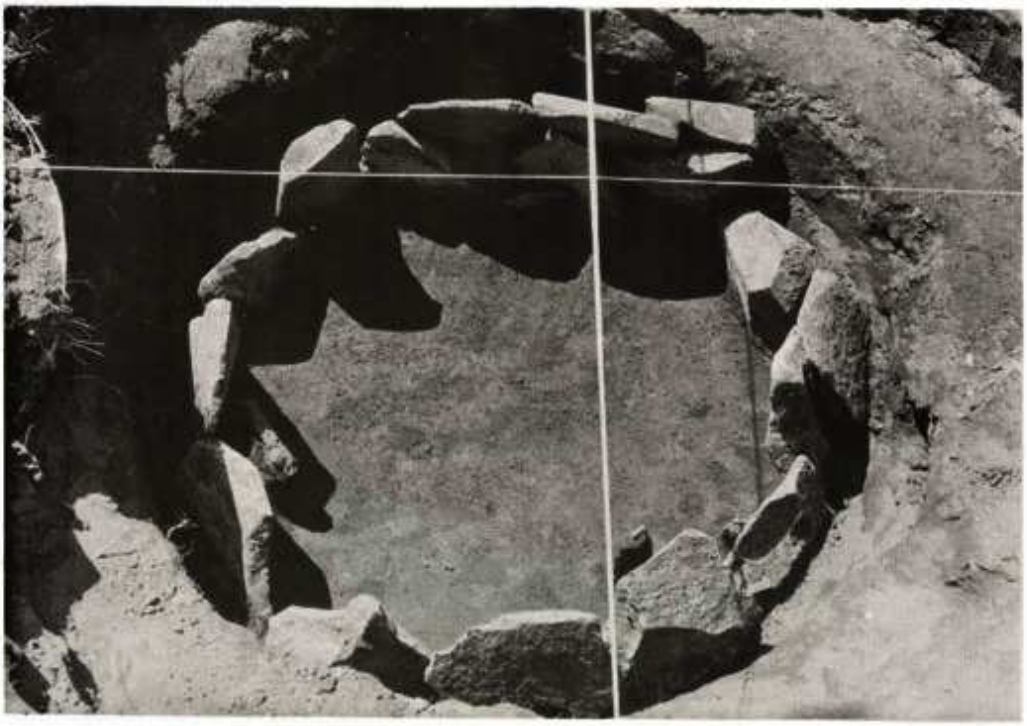
１７号の副葬品出土状況

地下式板石積石室

地下式板石積石室第1号



地下式板石積石室第２号

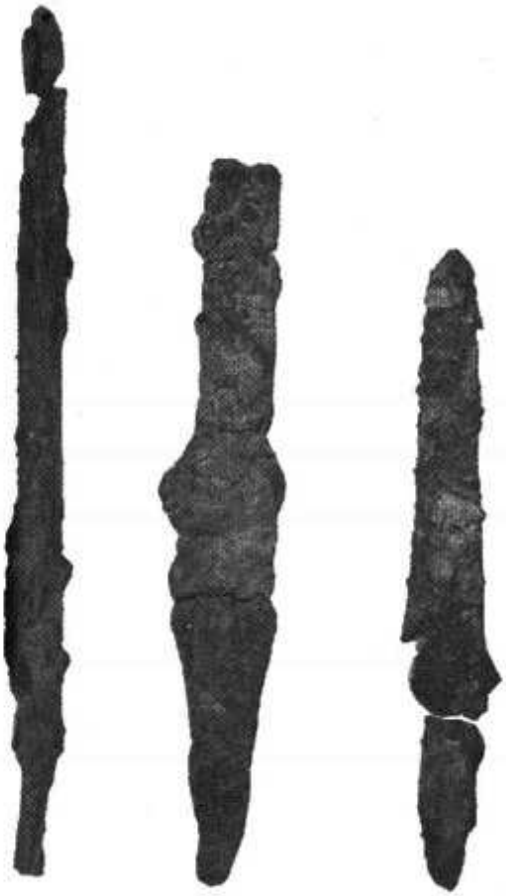


地下式板石積石室第 3 号

地下式板石積石室第３号の副葬品出土状況

出土遺物人骨

2号出土　剣・鉾



6号出土　剣

5号出土　鏃

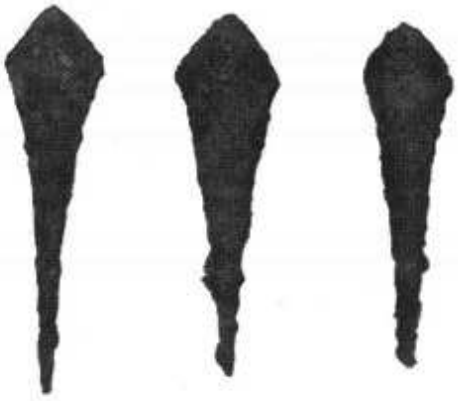
7号出土　剣

8号出土　剣

9号出土　剣

環頭大刀

8号出土　鏃



9号出土　鏃

１１号出土　直刀・剣

１２号出土　剣・鏃

１１号出土　鏃

１２号出土　鏃

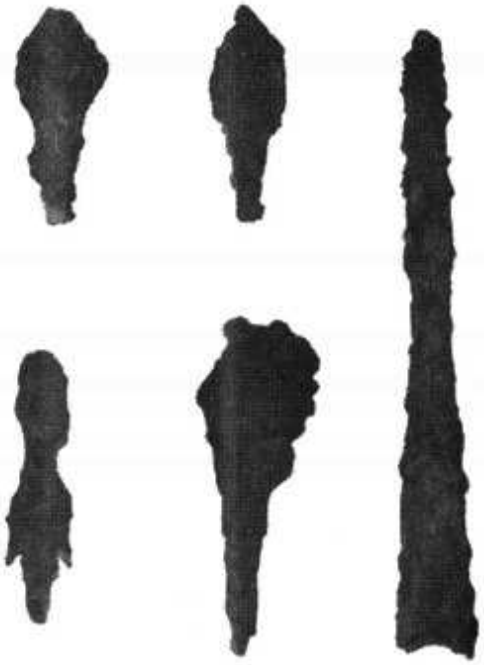
１３号出土　剣

１４号出土　剣

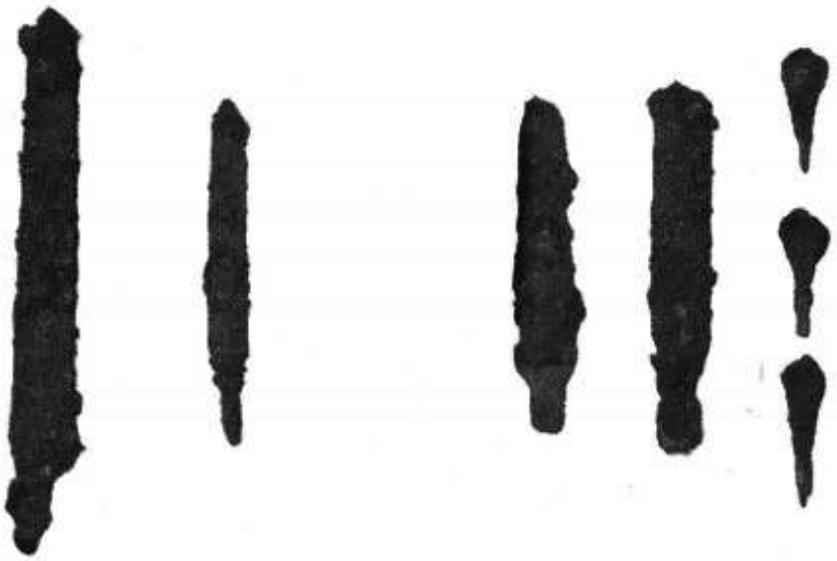
１５号出土　鏃

１５号出土　剣

１６号出土　剣



１７号出土　鏃・鉾



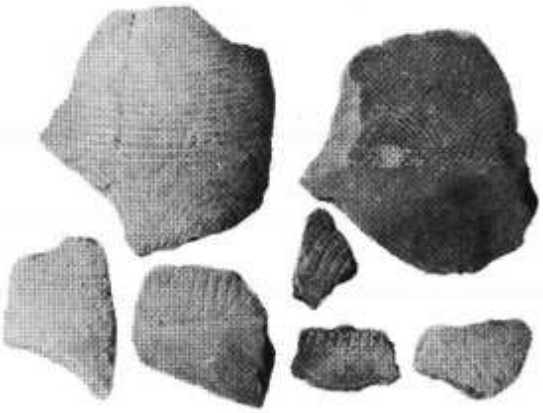
1号出土　剣　　3号出土　剣・鏃

地下式板石積石室出土品

高　坏　　コップ土器

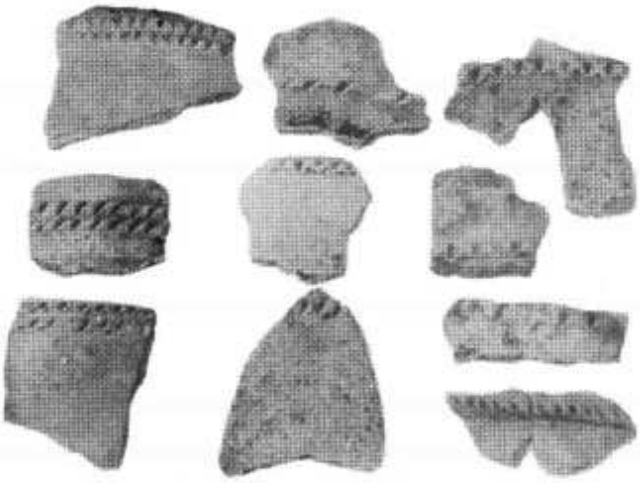
地下式横穴8号周辺より出土

地下式横穴8号周辺部より出土・高坏脚部



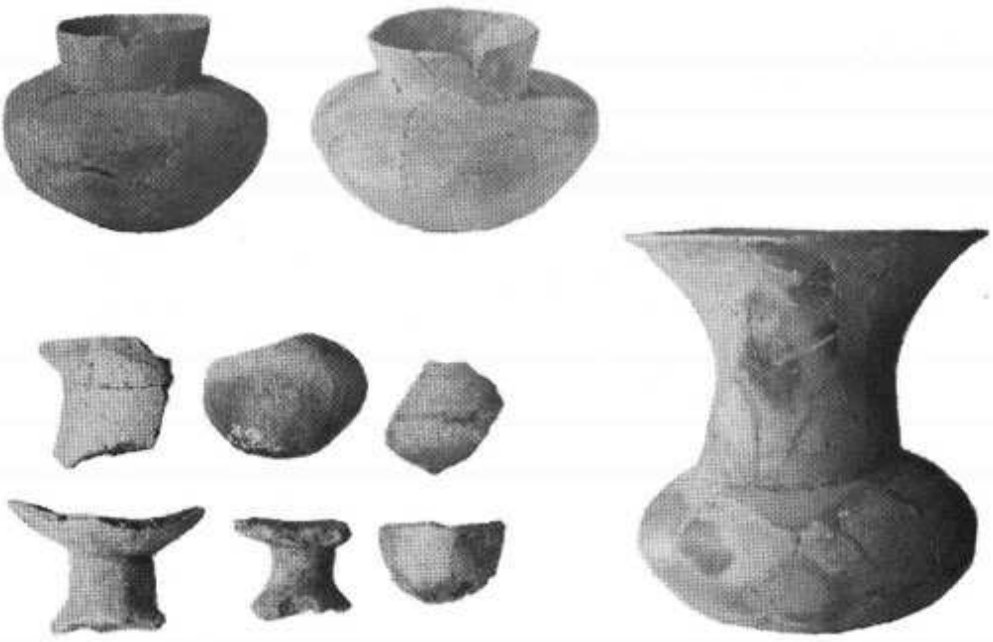
A 類

B 類



土器A類・B類

土器C類



土器C類

第4トレンチII区土器出土状況

4号人骨（男性，壮年）

5号人骨（女性，壮年）

地下式横穴9号出土　　人　骨

九州縦貫自動車道
埋蔵文化財調査報告
(Ⅱ)
灰塚遺跡

発行　昭和49年3月30日
編集　宮崎県教育委員会文化課
印刷所　東和プリント
宮崎市和知川町TEL 23—3992